歯科診療バス「ハルちゃん号」

JKSH

２００６年4月１８日

歯科診療バス「ハルちゃん号」

目　　次

ある歯フェチの手記 …… 5

夏休み …… 15

キュイ〜ン・バージン …… 31

歯科診療バス「ハルちゃん号」

　恐怖の歯科治療がやって来る …… 55

　迷惑なバス …… 81

　アイドルの虫歯 …… 111

カルテ …… 137

歯科診療バス「ハルちゃん号」

ある歯フェチの手記

ぼくはこのＳ町にある聖姫女学院に勤める国語の教師だ。聖姫女学院は中学校と高校をもち、Ｓ町だけでなく県下からひろく女生徒が集まってくる名門お嬢様学校だ。もう教師になって１０年になる。ぼくは国語を教えるほかに、保健の先生とともに女生徒の健康管理の担当でもある。けれど別に教育に情熱を持っていたわけでもなく、大学２年までは教師になろうなんて考えてもいなかった。この手記では、そんなぼくが教師になった理由と最近ぼくが楽しみにしているものについてお話ししようと思う。ぼくが教師になった訳は‥‥‥、

その性癖に気付いたのは小学校５年生くらいの頃だったろうか。ぼくの通っていた小学校は２学年ごとにクラス替えがあり、５年生と６年生は２年間同じクラスメイトということになる。５年生になってクラスがいっしょになった子に服部加世子がいた。その子は、目がぱっちりとしていて卵形の可愛い顔をもち、いつも髪をツインテールに纏めていた。紺の制服もオーダーメイドのようによく似合っていた。ぼくの初恋である。

だが内気でクラスでも目立たない存在だったぼくは、そんな彼女に声をかける勇気もなく、彼女が友だちと楽しそうにおしゃべりしているのを眩しそうに見ているだけだった。

あるときクラスで席替えがあり、あこがれの加世子のすぐうしろの席となったぼくはドキドキしていた。同級生の何人かはすでに胸が膨らんでいてブラジャーをしているものもいた。加世子もそのひとりである。制服の上着を脱ぎ白のブラウスだけになると、ブラが透けて見え、ぼくは胸が高鳴った。授業中も上の空で、透けて見える加世子のブラのホックやストラップを見ていた。学校へ行くのが楽しみになった。

そしてある昼休み。給食を食べ終わって加世子が友だちと前の日のテレビドラマの話題を話していた。夢中になって笑ったり、おしゃべりをしている彼女たちをなにげなく見ていると、口が大きく開けられたり、閉じられたりしていた。加世子の口の中にキラリと光るものがある。おしゃべり相手の陽子の口の中にも。よく見るとふたりとも一番奥の両側の歯が、いまもっている知識でいえば６歳臼歯だろう、大きく銀の詰め物がしてあった。あこがれの加世子の左側の６歳臼歯はすべてが銀歯で覆われていた。彼女たちの口の中には小窩裂溝が茶色く変色した未処置の虫歯もあった。それを見たぼくは訳もなく心臓がバクバクとしてきて、萌えてきた。あんな可愛い加世子や陽子に穴の開いた治療していない虫歯があるなんて！　そして加世子と陽子の歯がもっとよく見えるようにと、気付かれないように目を凝らした。

加世子も陽子も上顎も下顎も奥歯の多くに銀の詰め物がしてあった。彼女たちが歯科検診のあと『治療勧告書』をもらっていままで何度も歯医者に虫歯治療を受けに行ったことも知っている。ぼくらの年代は虫歯の洪水と呼ばれた世代でもあり、治療を受けたことがない子というのは皆無といってもいい世代だったので、これが普通といってもよかった。

ぼくも当然治療を受けていた。が、ぼくは比較的歯が丈夫で、いまにいたるまで６歳臼歯４本を治療しただけだ。でも乳歯のときは奥歯のすべてに治療を受けていた。治療台にすわって女歯科医さんがドリルを構えてぼくの口に入れるときに、ぼくは萌えた。さらに隣の治療台でキュィーンと虫歯を削られ、痛がって泣きながら治療を受けている少女を見たときは、もっとドキドキして萌えていた。

ぼく自身の歯科治療、その際に見た少女の虫歯治療を思い出したことといま加世子と西出陽子の虫歯治療痕を見たことによって、ぼくは女の子の歯に、特に虫歯と銀歯に興奮する、ということに気付いた。そうぼくは歯フェチだったのだ。

それからはクラスメイトと話すときは、気付かれないように、けれどしっかりと相手の歯を見るようになった。男の子たちの歯にはまったく興味が湧かなかった。だけど女の子たちの歯を、特に虫歯や銀歯を見たときは、すごく興奮した。目に焼き付けて忘れないようにした。ついには、保健の教科書や図書館に置いてある歯や虫歯に関する本を読んで、歯式を憶え、ノートにクラスメイトの女の子たちの歯式をメモに取るようになった。家に帰って、その女の子たちの歯式の書いてある秘密のノートを見るとき、とても興奮し、このうえない幸福を感じた。

６年生になってクラスの役員を決めるとき、内気なぼくが自ら保健委員をかってでた。そう歯科検診の際、保健委員は学校歯科医と保健の先生のお手伝いをすることになる。当然保健室への出入りも容易になる。いままでも保健の先生の目を盗んで女の子たちの『歯科検診票』を盗み見ていたぼくは、これからはより簡単に女の子たちの『歯科検診票』を見ることができると、密かにうれしかった。しかも女子の保健委員はあこがれの加世子だった。彼女と話す機会も増えるだろうし、なにより加世子の虫歯や虫歯の治療痕を見やすくなる。ぼくはまた萌えていた。

歯科検診の日、歯科衛生士のお姉さんがライトをクラスメイトや同じ学年の子たちの口にあて、学校歯科医がに大きく口を開かせ、デンタルミラーと探針を突っ込み、歯式を呼び上げる。女の子たちの歯が調べられ、虫歯をあらわすCや処置をあらわす〇が聞こえると、萌えた。歯式を書き取る手が震えた。なによりあこがれの加世子の歯式が呼び上げられたときは、最高に萌えた。いまでもそのときのノートがあり、加世子の歯式を見るとそのときの興奮を思い出す。

歯科検診の結果、夏休み前に担任が虫歯のあった子に『治療勧告書』を渡すときの手伝いをする際も萌えた。担任に名前を呼ばれて教壇に来て、ぼくから『治療勧告書』をもらう女の子たちの嫌そうな顔。たまらなく興奮した。また夏休み明けに『治療証明書』を出さずに、担任や保健の先生に叱られる女の子たちを見ると、歯医者さんが嫌いなんだな、治療されるときはいやがって泣きながら治療されているのかな、とまた萌えた。

中学生、高校生のときも、ぼく自身がかってでて保健委員となり、保健の先生と仲良くなって保健室に入り浸りとなり、かたっぱしから女の子たちの『歯科検診票』を見て、ノ

ートに写していった。

中学生になってカメラを憶えたぼくは、写真部と新聞部に所属した。女の子たちの口腔内を写真に撮りたいがため､冗談などをいって女の子を笑わせたりするようになっていた。ぼくなりに女の子に相手してもらえるように努力したのだ。その甲斐あってクラスメイトたちを、女の子たちを写真にとった。展覧会に出す、取材で使うという口実で、ポートレートを撮り、相手が気をゆるしたスキに、さりげなく口の中を写真におさめた。撮った写真は秘密の歯式ノートに貼り付けた。

中学校２年生の頃、好きだったクラスメイトの前田圭子が『治療勧告書』を渡されたときは、圭子と友だちの会話を耳をそばだてて聞いた。放課後に歯医者に行くという言葉を聞くと、ひそかにあとをつけ、歯医者に入るのを見届けた。圭子が行った中学校のそばの歯科医院は外から治療の光景が丸見えになる歯医者だった。ぼくは物陰に入り、双眼鏡で圭子が治療台に座るのを確認した。そして望遠レンズをカメラにセットすると、虫歯治療を受ける圭子を写真に撮った。治療中、圭子は虫歯を削るのが痛いのか、脚をパタパタと動かしたときは心臓が早鐘を打ち、カメラを持つ手が震えた。カメラがぶれないよう必死で興奮を静めた。治療が終わって痛そうな顔で頬をハンカチを持つ手で押さえ涙目で歯科医院の玄関を出てくる圭子の姿には、写真を撮るのを忘れるほど興奮し、萌えた。

そんな学生生活を高校生になっても続けていたぼくだが、高校も２年生の頃になると進路を考える必要が出てきた。そのころは真剣に歯医者になろうと思った。そうすれば、毎日好きなだけ若い女の子の口腔内が見られ、若い女の子、いやより具体的にいえば女子高生や女子中学生の虫歯を、ただでさえ痛い虫歯をドリルで削り、痛がるのを無理矢理我慢させ、「そうだね、痛いね。でもこんなになるまで虫歯をほおっておいた君が悪いんだよ。もう少し我慢しようね」と叱りつけ、泣きながら治療を受けさせることができると思っていた。

けれどもぼくの成績は学年でもうしろの方で、特に生物など理科系の成績が悪く、国立の歯学部には行けそうにない。かといって、平凡な三流サラリーマン家庭のぼくの家の資力では私立の歯学部の入学金、授業料は払えそうにない。

結局、地元の三流私立大学の文学部日本語・日本文学科に入った。

大学生になると高校生までと比べて自由度が増えたが、大学では歯科検診もなく、平々凡々、悶々とした日々を過ごしていた。授業に力を入れるわけでもなく、かといってアルバイトでたくさんのお金を稼いでいるわけでもない。しごく平凡に学生生活を送っていた。高校時代までにため込んだ秘密のノートは十何冊にもなり、たまに手に取り見返すばかりだった。大学に入った日に友だちになった男子学生が「俺、卒業したら教師になりたいんだ」と、教職課程をいっしょに受けようと誘ってきた。そのときはあまり乗り気ではなかったのだが、つきあいで教職課程を受講することにした。案の定、授業は面白くなく、２年生は受講しないでおこうと思った。

ところが大学２年生になったばかりのある日、２年生の受講登録の締め切りがあさってに迫っていた日に、突然閃いたのだ。教師になれば、中学生や高校生の女の子の歯や口腔が見られるということを。

それからは、授業に、特に教職課程に身を入れて講義を聴きだした。絶対、高校２級、中学１級教職免許を取るとこころに誓って。それと同時に私立の女子校を探し始めた。教員募集がいつあるのか、欠員補充なのか、どのくらいの規模なのか、などなど。公立の高校や中学だと男子生徒もいるし、なにより転勤がある。その点、私立の女子中学や女子高校なら当然女生徒しかいないし、転勤もない。ぼく自身の人生で初めてといっていいほど真剣に勉強した。

晴れて教師になったら、中学生や高校生の女の子の歯や口腔内をより容易に見ることができるように、保健の先生の補助をする健康管理の担当になりたいと思った。それで学校保健や医学知識、特に歯学知識も勉強しだした。歯科衛生士関係の教本や歯科保存学、歯内療法学、小児歯科学などの本を買った。これらの本はしがない文学部学生のぼくにとってはとても高く、本の購入資金を得るためアルバイトにも精を出した。

また歯の検診を受けに大学近くの歯科医院に行き、歯石を取ってもらった歯科衛生士と仲良くなった。彼女からさりげなく歯学、歯科衛生士学の知識を仕入れた。本を読んで理解できなかった部分を補うためだ。

こういった努力が実ったのか、国語教師の高校２級、中学１級教職免許試験に合格し、さらに求人案内や大学の採用情報室でかねてからねらっていた聖姫女学院の採用試験にも合格した。

首尾良く聖姫女学院に採用されると、保健の先生に近付いて健康管理の担当にふさわしいという印象を植え付け、採用の翌年に健康管理の担当にしてもらった。それ以来健康管理の担当を続けている。もちろん本職の、といってもある意味仮の姿だが、国語の授業にも力を入れている。授業中女生徒たちの息抜きのタイミングをうまく入れるようにし、受験のポイントも的確に彼女たちに伝わるように努力している。おかげで女生徒たちには面白くて楽しい先生で通っている。あくまで真の目的を隠すためなのだが‥‥‥。

そして一番の目的であった女生徒たちの歯や口腔内を見ることや歯式はというと‥‥‥、

健康管理担当になってからすぐに女生徒に勉強や体育に励んでもらえるよう健康を維持することが大事と職員会議で主張し、学校保健システムの購入のための予算を獲得した。真の目的を隠し、学校保健のソフトと歯科検診結果管理ソフトをコンピュータとともに導入し、女生徒の歯の健康状態、歯式、それに現在では口腔写真まで管理できるようにした。密かに自宅のコンピュータにも同じ歯科検診管理ソフトをインストールし、学校からデータを持ち出して保存している。

聖姫女学院は、中学校、高校とも各学年３クラス１０５名だから、全学年で６３０名になる。それが１０年分で、１６８０名のデータがたまっている。高校時代までの秘密のノ

ートも入力が終わっている。これは誰にも見せられないぼくの宝だ。当然パスワードで管理している。

これがぼくが教師になった理由だ。中学生や高校生の女の子の歯、特に虫歯や銀歯、や口腔内を見ていたいために教師になった。
そんなぼくに最近もうひとつの楽しみができた。それは‥‥‥、

聖姫女学院のそば、５００メートルほど東に行ったところに姉歯歯科医院がある。姉歯歯科医院はＳ町で古くから開業している歯科医院で、聖姫女学院の学校歯科医をお願いしている関係もあって、健康管理の担当になってから歯科検診の打ち合わせなどで、ぼくもたびたび訪れていた。姉歯先生は温厚な紳士で、聖姫女学院でも歯科検診からそのまま治療を受けている女生徒も多かった。
それがいまから３年前にリニューアルした。姉歯先生の娘さんである姉妹が歯科医院を引き継いだのだ。歯科医院の名前を『姉歯歯科クリニック』とあらため、歯科医院も新しく立て直した。それまでの姉歯歯科医院は、歯科ユニットが３台で、隣とはしきりもなく、姉歯先生のほかには歯科衛生士の奥さんと受付の歯科助手がいる医院だった。
姉歯歯科医院を引き継いだ姉妹は２歳違いで、姉の名前は千穂といい歯科衛生士で、妹の名前は智穂といい歯科医師だ。あと高橋香里奈、加藤真唯とふたりの歯科衛生士がいる。歯科ユニットはお父さんの姉歯先生の時と同じ３台だが、最新のものに変わっている。診療室はパーティションで区切られ、個室になっている。
リニューアル・オープンしたその日、ぼくはあいさつをかねて、学校歯科医をお父さんの姉歯先生から引き継いでくれるように頼みに行った。妹の智穂先生はこころよく引き受けてくれた。
ぼくはお父さんの姉歯先生の時代よりも多く、姉歯歯科クリニックに打ち合わせや企画と称して姉妹に会いに通った。

まもなく妹の智穂先生の治療はお父さんに勝るとも劣らずうまいと評判が立ち、盛況となった。歯科衛生士である姉の千穂先生もスケーリングがうまく歯石を取る際に痛くなく出血も少ないと好評だった。聖姫女学院の女生徒たちも前にもまして姉歯歯科クリニックにかかるものが多くなった。
だがしばらくすると、聖姫女学院の女生徒が治療を受けに行き、智穂先生と歯科衛生士の千穂先生が担当する治療台に座ったときは、半べそでがまんしてスカートが捲れるのもかまわず治療され、治療が終了すると、目を赤く泣き腫らして、頬をハンドタオルやハンカチで押さえながら待合室に出てくることが多いという噂がたった。
そんな噂を聞いてぼくはまたもや萌えていた。〝それが本当なら女生徒のその姿を是非見てみたいものだなぁ‥‥‥〟

姉歯歯科クリニックとなって１年が過ぎ、妹の智穂先生と姉の千穂歯科衛生士が担当する２回目の聖姫女学院の学校歯科検診のとき‥‥‥。聖姫女学院中学校の女生徒の歯科検診が終わり、聖姫女学院高校の女生徒の歯科検診が始まろうとする短い休憩時間の合間に、智穂先生と歯科衛生士の千穂先生がさりげなく「あなた歯のことずいぶんお詳しいんですのね。学校保健の担当にしては詳しすぎますわね。歯科医療関係者でもないのに‥‥‥。知ってますわよ、あなたが自宅のコンピュータにこの学校の女生徒のデータをすべて入力されてるってことを‥‥‥」といった。

ぼくは目を見張った。″なぜ、知ってるんだ！？″

「今度の日曜日、うちの休診日にいらっしてくださるわよね。午前１０時にお待ちしておりますわ」謎めいた笑みを浮かべて姉妹は、ぼくにいった。ぼくは拒否することもできず、頷くよりほかなかった。″どうしよう。学校にこのことをバラされたら‥‥‥″

姉妹は何ごともなかったかのように聖姫女学院高校の女生徒の歯科検診を始めた‥‥‥。

重い気持ちのまま歯科医院に行くのは、はじめての経験だった。いままでは、隣の治療台で若い女の子が泣きながら痛い虫歯治療を受けているのを見られるかもしれないと期待に胸を躍らせて行くのが普通だったのに‥‥‥。″歯医者が嫌いな女の子が歯医者に行くときの気持ちもこんな感じなんだろうか‥‥‥″そんなことを考えながら指定された日曜日の午前１０時に姉歯歯科クリニックに行くと、約束どおり姉妹が待っていた。

姉歯歯科クリニックは居住部分はあるが、姉妹の両親はＳ町内の１０階建てのマンションに、姉妹は同じＳ町内の別のマンションに暮らしている。だから姉歯歯科クリニックは休日や夜は無人となる。

「あなた、歯に、特に若い女性の歯に、そうね～女子高生や女子中学生の虫歯や銀歯にフェティシズムを感じる方でしょう？　隠してもだめよ、証拠を握ってるんだから」

″やっぱり、バレてた！！″ぼくが歯フェチであることが姉妹にわかってしまっていた。″でもなぜわかったんだろう‥‥‥″

「あなたが歯フェチであることがわたしたちになぜ分かったかは内緒」

「歯フェチだからこそ、これからわたしたちが話すことは、あなたにとって悪くないことだと思うの」

「あなたが秘密を守ってくれる方だと信用して、このことをお話しするのよ」と姉妹がこのクリニックの秘密を教えてくれた。

姉歯歯科クリニックの３台の治療台のパーティションの区切りは妙に大きい。パーティションというよりも壁といった方がいいほどだ。前々から不思議に思っていた。

実はそこに秘密があったのだ。姉妹が案内してくれ、クリニックの地下に通じる秘密の

階段をたどる。たどった先は、あのパーティションの中だった。パーティションの内部は大人ひとりがゆうゆうと座れるだけの２畳ほどのスペースがある。そしてそこからは目の前に治療台が丸見えになっている。さらに天井へと通じる階段があり、２階と１階の間の天井部分も大人が座ってあたまのつかえないだけのスペースがあり、下をみると天井から治療台が丸見えである。

そう姉歯歯科クリニックは、診療室が丸見えの歯科医院なのだ。マジックミラーを使っているようだが、診療室にはマジックミラーの部分に鏡などはない。どういった仕掛けになっているのか見当もつかない‥‥‥。

それから姉妹はこんなことをぼくに告げたのだ。

「わたしたち、秘密の歯フェチクラブを運営しているの。会費は１年２４万円。つまり１ヶ月２万円ってことね。ここまでお話したんだから、当然会員になってくださるわよね。もちろん秘密は厳守するわ。会員になってくれたら、いま見ていただいた覗き部屋から、あなたの場合は特に女子高生や女子中学生になると思うんだけど、彼女たちの治療の光景を覗いていただいていいのよ。女子高生や女子中学生が待合室にいたら、携帯電話にメールを送るわ。順番がいつ来るかも含めて。ただし撮影や録音は禁止。でもお望みなら、女子高生や女子中学生が治療を受けてるところを隠し撮りしてビデオかＤＶＤを作り１本１万円でお譲りするわ。治療中の音のテープや治療中の写真も、もちろん口腔内のデジタル写真もＯＫよ」

「それに女子高生や女子中学生の治療のときは、あなたがもしお望みなら、タービンの先から出る水の量を少なくして歯を削り、痛い歯科治療を受けさせることもできるのよ。だけど想像を絶する激痛よ。いままでも会員の方のリクエストでそういった治療をしたこともあるわ。患者さん自ら痛い治療を望む事は皆無だけれどね」

そうだったのか‥‥‥。うちの女生徒が治療された後、頬を手で押さえ泣きながら待合室に出てくるというのは本当だったんだ！　けれども秘密の歯フェチクラブかかわっているのは姉歯姉妹だけで、あとふたりの歯科衛生士の高橋香里奈、加藤真唯は何も知らないらしい。ぼくはいま姉妹が打ち明けた秘密に胸がドキドキして萌えていた。入会しない手はない。そう思った瞬間、姉妹に次のように聞いていた。

「‥‥‥小学校高学年、５年生や６年生の女の子の治療のときも知らせてもらえるかな？」

「もちろん、お望みならお知らせするわ」

こうしてぼくは、姉歯歯科クリニックの秘密の歯フェチクラブの会員になった。撮ってもらったＤＶＤももう３０本にもなった。もちろん治療中の写真や口腔内デジタル写真もたくさんたまっている。

それにしても、姉妹がなぜ秘密の歯フェチクラブを運営しているのか？　お金が必要だからだとは思えない。一度姉妹に尋ねてみたのだが、意味ありげな目でだまって微笑むばかり。教えてはくれなかった。

また女子高生や女子中学生の治療の光景をこちらから勝手に見に行くことは許されてい

ない。必ず姉妹からのメール待ちだ。ほかの会員も同様らしい。けれど不思議なことに覗き部屋でほかの会員といっしょになったことがない。何人の会員がいるのかもわからない。姉妹がほかの会員と会わないようにうまく調整しているのか‥‥‥。

今年の聖姫女学院の歯科検診が終わって１０日あまり‥‥‥。昨日はうちの中学校の２年生の戸田彩香の治療を見た。あの泣き顔、あの暴れ方、途中でベルトで縛られ拘束治療を受けていた。萌えたな‥‥‥。いまも目に焼き付いている。２本の虫歯を治療されていた。彼女はあと２本虫歯があったはず。今後の治療も楽しみだな。それに注文してあるＤＶＤのできあがりも楽しみだ。

‥‥‥いまは学校歯科検診が終わったばかりの季節だし、久しぶりに他の高校や中学校、小学校の女生徒の虫歯治療を見たいものだ。今度、姉妹にお願いしてみようか‥‥‥。

ブルル、ブルル。

マナーモードにしてある携帯が鳴った。姉歯歯科クリニックからメールだ。うちの高校の２年生の尾崎恵梨香が初診の受付に来ているらしい。尾崎恵梨香は‥‥‥、たしか処置歯が４本、未処置歯の虫歯が３本あったな‥‥‥。あたまの中の記憶をたどって、コンピュータの画面に映し出された尾崎恵梨香の口腔状態を再現する。治療は午後３時４５分からのようだ。いま３時１５分か‥‥‥。よし、教材会社との折衝に行くと、学務主任をごまかして学校を出よう。

初診は特に興奮する。なぜなら虫歯を削るのが初診の日から始まることが多いから、女子高生や女子中学生が受ける痛みもより強いからだ。今日の治療もビデオに撮ってもらいＤＶＤ化してもらうよう、さらにタービンの先から出る水の量を少なくして歯を削ってくれるようメールを返した。

ぼくはいま姉歯歯科クリニックの第２診療室の天井裏にいる。下の治療台が丸見えだ。智穂先生と歯科衛生士の千穂先生が尾崎恵梨香の虫歯の治療をしている。尾崎恵梨香の口の中にタービン、バキューム、スリーウェイシリンジが入っている。唇はデンタルミラーで捲り上げられ、患歯がよく見える。虫歯を削られていて凄い痛そうな顔だ。もう半べそになっている。絶えず脚や膝がピクンピクン、パタパタとしている。ぼくがメールで頼んだとおり、タービンの先から出る水の量を少なくして歯を削ってくれているようだ。

ヘッドホンから聞こえるタービンの音や尾崎恵梨香の泣き声がいい。智穂先生や歯科衛生士の千穂先生が宥めたり叱ったりする会話もいい。治療室の音が秘密のアンプで増幅され、この天井裏の部屋やパーティションの間の部屋のヘッドホンに流れるようになっている。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュイ、キュイ、キュィーン、キュィィィーーン。

コォー、コォォォー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーーー。
「ふぅん、ふんふん、ひはい！！　ひはい！！　ほほひゅひゅひへー！！　あんあん」
「はぁーい、恵梨香ちゃんもうちょっとがまんしようねー」
「いま、深いところ削ってるからねー。そうねー、ちょっと痛いわねー。でももう少しがんばろーね」
「うわぁぁぁーーん、ひはい！！　ひはい！！　はふへへー！！　あっあっ、えっえっ、ヒックヒック」
「虫歯つくっちゃった恵梨香ちゃんがいけないのよー。こんなになるまでほおっておくなんて！　ダメよー。これからはちゃんと歯磨きしようねー」
「恵梨香ちゃん、恥ずかしぃんだー。パンツ見えちゃってるぅー。治療中はおとなしくしようね」
尾崎恵梨香は虫歯を削る痛みで、膝がピクン！ピクン！と動き、さらには脚をパタパタと動かし、制服のスカートが捲れ上がっている。姉の歯科衛生士である千穂先生が注意するが、尾崎恵梨香の白いパンツが丸見えとなっている。
キューン、キュイーン、キュイーン。
コォォォーー、コォーー。ジュポポポーー。
ぼくは、尾崎恵梨香が受けている歯科治療を目で見、耳で聞き、萌えに萌えた。尾崎恵梨香はもう半泣きになっている。なんてかわいい顔だ！！
１週間後にはＤＶＤが届く。自宅の５０インチの画面で見ると迫力があるだろう。けれど、いまこの生中継の臨場感にはやっぱりかなわないだろうな‥‥‥。十分に萌えさせてもらおう‥‥‥。

数ヶ月後の月曜日。

ハァハァ。
危なかった。もう少しで遅刻するところだった。夕べは、戸田彩香と尾崎恵梨香のＤＶＤを見ていて、つい夜更かしをしてしまった。
机の上に『〇〇新聞』が届いている。この新聞は月曜日の教育関連の記事が充実しているので、学校の方へ届けてもらって読んでいる。どれどれ。今日の記事は‥‥‥。
『Ｓ町、姉歯歯科クリニックに強制捜査－女子高生、女子中学生の虫歯治療の様子を盗撮の疑い－』
新聞の社会面トップに活字が踊っていた。
〝まさか〟という感情と、〝とうとう〟という感情が湧き上がってきて、力が抜け新聞を取り落としそうになる。

職員室の入り口に足音が聞こえ、２人の見知らぬ男たちが入ってくる。川合先生になにか尋ねた。こちらを指差している。大股でこちらへ近づいてきて、いすに座るぼくを囲むように立ってこういった。
「警察のものですが・・・・・・」

夏休み

「ああ、目が疲れた・・・・・・」

ここは純姫女子学園の職員室。

さっきから夏休みの集中補講の教材を作るため、机のパソコンに向かって一心不乱に入力をしていた黒川恵梨子先生だが、さすがに１時間も集中していると目が疲れてくる。

パソコンから目を離し、腕を上げ背を伸ばしながら職員室の窓から校庭を見ると、午後の眩しい日差しのもとでクラブ活動をしている体操服姿の少女たちや下校していく少女たちが見える。夏の制服姿で歩く女生徒たちの楽しそうな表情を見ていると、自分の学生時代を思い出す。

「屈託ないなぁ～。いいわよね、あの年頃って」

職員室は冷房が効いていて快適そのものだったが、ここ数日は気温が３０℃を超えて暑い日が続いていた。夏は盛りを迎えようとしていた。

今日はもう７月１５日。あと数日で夏休みに入る。

「もう、夏休みね」

そんなことをぼんやり考えながら、机の方に顔を戻してくると、若槻希美の『治療完了証明書』が目にとまった。そのほかに富田芽以や堀北結衣など、虫歯治療の勧告を受けた女生徒たちの『治療完了証明書』も置いてある。治療が終わるごとに女生徒たちが持ってきたものだ。これから整理をした上で保健室に持って行き、保健の先生に渡さなければならない。

「希美ちゃん、よくがんばったわね」

口をついてそんな言葉を呟いた。恵梨子先生自身も歯には苦労してきているから、虫歯のひどい女生徒が治療を完了させると、ついそんなひとりごとが出てしまう。

「舞依ちゃんはまだ、皓歯大の佐和島先生のところに通っているのよねぇ・・・・・・。もう３ヶ月にもなるけど、まだまだかかりそうね」

とクラスの子たちの『治療完了証明書』を見て、近野舞依のことを思った。

″そういえば、わたしの学生の頃って、夏休み前に『治療勧告書』をもらってたんだわ″

″で、それをもらったとたん、それまでのうきうきした気分が萎えて、憂鬱になってたんだ・・・・・・。ああ、また今年も歯医者に行かされるって思って・・・・・・″

恵梨子先生は小さい頃から歯が弱くて虫歯が多く、幼稚園、小学校から高校までほぼ毎年『治療勧告書』をもらっていた。

″そういえば、あのときは・・・・・・″

ふと、中学校１年生の夏休みに受けた治療を思い出した。

″あれで歯医者さん怖くなっちゃって、虫歯放置して高校３年生まで治療に行かなくなっちゃったのよね・・・・・・″

「はい、みなさん静かに！」
「明日からは楽しい夏休みですね」
「はぁーい！」「やったぁー！」「うれしい！」
「はいはい、静かに！　静かに！」
　パンパンと手を叩きながら、担任の戸部あさみ先生がみんなに注意する。
「でも夏休みだからといって、だらけた生活をしたらダメですよ。勉強の時間と遊びの時間、それにおうちのお手伝いの時間をちゃんと決めて、規則正しい生活を送らないといけませんよ」
「はぁーい」
〝明日から夏休みだぁー。今年もママの実家に連れて行ってもらえる。楽しみ！　いとこの洋子ちゃんと何して遊ぼうかなぁ～。あっ、でも今年から中学生だし、テニス部の練習もちゃんと参加しなきゃぁ～〟
　黒川恵梨子はこの春に春野中学校に入学し、はじめての夏休みを迎えることになる。まだセーラー服姿が初々しい。恵梨子も他のクラスメイトたちと同様にウキウキとした気分でいた。４０日あまりの夏休みは、中学生にとって毎日が新鮮で楽しいものなのだ。いろいろな遊びの計画が次から次へとあたまに湧いてくる。
「恵梨子、明日いっしょにお買い物に行かない？」
　隣の席の親友の水川ななえが声をかけてくる。
「うん、いいよ。行く行く！」
　ふたりとも自然と笑顔がこぼれる。
　そこに割ってはいるように戸部先生の声が一段と大きく聞こえた。
「‥‥‥健康には十分に気をつけて生活してください。ではこれから４月の歯科健診の結果で、虫歯があった人に『虫歯治療のお知らせ』を配ります。家に帰ったら、おうちの人に見せてください」
〝ああ、まただ‥‥‥。虫歯あったらやだなぁ～〟
「虫歯があった人は、夏休み中に必ず歯医者さんに行って、治療を受けてください。治療が終わったら、歯医者さんが証明を書いてくれますから、夏休み明けに先生まで提出すること。いいですね」
「はぁ～ぃ」
　みんな元気のない返事をする。
「では名前を呼ばれたら、前へ出てきて『虫歯治療のお知らせ』を受け取ってください‥‥‥」
「‥‥‥水川ななえさん」
「虫歯あった！　最悪～」
　ななえがいやいや立ち上がって『治療勧告書』を戸部先生にもらいに行く。

″わたしもあるのかなぁ～。ドキドキするぅ～″
　ななえが『治療勧告書』を受け取るのを見ながら、恵梨子は緊張していた。
「・・・・・・黒川恵梨子さん」
″やっぱり・・・・・・。まただ″
　恵梨子は嫌な気持ちで席を立ち、教壇の戸部先生のところにいった。恵梨子は小学校６年生だった昨年も『虫歯治療のお知らせ』をもらい、夏休みに歯医者に通ったのだ。
「はい、恵梨子ちゃん。虫歯が２本あるわよー。しっかり治療してね」
「はぃ・・・・・・」
　治療勧告書を受け取り、憂鬱な気持ちで席に戻る。
″今年も歯医者通いかぁ・・・・・・″

　放課後のテニス部の部活も終わり、その帰り道。
　恵梨子はななえや友だちと話したことを反芻していた・・・・・・。
「痛くないんなら、別に治療受けなくていいんじゃない？」
「そうよ。歯医者さんの治療の方がよっぽど痛いよ」
「私も虫歯あったけど、別に痛くないし、それに夏休みの勉強やクラブ活動が忙しいからたぶん治療しないよ」
「恵梨子もそうしなよ」
「そうだよ」
「う、うん」
　真面目だった恵梨子は、いままで治療勧告書をもらったら、必ずママに見せて夏休みに歯医者に通っていた。でも今年の夏休みは友だちに同調して歯医者には行かないでおこうと思った。

　夏休みに入って１週間が過ぎた。
　今日も恵梨子は体操着とブルマーの姿でテニス部の練習に参加していた。ランニング、素振り、先輩の練習試合のボールの交換、など結構忙しい。また今日は午後から夏陽中学校との練習試合がこの春野中学校のグランドで行われるからその準備もしなくてはならない。
　午前９時３０分から練習をはじめて、いつの間にか学校の時計台の時計は午前１０時３０分を指していた。
　夏の日差しは眩しい。手をかざし目を細め、なにげなくテニス部の顧問で担任の戸部先生の方を見ると、恵梨子の母親が来ている。何か手に紙のようなものを持っている。
″あれっ！　ママだ。全然気づかなかった。なんで先生と話してるのかなぁ～″
　そう思ってると、こっちにふたりでやって来る。
「恵梨子、さっ行きましょ」

「！？」
　恵梨子は訳がわからない。
「恵梨子ちゃん、お母さんに『虫歯治療のお知らせ』見せてないでしょ」
〝はっ！？　もしかして！〟
「ダメよー。ちゃんと見せなきゃ。お母さん、いま歯医者さんに予約を入れてきたんだって。午前１１時に診てもらえるそうだからいってらっしゃい」
「恵梨子、なんで虫歯あるの黙ってたの。歯医者さん、行きましょ」
　ママは、手に治療勧告書を持っていた。恵梨子は、〝バレちゃった〟と動揺していた。
「えっ！　でもわたし、クラブあるし・・・・・・」
「先生には許可もらったわよ」
「午後にまた参加して、ねっ。それにいますぐに治療受けたら、１２時までには戻って来られるはずよ。だから、さっ早くいってらっしゃい」
〝そんなぁ〜、これからなんて心の準備ができてないよぉ〜〟
　こんなやりとりで、恵梨子はママに体操服姿のまま歯医者に連れて行かれた。

　恵梨子は体操着とブルマー、それに白のハイソックスという姿で、『相川歯科医院』の待合室のソファーにママといっしょに座っていた。
　『相川歯科医院』は古くからこの町で開業している歯科医院で、女の先生が代々治療に当たっている。いまの院長先生は相川沙織先生で、２年前に沙織先生のお母さんのあとを引き継いだ。
　恵梨子の受付はママが済ませた。ママは所在なげに女性雑誌を見ている。
　恵梨子は、いつ順番が来るかドキドキしていた。恵梨子は小さい頃から、小児歯科もやってるこの『相川歯科医院』で治療を受けている。恵梨子は沙織先生のお母さんに治療してもらっていたが、２年前から沙織先生が引き継いだので、現在は沙織先生に治療してもらっている。沙織先生は患者に厳しく、治療が痛いので有名だった。恵梨子は沙織先生のお母さんに治療されているときは、やさしく治療されていたので、『相川歯科医院』に虫歯の治療を受けに来ることは好きではなかったが、そんなにいやではなかった。だが沙織先生に変わってからは『相川歯科医院』に治療を受けに行くのがすっかりいやになっていた。情け容赦なく痛い治療をする沙織先生の治療が心底イヤだったのだ。だが恵梨子の住むこの町には、歯医者が３ヶ所しかなく、いつも家から一番近い『相川歯科医院』へ連れて来られていた。
　待合室は、夏休みに入ったということもあって、恵梨子の他にも大勢の患児がいた。恵梨子が去年まで通っていた小学校の女の子。恵梨子と同じく母親に付き添われている。恵梨子と同じ中学校に通うセーラー服姿の女の子。だが今日は恵梨子のクラスメイトの姿は見えなかった。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

ひっきりなしに治療室から、虫歯を削るタービンの音が聞こえる。ときどき治療されている子の泣き声も混じっていて、そのたびに沙織先生の『はい、もう少しがまんして！』『どうしてこんなになるまでほおっておいたの！』という叱る声が聞こえていた。
それが恵梨子の不安をいっそうかき立てる。
「ママー、治療痛くないかなぁ～。治療のとき、ついてきてくれる？」
「大丈夫よ。中学生にもなって、恵梨子は怖がりね～。もう中学生のお姉さんだから、少しぐらい痛くったって我慢できるでしょ」
「う、ぅん・・・・・・」
返事をしたものの、胸のドキドキはいっそう大きくなる。
そのとき、カチャッと音がして、治療室のドアが開いた。小学校６年生くらいであろうか、女の子が治療を終えて出てきた。女の子は目を真っ赤に泣き腫らし、痛そうに左頬をハンカチで押さえている。
「恵梨子、見てみなさい。あの子、まだ小学生なのにちゃんとひとりで治療受けて来たよ」
「でも、泣いてるよあの子・・・・・・」
再び治療室のドアが開いて、今度はラテラックスグローブとディスポーザブルマスクをつけた歯科衛生士の石本梨絵が顔を出す。花柄のエプロンがかわいらしく、ピンクのナース服とナースキャップが凛々しい。白のストッキングとナースシューズは清潔そうだ。
「黒川さん、黒川恵梨子ちゃぁーん、診療室にお入りくださぁーい」
「恵梨子、呼ばれたわよ。いってらっしゃい」
「ぅん・・・・・・」
恵梨子は元気なく立ち上がる。
「大丈夫よ！　さっ、これ持って」
ママがハンカチを渡してくれる。
恵梨子はハンカチを受け取ると、肩を落として力なく治療室の方に向かう。待っていてくれた歯科衛生士の梨絵が、恵梨子の肩に手を回し、治療室のドアを閉める。

「はい、ここ座ってねー」
梨絵が恵梨子を淡いブルーの歯科ユニットに誘導する。

隣の治療台では、女子高校生が沙織先生の治療を受けていた。
ブランケットテーブルの奥にあるシャーカステンには、女子高生のパノラマレントゲン写真が挟んであり、青白い蛍光灯が女子高生の口腔を露わにしている。レントゲン写真は、女子高生の上下左右の奥歯のほとんどと上の前歯が治療されていることをあらわすように詰めものを白く写し出していた。上の前歯２本と下の左右６番は根の方まで白く映っていた。さらには虫歯で透明になっている歯や、治療されている詰めものの下から進行している虫歯も映っている。

キュイィーン、キュン、キューン。
「はぁぁ〜ん、うぅ。あぁ。ひはい！　ひはい！」
「少しはがまんしなさい！　高校生でしょ！　こんなになるまでほおっておいたあなたが悪いのよ！　虫歯だらけじゃない！　ほらお口閉じない！」
「あぁ〜ん、あんあん」
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
女子高生は半べそで身を捩り、白のハイソックスを履いた足をパタパタさせ、紺の制服のプリーツスカートが捲れ上がりそうになりながら、痛い治療を最大限我慢してユニットで硬直して必死に耐えているが、目は正直に治療の状況を表していた。‥‥‥目が痛みをうったえていた。涙目になっている‥‥‥。女子高生は虫歯を削られ、涙をポロポロ流しながら治療を受けている。

その光景を見て恵梨子は怖くなり、顔色が青ざめる。背中に冷や汗をかく。〝高校生のお姉さんでもあんなに痛がって泣いてる‥‥‥。治療、とっても痛いのかな。どうしよう、コワイよぉ〜〟
梨絵はそんな恵梨子の様子に無頓着に、笑顔で恵梨子の胸元に水色の歯科エプロンをつける。
「まえ、失礼しまぁーす。エプロンつけますね〜」
「はぃ‥‥‥」
「大丈夫よー。肩の力抜いてリラックスしてね〜」
梨絵は恵梨子の胸元に歯科エプロンをつけおえると、
「先生来るまで少し待っててね」
といって、治療の準備を進める。

沙織先生が隣の女子高生の治療が一段落したのか、ラテラックスグローブを新しいものに替え、こちらにやって来る。
〝先生来ちゃった。いよいよだ‥‥‥。お願い！！　治療痛くありませんように！！〟
沙織先生が、
「恵梨子ちゃん、また歯科検診で虫歯が見つかったんだって」
といいながら、歯科医用の椅子に座る。
「去年、治療が終わったときにちゃんと歯を磨くようにいったでしょう」
沙織先生は、恵梨子の治療勧告書を見て、
「それなのにもう１２歳臼歯を虫歯にしちゃったのね。しょうがないわねー。さっお口開けて」
といい、探針とデンタルミラーを手に持ち、恵梨子に口を開けるようにいった。
「あー、これね。うーん、結構深くなってるなー」

恵梨子の左下７番と右下の７番をデンタルミラーで光をあてて診ながら、沙織先生はいった。続いて沙織先生は恵梨子の口腔内をざっと診、
「あっ、ここも虫歯じゃない。あら、ここも虫食ってるわ。恵梨子ちゃん、歯磨きしてないんじゃない？　こんなに虫歯にして！　虫歯だらけじゃないの！」
と恵梨子を叱った。
恵梨子は図星を指されて恥ずかしかった。クラブ活動の帰りにななえたちと甘いジュースを飲んだり、お菓子を食べたりして、夜はだらだらとお菓子をつまみながら勉強をしたりしていて、クラブ活動の疲れや勉強の疲れで歯を磨かず、そのまま寝てしまっていたこともたびたびだったからだ。
「これはかなり治療に時間がかかりそうねー。梨絵ちゃん、カルテお願い」
「はい、先生」
恵梨子の口腔内に沙織先生のデンタルミラーと探針が入る。梨絵がライトを点け、恵梨子の口腔に焦点を当てる。
「右上から行きまぁーす。７番Ｃ２、６番Ｃ２、５番Ｃ１、４番から２番斜線、１番Ｃ２、左に行って１番Ｃ２、２番３番斜線、４番Ｃ１、５番斜線、６番Ｃ２、７番Ｃ１。続いて左下から７番Ｃ２、６番Ｃ３、５番から右の５番まで斜線、６ば‥‥‥ん」
沙織先生は右下６番に詰めてあるインレーと歯の境目をカリカリと突っつく。探針で突かれたところから、歯の内部に向かってズーンと痛みが走り、恵梨子は声を上げてしまった。
「ひたっ！　ふん、はぁん」
チクチクとした痛みが残る。
「恵梨子ちゃん、この歯ずいぶん前から痛かったんじゃない？」
「いぃぇ‥‥‥」
恵梨子は頬を赤くしながら、小さな声で答えた。
「ほんとう？」
疑わしそうに沙織先生はいった。実は、恵梨子の右下の６歳臼歯は、恵梨子が中学校に入学した春頃から甘い物や冷たい物が染み、最近では暖かい物が染みたり、ときどきチクチクと痛んだりしていたのだ。
「まあいいわ、どうせ削ってみればわかることだし‥‥‥。うーん、だいぶ虫歯が進んでるわね。恵梨子ちゃん、ほんとにもっと歯を大事にしなくちゃダメよ！　６番はＣ３ね。それから７番はＣ２。以上です」
「お口ゆすいで」
恵梨子がコップを手に取り、口をゆすぎ、スッピトンに含んだ水を吐き出す。
正面に向き直ると、沙織先生は歯科衛生士の梨絵がつけたカルテを見ながら、
「うーん、ひどい状態ね‥‥‥。恵梨子ちゃん、これからしっかり治療していくからね。ちゃんと治療が完了するまで通うのよ。怠けちゃダメよ」

といっておいて、コントラハンドピースに装着するバーを、ブランケットテーブルにあるバーチャージャーの中から選び始めた。
　恵梨子が見ていると、いったん手にしたバーを戻し、違うものに選び直している。ここころなしか最初に選んだものよりも鋭く尖っている。
〝そんなぁ〜。あんなに尖ってるなんて‥‥‥。とっても痛そう‥‥‥〟
「恵梨子ちゃん、歯科検診で見つかった１２歳臼歯の虫歯も進行してるけど、去年再治療した右下の６歳臼歯の方が虫歯の進行がひどいみたいなので、この歯から治療していくわ」
「‥‥‥」
　恵梨子が不安そうな目で沙織先生を見ていると、梨絵が、
「大丈夫よ。そんな顔しないで」
と励ます。
「恵梨子ちゃん、麻酔注射したことある？　歯茎に注射するんだけど‥‥‥」
　沙織先生が恵梨子に聞いた。
「いいえ」
　恵梨子は幼い頃から注射が苦手だった。痛い注射を腕やお尻に打たれて大泣きしたこともある。それに今まで受けた虫歯治療で麻酔注射をされたことはない。ましてや歯茎に注射するなんて‥‥‥。〝注射なんて絶対いや！！〟
「そっか。麻酔はからだに負担をかけるし、とりあえず、麻酔なしで削っていくわ。痛みが強く出るようなら、そこで麻酔するから」

　ライトを梨絵が操作して、恵梨子の口元に焦点が合わされる。恵梨子の口腔内の右下の歯茎の舌側と頬側に、ロールワッテが入っていて、治療のスペースが確保されていたが、恵梨子は自分の口の中を窮屈に感じていた。
「じゃあ、治療するからお口開けて」
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」
　強いライトに照らされた恵梨子の口が怖々開くと、沙織先生のデンタルミラーが右頬を押さえるように挿入され、コントラハンドピースにダイアモンドポイントを装着したエアタービンが右下６番の歯に当てられる。続いて梨絵の持つバキュームが恵梨子の舌を抑えるように挿入された。梨絵はライトを操作し、これから治療する恵梨子の歯に合わせる。最後に梨絵はスリーウェイシリンジを恵梨子の口腔内に挿入した。小さな恵梨子の口の中は治療器具でいっぱいになった。
　キュイ、キュイ、キュキュウーン。
　コォー、コォォォー。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　すぐさま齲蝕した恵梨子の右下６歳臼歯が削られ始める。
　削り始めてものの３０秒もしないうちに詰めていたインレーが外される。

「‥‥‥うーん、やっぱり神経まで虫歯が進行しちゃってるわ。‥‥‥どうも神経、壊死しちゃってるかも‥‥‥。麻酔してもしなくてもいっしょね‥‥‥。梨絵ちゃん、切削のあと抜髄するわ」
「はい」
　沙織先生はひとりごちたあと、梨絵に指示を出した。指示をしている間に、コントラハンドピースのバーをタングステンカーバイトに換え、すぐに切削治療を再開する。恵梨子は口をゆすがせてもらえない。
「ちょっと痛いかもしれないけど、がまんしてー」
　キュィーン、キュイ、キュイーーーン。キィィーン。
　切削治療が再び始まってから１分くらいが経過した。恵梨子は削られている歯に熱を感じてきた。それと同時にタンパク質の焦げるような匂いもする。沙織先生の持つタービンのバーが深さを増し、恵梨子の虫歯の深い部分を抉りだした。とたんに強い痛みが恵梨子を襲う。
「ううん、あっ、あっ」
「はい！　がまんして！！」
「あんあん、ひはい！！　ひはい！！」
「はい、少しはがまんしなさい！　こんなになるまでほおっておいた恵梨子ちゃんが悪いのよ！　ほら！お口閉じない！」
「恵梨子ちゃん、もうちょっとがんばろ、ねっ。もうすぐ終わるから」
　梨絵が慰める。
　だが、恵梨子はキュイィーンという削られる痛みに耐えられず、
「怖い！痛い！やだっ！やだっ！」
と大騒ぎしてしまった。
　そのとたん、
「静かになさい！！」
と沙織先生が強く恵梨子を叱った。
　恵梨子は、ビクッとして沙織先生のいいつけに従い、騒ぐのをやめた。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　さらに恵梨子の虫歯を削る治療は続く。
「ふんふん」
「はい、お口閉じない！　がまんして！」
「もうすぐ済みますからねー。もうちょっとがんばろうねー」
「あががぁー。あん」
　キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュィィィーーーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーーー。
　恵梨子はさっき叱られたことで、涙目で顔をしかめてがまんしていた。だが続く削る痛

みに耐えきれず、とうとうからだを捩り、白いハイソックスを履いた足をパタパタ動かす。体操着が捲れ上がり、おへそが見えだした。さらにはあたまを動かし出し、口は閉じそうになる。恵梨子はすでに半べそをかいていた。
「ほら！　動かない！　お口閉じない！」
「うん、ふん、ああっ。あんあん。エッエッ」
「動いちゃダメ！っていってるでしょ」
「もうお口閉じたら、治療できないじゃない！」
「しょうがないわねー。梨絵ちゃん、アングルワイダーとレストレーナー、用意して」
「はい、せんせい」
　沙織先生に指示された梨絵は、歯科助手に声を掛け手招きする。いったん恵梨子の胸元の水色の歯科エプロンをはずし、すかさずネットのレストレーナーで歯科助手といっしょに恵梨子をぐるぐる巻きにする。巻きかたも乱暴で体操着はさきほど捲れ上がったままで、ブラが少し見えている。ネットの上から胸元に、再び歯科エプロンがつけられる。
　続いて梨絵は、トレーから開口器を沙織先生に渡す。
　沙織先生が開口器を恵梨子の口元に持って行くと、歯科助手は両手で恵梨子のあたまを固定し、梨絵は恵梨子の口に指をかけ、拡げる。すかさず沙織先生が恵梨子の口に開口器を装着する。
　恵梨子は、″やだっ！こんな恥ずかしい姿でかなり削られるなんて‥‥‥。中学生なんだからもっと気配りして！！″と思っていたが、開口器を填められ口腔内に治療器具を入れられた状態では、話すこともできない。
　恵梨子は目でうったえるが、沙織先生も梨絵も気づいてくれない。
　キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュィーーーン。キューン。キュイィーン。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。キュィ〜ン。
　コォォォーー、コォーー。
　また強い痛みが恵梨子を襲う。
「ふんふん、あっあっ、ああーん。ひはい！　ひはい！」
「もうすこしだからがまんしなさい！」
「痛くない〜痛くない！」
　沙織先生が厳しく注意し、歯科衛生士の梨絵が優しく励ますが、
″沙織先生や衛生士のお姉さんが『痛くない〜痛くない！』って言ってる時って必ず痛い！！　麻酔で針を刺したり、痛い虫歯をキューンって削る訳だから痛くない訳がないわ。沙織先生も衛生士さんも嘘つき！″
と恵梨子は涙目で思う。
″中学生にもなって歯医者さんで泣くなんて恥ずかしい‥‥‥″と思って必死でガマンしたが、削る痛みに耐えきれず、とうとう大泣きしてしまった。涙をポロポロ流しながら、治療を受けている。

「うわぁぁぁーーん、あんあん」
「こんなになるまでほおっておくから削るのが痛いのよ！　ほら！もう少しがまんする！」
「恵梨子ちゃん、中学生のお姉ちゃんが泣くなんて恥ずかしいんだぁ～。もうちょっとがんばろうね」
　さらに１０分ほど切削治療は続いた‥‥‥。

　ようやく切削治療は終わったが、休む間もなく、恵梨子の口の中に沙織先生の持つリーマが挿入される。
　グリグリ、グリグリ。
〝！！〟
　恵梨子の虫歯に侵された歯髄を抜髄する治療が始まったのだ。神経を引きちぎられる痛さに、背中に冷や汗が流れ、からだはピクンと動き、思わず声を上げてしまう。
「うぅっ！　はあん、はんはん」
「ほら、動かない！　じっとして！」
　沙織先生は、またもや恵梨子を厳しく注意する。けれども抜髄の治療は、恵梨子にとって切削治療と同じ、いやそれ以上につらかった。恵梨子は顔をしかめて泣きべそをかき、脂汗を流しながら、必死で治療に耐えた。
　沙織先生は、リーマとファイルを使い、恵梨子の虫歯に侵された歯髄を取り、根管を拡大していく。さらにルートキャナルシリンジにネオクリーナーとオキシドールを用意し、スプーンエキスカーベーダーで撹拌して、恵梨子の根管の化学的清掃を徹底して行った。
　抜髄と根管拡大が終わると、ペーパーポイントにヨードグリセリンを染みこませ、大きく抉られ根までがらんどうになった恵梨子の右下６番の根に詰めた。その間、梨絵が練板の上でスパチュラを使い、仮封用のグラスアイオノマーセメントを用意する。
　沙織先生は、ペーパーポイントが詰められた恵梨子の６番に小綿球を詰める。次に梨絵が持つ練板からストッパーでグラスアイオノマーセメントを取り、６番に仮蓋をし出す。ストッパーで形を整えている。

　ようやく右下６歳臼歯にグラスアイオノマーセメントが詰められ仮封が終わる。長い時間虫歯を削られ大きく穴の開いたところに詰められた仮封の白さが痛々しい。
　いすが起こされ、開口器が外される。衛生士の梨絵がコップを持ち、恵梨子に口をゆすがせてくれる。
　恵梨子はクチュクチュと口をゆすぎ、スッピトンに水を吐き出す。恵梨子は梨絵や沙織先生をチラッと見るが､歯科エプロンとレストレーナーはいっこうに外される気配がない。それどころかまたいすが倒れ始める。
〝えっ！？　きょうの治療、終わりじゃないの！？　まだ治療するの！？〟

「はい、お口開けて」
「大丈夫よー。アーンしようねー」
　沙織先生は開口器を持って、恵梨子を促す。すかさず歯科衛生士の梨絵が恵梨子の唇に指をかけ、口を開けさす。沙織先生が恵梨子の口にふたたび開口器を装着した。
「前歯、治療するから。前歯の治療は麻酔しないと痛いから、注射するわね」
といいながら、沙織先生は右手に麻酔カートリッジの装着された注射器を持ち、恵梨子の口腔内に迫る。
　注射針がライトを受け、キラッと光った。恵梨子は怖さで目を見開く。
　それを見た梨絵が恵梨子を励ます。
「恵梨子ちゃん、大丈夫だよ。ちょっとチクッとするだけだよ」
　沙織先生が恵梨子の唇を捲り上げ、歯茎に麻酔注射を刺した。歯茎に針が刺さる痛さで、恵梨子は声を上げる。
「ううっ！」
「はい、がまんがまん！」
　歯茎に麻酔液が注入される。恵梨子は強い圧迫感を感じた。ようやく薬液が入った。恵梨子がほっとして沙織先生を見ると、梨絵からもう１本注射器を受け取っている。
〝うそ！！　まだ注射するの！？〟
　恵梨子は涙が出てきた。
「そんな顔しない！　麻酔しないと、治療が痛いよ！」
　沙織先生はそういって、もう１本麻酔を打った。

　麻酔の効果か、歯茎から唇、そして鼻まで感覚がなくなった。沙織先生は、恵梨子の前歯を探針の柄でコンコンと叩き、麻酔が効いたのを確かめる。
「よし、効いたようね。じゃあ削っていくから」
　いうやいなや、恵梨子の口腔に梨絵のバキュームが開口器と前歯の唇の間を捲るように挿入される。沙織先生のエアタービンが恵梨子の口腔に入り、バーが前歯の裏側に当てられる。続いて沙織先生のデンタルミラーが、前歯の裏側が見えるように挿入される。そのミラーに梨絵がライトを合わせる。最後に梨絵がスリーウェイシリンジのノズルをミラーに当てるように挿入した。恵梨子の息でミラーが曇りそうになると、スリーウェイシリンジで曇りを防ぐためである。
　恵梨子の左と右の中切歯の間の隣接面の齲蝕した部分にコントラハンドピースのダイアモンドポイントが当てられる。すかさずエアタービンが回転を始め、恵梨子の前歯の虫歯が削られる。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。キュィーン。
　コォー、コォォォー。
「ふふん、ふんふん」

「はい、がまんして！」
「もう少しで終わるからね～。恵梨子ちゃん、がんばろうね～」
　キュイ、キュイ、キュィーン。キィィーン。チュイーン。
　キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイーン。キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュジュ。
「あんあん」
「ほら、顔動かさない！　がまんする！」
「恵梨子ちゃん、もうすぐだよー。がまんしようねー」
　キュイィーン、チュイーン。キュイ、キュイ、キュィーン、キューン、キュイーン、キュイーン。
　コォー、コォォォー。ジュポ、ジュポポポポー。
　キュウウウーーン。
　一際大きく音が鳴り、タービンが止まった。ようやく恵梨子の前歯の切削治療が終わった。恵梨子の左右の１番が接する隣接面から裏側が虫歯に侵されていたため、大きく抉られている。
「梨絵ちゃん、アマルガムを用意して」
「はい、先生」
　沙織先生は、梨絵からアマルガムを受け取ると、アマルガムキャリアーにつけて充填の準備をし始めた。
　ブランケットテーブルの上のデンタルバーナーに火がつけられる。その様子を治療台にネットでぐるぐる巻きにされたまま、恵梨子は恐怖の面持ちで見ていた‥‥‥。

〝あの炎はなに！？　まえのアルコールランプといっしょ？　炎コワいよぉ～‥‥‥〟

　‥‥‥ブラケットテーブルの上のデンタルバーナーの炎がゆらゆらと揺れる。沙織先生はその炎にアマルガムをかざして、アマルガムをやわらかくする。
「はい、詰めるからね」
　沙織先生は、やわらかくなったアマルガムをアマルガムディッシュに入れ、アマルガムキャリアで恵梨子の前歯の裏側の窩洞にアマルガムを填入する。スチールバニッシャーで余分なアマルガムを除去し、アマルガム形成器で形を整えた。
「これでよし！」
　沙織先生は満足そうにつぶやき、ブランケットテーブルの上のトレーにアマルガム形成器をおいた。治療ユニットが起き上がる。歯科衛生士の梨絵が、恵梨子のレストレーナーをといてくれた。
「はい、お口ゆすいでいいわよ」

恵梨子は、ぐすんくすんと鼻を啜り上げ、ハンカチで涙を拭いてなおも治療の痛みを堪えるかのようにじっとしていた。それからのろのろとコップを手に取り、口をゆすぐ。スッピトンに水を吐き出すが、麻酔で痺れているせいか、うまくゆすげない。それでもゆすいで吐き出した水には、虫歯で茶色く変色した歯の切削片が混じっている。いまさらながら、治療の痛みが甦ってきて、思わず目から涙がポロポロと零れる。

そんな恵梨子の背中に向かって沙織先生は、

「恵梨子ちゃん、サボらないでちゃんと治療に通うのよ」

と涙でぐちゃぐちゃの恵梨子に向かってきびしくいう。

「次は、来週の月曜日に来なさい。時間は今日と同じ。午前１１時に予約をとっておくから。いい、ちゃんと治療を受けにくるのよ」

「はぃ・・・・・・」

口をゆすぎ終わった恵梨子は、しょんぼりとしながら小さく返事をした。

「じゃあ、今日はこれで終わり！　お大事に」

「まえ、ゴメンねー。エプロンとるよ～」

梨絵が恵梨子の胸元から歯科エプロンを外し、スリッパを整えてくれる。

「恵梨子ちゃん、月曜日待ってるからね～。いっしょに治療がんばろうね～。お大事にね」

「はぃ」

恵梨子は梨絵の励ましにこくりと頷き、返事を小さく返すと、過酷な治療の疲れに肩を落としながら、待合室に出て行った。

待合室に出て、ソファーで待つママのもとに戻る。

「あらあら、泣いちゃったの？　治療痛かった？」

ハンカチで右頬を押さえている恵梨子を見てママがいう。恵梨子の頬は涙に濡れたあとが無数にある。

コクン。

恵梨子は小さく頷いて、グスンクスンと鼻を啜る。

「よくがんばったねー。ママに見せて。アーン」

ママに促され、恵梨子が口を開ける。右下６番の白い仮封が目立つ。ざっと見て、ママは息をのんだ。

「！？　あら、前歯が・・・・・・」

その様子に気づいた恵梨子がママを目で見ると、

「恵梨子ちゃん、大丈夫よ。そんなに心配しなくていいよ」

といったが、気になった恵梨子はトイレへ駆け込んだ。

「あっ！　恵梨子っ！　待ちなさい！」

恵梨子は、化粧室の鏡に向かって口を開け、自分の歯を写した。

奥歯の白い仮封が見える。歯はほとんど削られ、原形をとどめていない。そのほかに虫歯で治療してインレーやアマルガムを詰めたところが見えている。
「あんなに削られたんだ‥‥‥。はぁ」
思いながら、前歯を見たとき、強いショックを受けた。左右の前歯の１番の間、１番と２番の間、黒い筋のようにアマルガムを詰めたところが目立つのだ。
「どうして‥‥‥、どうし‥‥‥」
″‥‥‥て、白いので治療してくれなかったの‥‥‥。わたし‥‥‥、わたし、女の子なのにぃ‥‥‥″
「ううっ」
恵梨子は、涙が止めどなく溢れた‥‥‥。

″あのときの治療から歯医者さんが怖くなっちゃたのよね″
このとき恵梨子は、歯科検診で見つかった下の第２大臼歯２本の虫歯の他に、上下左右の６歳臼歯４本を再治療、上の２本は大きなアンレー、下の２本は抜髄の上クラウンを被せられ、さらに上の第２大臼歯２本と第２小臼歯１本と第１小臼歯１本、上の前歯の中切歯２本を治療された。特に６歳臼歯の抜髄と引き続いて行われた前歯の治療は、レストレーナーと開口器をつけられ、衛生士に抑えられたという恥ずかしさ、さらには前歯の詰めものにアマルガムを使われ、しかも治療痕が目立つという恥ずかしさも加わって歯医者が怖くなり、その後、高校３年生のとき、受験勉強をしている時期に虫歯が痛み出しどうにも我慢できなくなるときまで、歯医者に治療を受けに行くことはなかった。そう、歯科検診の結果を無視し続けたのだ。
″わたし、あの歯医者に行かなかった４年の間に決定的に歯を悪くしちゃったのよね。いまから思うと、怖くても痛くても恥ずかしくてもちゃんと治療受けとけばよかったって思う‥‥‥″
恵梨子の現在の口腔内の状態は、ほとんどの歯が治療され、治療を受けていない歯は下の前歯の６本に限られている。上顎はすべての歯が虫歯で治療を受け、全滅している。あのとき治療され治療痕が目立った前歯は、その後の再治療で差し歯にして、裏側こそ真っ黒だが、見た目はきれいな白い歯になっている。
″‥‥‥だから、あの子たちにはわたしみたいな悲しい目にあってほしくないの″
ぼんやりと少女たちの『治療完了証明書』を見ながら思う。
″はっ、教材の続きしなくっちゃ″
恵梨子は、思い出を振り払い、再びパソコンに向かった‥‥‥。

キュイ〜ン・バージン

「ええとっ、これはサ行変格活用よね」
　古典ってなかなか難しい。でも、苦手科目だから克服しなくっちゃ。・・・・・・何時だろう。あっもう１０時だわ。もうひとがんばりしよう！！
「早織、お夜食よ」
「あっ、ママ。ありがとう」
　ママが、フレンチトーストとミルクとお砂糖たっぷりのコーヒーを夜食にもってきてくれた。ママのフレンチトースト、おいしんだぁ〜。
「がんばってるわね。でもがんばるのもいいけど、からだには気をつけてね」
「ありがとう、ママ。でもママもパパも私が国立大に入学するのを応援してくれてるし、みんなの期待に応えなくっちゃ、って思ってるの」
「えらいわね、早織は。模試だと志望校、ゆうゆうなのにね」
「でも油断したらダメだから」
「そうね。じゃ、勉強の邪魔しちゃ悪いから、ママ行くわね。おやすみなさい」
「うん。おやすみなさい、ママ」
　おいしそ〜。いただきまぁ〜す。
　パクッ。
　うん、おいしい！！
　ふぅ〜、ふぅ〜。
　コーヒーは熱々ね。もう木枯らしも吹いて１１月も終わりに近いから、これくらい熱いのがおいしいわ。
　ゴクッ。
「うっ！！」
　いま、ちょっと奥歯染みたよね。まさか、虫歯かな？　うぅうん、そんなことないよね？だって今年の歯科検診でも要観察歯が２本だけだったし・・・・・・。

　わたしは、小阪早織。自分でいうのもなんだけど、ちょっとかわいい系の女の子。髪は栗色がかった黒で、学校行くときはツインテールに纏めている。そうそうこれをいわなくちゃね。
　わたしの通う学校は、女子高の雙蔭高校（そういんこうこう）。２年生なの。雙蔭高校の制服は、かわいい紺色のセーラー服と紺色のプリーツスカート。夏服は、上が白のセーラー服に替わるけどね。ネクタイ型のタイもえんじ色で白い線がアクセントで入ってておしゃれなの。あとハイソックスは、学校指定の紺色でサイドに校章がさりげなく入ってる。これもおしゃれ〜。

それからね、雙蔭高校は国立大学にも多くの合格者を出す、この町の名門校なの。その雙蔭高校で、わたし、学年で１０番以内に入ってるんだぁ～。ちょっと、自慢。えへへ。それともうひとつ自慢があるの‥‥‥。

それは‥‥‥、それは歯なの。

わたし､生まれてから一度も虫歯になったことがなかったの｡友だちに聞いたんだけど、これってカリエスフリーっていうの？

幼稚園のときも、小学校のときも、中学校のときも、学校で歯の表彰をされたの。もちろん、この町の歯医者さんの団体、歯科医師会っていうの？からも表彰状をもらったわ。

特に念入りに歯の手入れをしてきたって訳じゃないし、歯磨きも朝起きたときと夜寝る前に２～３分磨くだけ。両親はママは奥歯のほとんどを治療してて、全部が銀に覆われた歯も、たしか４～５本ある。パパは４～５本銀色の詰め物があったかなぁ～。

わたし、両親の歯には似てないの。生まれつき歯の質がよいのかなぁ～。

だから、歯医者さんの治療って知らないし、友だちが『虫歯の治療ってやだよね～。だってとっても痛いんだもん』『ホントだよね～。あのキュイーンって、ドリルで削るのが痛いんだよね～。涙出てくるよねぇ～』『ホント、歯医者ってヤダよね～』『でも虫歯ほっとくと痛み出すじゃん』『そうそう、虫歯の痛さって耐えられないよね～』『それにさぁ、歯医者さんのエプロンもイヤじゃない？』『そうそう、小さい子のよだれかけみたいでね～』『治療中、ミラーで唇引っぱられるのも恥ずかしいし‥‥‥』『治療台って足が高く上がって、スカート捲れそうにならない？』『そうそう、制服のスカートだとパンツが見えないかとヒヤヒヤするよね～』って歯医者さんや虫歯の話題で盛り上がってもピントこず、

「歯の治療ってそんなに痛いの？　そんなに嫌なものなの？」

「虫歯ってどれくらい痛いの？　そんな恥ずかしいかっこさせられるの？」

なんて的のはずれた質問してて、

「早織はいいよ。虫歯１本もないんだから」

「早織には、虫歯の痛さや治療の痛さ、わかんないだろうね」

って、虫歯治療に通っている子たちにひんしゅくを買ったりしてた。

そんなわたしだけど、中学２年生の２学期くらいから、受験勉強が忙しくなって、特に雙蔭高校を受験するって決めてからは深夜２～３時まで勉強することが普通になって、中学３年生の時は、受験勉強中に脳の栄養補給っていって夜食やお砂糖をたっぷり入れたコーヒーなんかをとったり、歯も磨かずに寝たりしてた。

そのせいか、中学３年生の歯科検診ではじめて奥歯に２本、ＣＯって記号がついたの。右下と左下の６歳臼歯だったかなぁ～。とうとう歯の表彰の記録は途切れちゃった。あ～ぁ。

検診をしてくれた歯医者さんは、
「小阪さんはとてもきれいな歯をしてるね。でも奥歯が２本だけ、虫歯になりかかっているよ。けれど要観察歯だから、ていねいに歯磨きすれば、歯が再石灰化して虫歯にしなくて済むから。‥‥‥保健の先生に歯磨き指導してもらって、ちゃんと磨いてね」
っていってくれたの。
で、歯磨きの指導を受けて、それからは少していねいに磨くようにしてたの。
そのかいあってか、雙蔭高校に入学した去年の６月の歯科健診でも、今年の６月の歯科検診でも、右下の６歳臼歯と左下の６歳臼歯はＣＯのままだったけど、ほかには虫歯になった歯やなりかけの歯はなくて、歯科検診の学校歯科医の先生は、
「がんばって歯磨きしてるね。右下と左下の虫歯になりかかってる歯も虫歯が進行してないようだし、その調子でがんばって歯磨き続けてね」
ってほめてくれた。

それで安心してしまって、また少し歯磨きが雑になった。さらに受験する大学を国立大学に決めたこともあって、受験勉強が忙しくなり始め、ちょうど中学３年生の受験時期とときと同じような生活になっちゃたの。

ふぅ。１時かぁ。今日はこれくらいにして寝よう。
でもさっきの奥歯は何だったんだろう。あれから何ともないし‥‥‥。そうだ！！　手鏡で歯をみてみよう！！　ポーチの中から取りだしてと。
あ〜ん。

なんともないわね。きれいな白い歯が並んでる。右下の６歳臼歯は‥‥‥。
うんっ！？　なんか、溝のところが少し茶色になってる。あれっ！？
‥‥‥もうひとつ奥の歯の側になんか小さな褐色の点みたいなのがある‥‥‥。やっぱり虫歯かな？
ううん、そんなわけないわよね。だってちゃんと歯磨きしてるんだもん。‥‥‥でも、ここんところそのまま寝ちゃってたことも多いし‥‥‥。
もし虫歯だったら、どうしよう‥‥‥。歯医者さん、行かなきゃなんないよね？　‥‥‥でも、歯医者さんの治療って、どんなことされるんだろう。虫歯って、たしかドリルっていうもので削るんだよね？　わたし経験ないし‥‥‥。友だちみんな、歯の治療は痛くてヤダっていってたわよね。不安だなぁ〜。
‥‥‥そうだ！！　裕香、虫歯が多くっていつも歯医者さん通いしてるわよね。あした、学校で裕香に聞いてみよう。

裕香は小出裕香っていって、わたしの親友。卵形の顔を持ち、ショートヘアのかわいい子なの。わたしと裕香はクラスは別だけど、同じチアリーディング部に所属してて、いつもいっしょにおしゃべりしてる仲なの。
でも裕香は歯が弱くって、去年も今年も歯科検診で虫歯が見つかったっていってた。その度に歯医者さんに通わなくちゃならないから、
「早織はいいなぁ、歯が丈夫で」
ってうらやましそうにいってた。
「けど、もし早織が虫歯になったら相談して。わたし、歯医者さんはよぉーく知ってるから。歯医者通いのベテランなのよ」
って冗談交じりに、いってたなぁ。
そうと決まったら、今日はもう寝よう！！　おやすみ～。

！？んっ。
なんだろう、この違和感は‥‥‥。

わたしは、右下の奥歯から感じるチクチクとした感覚で目が覚めちゃった。

何時かな？　まだ３時だわ。
‥‥‥なんだか、奥歯が痛い‥‥‥。やっぱり虫歯かな‥‥‥。虫歯って痛いものなの？寝られるかな？
念のため、痛み止め、飲んどこ～。

ポーチから生理痛用に使っている痛み止めを出し、洗面所で飲んだ。
これでよし。さっ、もう一度寝よう。

痛み止めを飲んだおかげか、そんなに痛まず朝を迎えられた。でも奥歯の違和感は残ったまま。
洗面を済ませ、パジャマを脱いで、ブラをつける。パンツとお揃いのお気に入りのピンクの。雙蔭高校の制服を着て、スクールバッグを持ち、１階のリビング・キッチンに降りた。
「パパ、ママ、おはよう」
「おはよう」
「おはよう、早織」
テーブルには、トーストとハムエッグ、それに野菜サラダとミルクが並んでる。おいしそ～。

「さっ、食べよう」
「いただきまーす」

「それじゃ、いってくるからね」
「いってらっしゃい、パパ」
　パパが一足先に出かけたあと、ママに、
「ママ、保険証、貸してくれる？」
といったの。
「どうしたの、早織。どこか具合でも悪いの？」
「うぅうん。学校の授業で使うの」
　とっさに嘘ついちゃった。だって歯が自慢だったのに、その歯が痛いだなんて格好悪いじゃん。

「はい、これ」
「ありがとう、ママ」
　玄関先で、ママが保険証を渡してくれた。裕香に相談して、場合によっては歯医者さんに行こう。
「いってきます」
「いってらっしゃい。気をつけてね」

　昼休み。お弁当をもって、裕香のクラスへ行く。毎日、かわりばんこにお互いのクラスで一緒に昼食を食べてるの。今日のわたしのお弁当は、ママの得意の肉団子。うーん、いつもながらおいしそう。
　裕香のお弁当は‥‥‥、わぁー、キレイ。ロールサンドだ。
「早織、その肉団子、おいしそうね。わたしのロールサンドあげるから、ひとつちょうだい」
「いいよ」
　裕香とおかずなどを交換して、おしゃべりしながらいつもの楽しい食事‥‥‥。

　食べ終えて、友だちのこと、テレビのこと、授業のこと、先生のこと、なんかのとりとめのないおしゃべりをペチャクチャしゃべって、話題が途切れたとこで裕香に聞いてみた。
「ねぇ、裕香」
「なあに」
「裕香、よく歯医者さん通ってるよね」
「うん」

「いい歯医者さん、知らない？」
「えっ、どうしたの、早織。なんでそんなこと聞くの」
「……うん」
　歯が自慢だったのに、歯が痛いだなんて恥ずかしくていえない……。
「もしかして、早織、歯が痛いの？」
　図星指されちゃった……。裕香は親友だし……、それに歯では苦労してるんだし……、正直にいおう。
「うん。……夕べから奥歯がチクチクしちゃって……。ねぇ、裕香。歯の治療ってどんなことするの？　治療ってみんながいってるように凄く痛いの？　虫歯って、痛かったらすぐに抜いちゃうの？　わたし歯の治療の経験ないし……、わからなくて。ちょっと不安なの」
「そうよ、すっごく痛いのよ。ほんと泣くくらいすっごーく痛いよ。キュイ〜ンって削られるとき、痛くて痛くて泣いちゃうよ」
「……そ、そんなに痛いの！？」
　そんなに痛いなら、治療しないでがまんした方がいいかなぁ。
「そうよ。それにねぇ……」
　裕香がなんかいたずらっぽい目でいった。
「それに……、なに？」
「それに早織みたいに痛み出してる虫歯はすぐに抜かないとダメなの」
「えっ！？　ホントにそうなの？」
「なんて、うそ！！　いまのは冗談。冗談よ」
　もう裕香ったらっ！！　脅かさないでよ。
「確かに、虫歯の治療って痛いけど、ひどい虫歯じゃなかったら、そんな凄く痛いってことはないわよ。それに治療が痛くないように麻酔もしてくれるし……」
「でもみんなの話だと、その麻酔も痛いんじゃないの？」
「ううん。注射針が歯ぐきに刺さるとき、チクッとするくらいだよ。それに麻酔注射する前に、表面麻酔もしてくれるし……」
「表面麻酔って？」
「麻酔注射を打つ前に、注射が痛くないようにあらかじめ歯ぐきに塗ってくれるの。……早織、ちょっとお口開けてみてくれる？」
　わたしはお口の中を見られるのが恥ずかしかったけど、思い切って裕香に向けて口を開けた。

　あ〜ん。

「どの歯が痛いの？」

「ほほ」
　口を開けたままなので、返事が変になった。指で右下の６歳臼歯を指す。
「うーん、ちょっと虫歯になってるのかな？　でも穴も開いてないみたいだし‥‥‥。治療に行っても、ちょっと削って詰めてもらって終わりじゃないかなぁ～」
「えっ！？　やっぱり歯を削るの？」
「そりゃそうだよ。虫歯になった部分をドリルで削らないと、虫歯は治んないよ。で、削って詰めものを入れるの」
「詰めものって、銀？」
「虫歯の大きさにもよるよ。早織のくらいの大きさだったら、白いの詰めてくれるんじゃないかなぁ～」
「ドリルって、痛いの？」
「うーん。これも虫歯の大きさによるんだぁ。わたしの‥‥‥」って、裕香は口を開け、自分の左下の奥歯を見せてくれた。大きな銀が被せてある。「左下の６歳臼歯なんだけど、小学校４年生のときに虫歯になって銀を詰めてもらったの。それが小学校６年生のときに取れちゃって、そのままにしてたら、中学２年生にときに痛み出しちゃって‥‥‥。歯医者さん行ったら、麻酔注射打って、ドリルで削って神経を抜かれたの。そのときは凄く痛かったわ。ドリルで削るのが痛くて、恥ずかしいんだけど泣いちゃった。痛くて痛くて動いたら、衛生士のお姉さんたちに抑えつけられて‥‥‥。そのあとベルトやネットで縛りつけられるし‥‥‥、それに巻きかたも乱暴でスカート捲れたままだし、恥ずかしい姿でかなり削られて‥‥‥。歯医者さんには『どうしてここまでほおっておいたの！！』って怒られるし‥‥‥。でも、虫歯、治療しないでほおっておいた自分が悪いんだし‥‥‥。で、神経を抜いて、土台を立てて、銀歯を被せられたの。これクラウンっていうのよ。恥ずかしいけど、目立つでしょ。‥‥‥早織のはそんなにひどくなさそうだし、こんなふうにはならないと思うよ」
「そう‥‥‥なの」
　裕香の話聞いて、よけい不安になっちゃった。顔色が青くなったのかな、裕香がフォローするようにいった。
「そんなに心配しなくても大丈夫だよ。早織のは、わたしの虫歯と違ってごく小さいし‥‥‥。なんだったら、わたしのかかりつけの歯医者さん、予約しようか？　先生も衛生士さんのスタッフのひともみんな女の人ばかりだし、とってもていねいにやさしく治療してくれるよ」
　わたしは不安だったけど、裕香を信用して、頷いた。
「うん」
「わかったわ」
　裕香は携帯電話を取り出すと、ピッ、ピッとボタンを押した。かかりつけの歯医者さんを携帯に登録してるみたい。

「あっ、もしもし。『久住歯科医院』ですか？　小出裕香です。どうもいつもお世話になってます。‥‥‥はい。‥‥‥いえ、わたしじゃなくて、友だちの歯を診ていただきたいんですが‥‥‥。はい、ちょっと痛み出してるみたいなんです‥‥‥。はい‥‥‥、友だちの名前は小阪早織さん、っていいます。はい、同じわたしと同じ雙蔭高校の２年生です‥‥‥。はい、３時３０分に診ていただけるんですか‥‥‥。わかりました。ではその時間にお邪魔します。‥‥‥はい、よろしくお願いします」
「予約とれたよ。『久住歯科医院』ってとこ。今日の３時３０分ね」
　わたしが不安そうな顔したままだまってると、
「‥‥‥いっしょについてってあげるよ、早織。大丈夫だよ。虫歯治療のベテランにまかせなさぁーい」
　裕香はおどけて励ましてくれた。
「そうと決まったら、平井先生のところにいかなくっちゃ～」
「え？　どうして」
「決まってるじゃん。歯医者さん、今日の３時３０分に予約だよ。ふたりとも部活出られないじゃん。だから部活のお休みの許可もらいに行くの！　さっ！　行こ」

　キーン、コーン、カーン、コーン。
　午後３時。６時間目が終わった。放課後になっちゃった。いよいよ歯医者さんに行くんだわー。
　５時間目の英語の授業の最中に、またチクチクと痛みだした。ううん、心臓にあわせてズキン、ズキンってするの。思わず右頬を手で押さえちゃった。虫歯って、こんなに痛いものなの？　いまはおさまってるけど。‥‥‥ほんとに治療、どんなふうにされるんだろ？なんか怖いなぁ～。
　あっ！！　裕香が来た。
　とうとう歯医者さんに連れて行かれるのねー。
「お待たせ、早織。さっ、行こっ！」
「‥‥‥ねぇ、裕香。ほんと大丈夫かなぁ～。なんだかコワイの」
「大丈夫だって！　わたしがついてるじゃない！　心配しないで早く行こっ！！」
　急いで教科書やノートをスクールバックに詰め込まされると、裕香に手を引っぱられて『久住歯科医院』に連れて行かれた。

　『久住歯科医院』は裕香の家にほど近いところにあった。なんかおしゃれな外観ね。医院の周りはきれいに刈り込まれた植え込みに囲まれてるし‥‥‥。
「さっ！！　入ろっ」
「う、うん」

ちょっと気後れしちゃった。裕香といっしょに玄関マットを踏んで中に入る。
くんくん。
んっ！？　なに？　この消毒液みたいな匂いは‥‥‥。最近じゃ、おっきな病院だってこんな匂いしないのに。歯医者さんって、強い消毒液使ってるの？
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
ん？　ああ、わかった。この音ね。友だちがいってるのは‥‥‥。これが歯を削る音なのね。ほんと、あんまりいい音じゃないわね‥‥‥。

「こんにちわー」
裕香があいさつして、わたしを受付に引っぱっていく。
「裕香ちゃん、いらっしゃい。きょうはどうしたの？　この夏休みに治療したばかりなのに、また歯が痛むの？」
エプロン姿の歯医者さんのお姉さんが、裕香にいった。
「ちがいますよぅ〜。あれからちゃんとていねいに歯磨きしてますしぃ」
「ほんと？　ふふっ、冗談よ。最近はなまけず定期検診にも通ってくれるし‥‥‥。あっ、その子ね。裕香ちゃんが予約してきた小阪早織ちゃんは‥‥‥。こんにちわ。わたし、歯科衛生士をやってます夏川みづきっていいます。よろしくね」
「あっ、こんにちわ。よろしくお願いします」
あわてて、あいさつをして、頭をペコリと下げた。ちょっと声が小さくなっちゃった。
「さっきもいったんですけど、ちょっと痛み出しちゃってるみたいなんです。それに早織、いままで歯の治療を受けたことがないんです」
「えっ！　虫歯ほおったままなの？」
「違いますぅ。早織、歯が丈夫でいままで１本も虫歯がなかったんですぅ」
「そうなの。へーっ、早織ちゃん、すごいじゃん。誰かさんとは大違いねー」
「もう！！　そんなこといわないでください！！　わたしは歯の質が弱いんですぅ〜。ちゃんと磨いていても虫歯になっちゃうんですぅ〜」
「冗談よ、冗談」
ふたりとも仲いいんだぁ〜。笑顔で冗談をいいあってる。なんだか不安なくなっちゃった。
「ふざけてないで、本題に入るわね。早織ちゃん、保険証ある？」
「はぃ」
スクールバックから保険証を取りだして、みづき先生に渡した。
「はい、ありがと。お預かりしますね。それからこちらの『問診票』に書いて出してくれる？　わかるとこだけでいいから。じゃあ、わたしは早織ちゃんの治療の準備にいってくるわね。書けたら受付に出してね」
「はい」

裕香といっしょにソファーに座って、生まれて初めての歯科医院で『問診票』を書いた。『染みる歯がある』のところに〇をつけた。『少し痛む』にも〇をつけた。それから裕香に進められるまま『悪い歯は全部治す』にも〇をつけた。あとアレルギーや生理中の項目があったけど、どれもあてはまらないから〇はつけなかった。受付の助手のお姉さんに渡した。
「はい。ありがとうございます。先生にお渡ししますね。もうしばらくソファーにかけてお待ち下さいね」

カチャッ。
「小阪さん、小阪早織ちゃぁーん、治療室へお入り下さい」
再びソファーに腰掛け、５分ほどもしないうちに、治療室のドアが開かれ、さっきのみづき先生が顔を出し、わたしの名前を呼んだ。腕時計を見ると３時２５分になってた。
治療室のドアのみづき先生を見ると、マスクとゴムの手袋してる。なんか大げさ。歯の治療って、こんなにものものしいの？　内科の先生だったらゴムの手袋なんてしてないよね？　わたしがいった医院で看護師さんがゴムの手袋してるのも見たことないし……。ほんとに大丈夫かな？　またちょっと不安が込み上げてきた。そしたら裕香が、
「早織、がんばってね。きっと大丈夫だよ！　すぐ済むよ」
って励ましてくれた。
「うん。がんばってくる」
「あっ、それからハンドタオルは持っていった方がいいよ」
「わかった」
わたしは、スクールバックの中にあるポーチからハンドタオルを取り出し、みづき先生の待つ治療室のドアのところに行き、生まれて初めて歯科の治療室に足を踏み入れた。

カチャッ。
５台も治療台がある……。隅っこにもなんか小さな部屋があるわ。なんだろう……。
「さぁ、こっちに来てかけてくれるかな」
みづき先生は、わたしをパステルピンクの治療台に案内してくれた。１台１台、パーティションで区切られてるのねー。治療する器械って、ライトとか、ホースとか、テーブルとかついててなんか複雑ー。
「はぁーい、エプロンつけますね〜」
みづき先生がわたしの制服の胸元に水色のエプロンをつけてくれた。これかあ、晴佳たちがいってたの。ほんとに小さい子のよだれかけみたい。
あっ！　なんか、このエプロン、布でテカテカしてる。歯医者さんのエプロンって、防水加工？みたいで水滴コロコロしそうね。
「先生呼んできますので、そのままお待ち下さいね」

テーブルになんかのってる。あっ！　あれ知ってる。学校の歯科検診のとき、歯医者さんがわたしたちのお口を診るときに使うミラーと、えーっと、たしか探針？っていうの？ほかは見たことないなぁ〜。あ、あれ、テーブルについてるのがドリルっていうものかな？
「こんにちわー」
キョロキョロ、器械見てたら、突然うしろから声がした。
「あっ、こ、こんにちわー」
ちょっとドギマギしちゃった。
「小阪早織ちゃんね？　はじめまして。わたしが早織ちゃんの治療を担当する歯科医師の久住千尋です。よろしくね。それから、こちらは診療のアシスタントをしてくれる歯科衛生士の夏川みづきちゃん。みづきちゃん、早織ちゃんにごあいさつを」
千尋先生が、歯医者さんのいすに腰掛けながら自己紹介してくれる。
「さっき少しあいさつしたけど、あらためてあいさつします。わたしは歯科衛生士の夏川みづきです。早織ちゃんの治療のお手伝いをします。早織ちゃん、よろしくね。千尋先生は、院長先生の娘さんなの。院長先生は千尋先生のおかあさん。それからもうひとつ、千尋先生は早織ちゃんのお友だちの小出裕香ちゃんの主治医」
わたしの緊張してるのを見て、リラックスさせようとしてくれてるのかな。千尋先生もみづき先生もいっぱいお話ししてくれる。わたしもあいさつしなくっちゃー。
「は、はい。こちらこそよろしくお願いします」
「で、歯が痛くなったんだって」千尋先生はわたしの書いた『問診票』を見ながら、テーブルの上からミラーと探針を取り上げ、「じゃあ、最初にお口全体の様子を見せてもらうわね。はーい、いす倒すよー」
グーンといすが倒れ始め、千尋先生の手元にわたしの顔が近づいていった。千尋先生の顔が近くにくる。マスクとゴムの手袋してる。なんだか手術みたいでものものしいなぁ〜。
みづき先生がライトを点け、わたしのお口に焦点が来るように操作してる。ライトが目に入る。歯医者さんのライトってまぶしいのね。
「はい、おおきく開けてね。アーン」
「早織ちゃん、千尋先生のいうようにお口おおきく開けよ。あ〜ん」
ちょっと怖かったけど、目を開けたまま、思い切っておお口を開けた。

〝まぁ、この子、処置歯が１本もないわ。‥‥‥そういえば夏休みに裕香ちゃんを治療してるとき、『わたしの友だちで、虫歯が１本もなくていままで歯医者さんに行ったことがない子がいるの。わたし虫歯だらけなのに‥‥‥。うらやましいなぁ』っていってたけど、この子のことなのね。そのときは『裕香ちゃん、その子を見習って歯を大事にしなくちゃダメよ』って注意しといたけど。‥‥‥裕香ちゃんがいってたこの子もとうとう虫歯になっちゃったのね。‥‥‥でも処置歯が１本もない口腔内の歯が虫歯になって、そういう口腔内の虫歯を削るときって、なんだか興奮する‥‥‥、キュイ〜ン・バージンを、ロスト・

バージンさせるみたいで‥‥‥″

「まぁ」
　千尋先生が声を上げた。
　なんだろ？　わたしの歯なんか変なのかな。
「早織ちゃん、きれいな歯ねー。すごいわ」
「ほんと、つやつやしてる。早織ちゃん、すごいよ」
「あひはほうほはいはふ」
　千尋先生とみづき先生がほめてくれた。『ありがとうございます』っていったつもりなんだけど、ミラーと探針がお口の中に入ったままなので、返事が変になっちゃった。
「うーん、でもおしいわね。早織ちゃん、ところどころに磨き残しがあるわよー。ほら」
　千尋先生、探針で歯垢を引っ掻きだして、わたしに見せる。
　ヤダ。恥ずかしぃ‥‥‥。
「ちょっと歯磨きが雑ねー。最近ちゃんと歯磨きしてないでしょ？」
「はい。クラブ活動や受験勉強が忙しくなっちゃってー」
「クラブ、なにしてるの？」
「チアリーディングです」
「チアリーディングかあー。わたしは学生時代、テニスやってたの。クラブって大変だけど楽しいよね。でも勉強やクラブが忙しいからって、歯磨きしないのはダメよー。だから、虫歯になっちゃたのね」
「やっぱり痛いところは虫歯ですか」
「うん。虫歯よ。これからくわしく診ていくわね。それから治療終わったら、みづきちゃんにみっちりブラッシング指導してもらってね。いい」
「早織ちゃん、わたしが正しい歯磨きの仕方教えるからね」
「はい、もう一度お口開けてー。あーん」
　もう一度、お口の中にミラーと探針が入ってきた。
「みづきちゃん、カルテお願いね」
「はい、先生」
　ミラーで唇が押し広げられたりして痛い。それにおおきなお口を開けて、さらに唇をひっぱって広げられるなんてちょっと恥ずかしい‥‥‥なんてお口を開けたまま思ってたら、学校歯科検診でおなじみのＣＯとかの歯式っていうの？が読み上げられた。
「右上からいきまーす。７番Ｃ１、６番Ｃ１。５番から左の４番まで斜線。５番Ｃ１、６番Ｃ２、７番Ｃ１」
　えっ！？　うそ！！　裕香や晴佳、伊緒の歯みたいに、わたし、いっぱい虫歯のＣって記号いわれてる。そんな‥‥‥。わたし歯が丈夫なはず‥‥‥。
「次に左下にいって、７番Ｃ１、６番Ｃ２。５番から右の２番まで斜線。３番Ｃ１。４番

５番斜線。６番しーに‥‥‥」
　ちょっと痛む右下の６歳臼歯をミラーの柄でトントンと叩かれ、次に探針でカッカッってされた。そしてＬ字型のホースみたいなので、シュッシュッと空気をかけられた。
　ズキーン。
　痛みが走り、お口を開けたまま、
「あ痛っ！　ふぅん、うぅっ」
って声上げちゃった。
「うーん。早織ちゃん、この歯、見た目は点みたいな小さな穴が１つあるだけだけど、色がね‥‥‥。虫歯がどうも中で大きく深く拡がってそうね。あとでレントゲンを撮って診ましょう。６番は限りなくＣ３に近いＣ２かな」
　そんなぁ‥‥‥。わたし、歯が丈夫で、油断してた‥‥‥。受験勉強忙しくて、甘いもの食べても歯磨きしなかっり、クラブの帰りに裕香たちといっしょに甘いお菓子やジュースをダラダラ食べてたからだ‥‥‥。どうしよう。グスン。
「‥‥‥７番Ｃ２。以上です。何本？」
「先生、Ｃ１が６本、Ｃ２が３本、Ｃ３に近いＣ２が１本で、虫歯１０本です」
　ショックで、ちょっと涙出ちゃった。
「はい、泣かないの。なっちゃたものはしょうがないじゃない。ちゃんと治療すればいいんだから。でも早織ちゃん、受験勉強の途中やクラブ帰りとかにダラダラとジュースを飲んでたりしてたんじゃない？　もしそうならそれは止めようね。で、これからは気をつけて虫歯にならないようにすればいいんだから」
　図星だ‥‥‥。
「そうよ、早織ちゃん。千尋先生のいうとおりよ。ちゃんと治せばいいのよ。ただし、クラブや受験勉強が忙しくてもできるだけ規則正しい生活をして、ちゃんと歯磨きもなまけないですること。でないと、またすぐ虫歯になっちゃうよ」
「はい。ごめんなさい。これからはちゃんと歯磨きします」
　先生に注意されて、ちょっと恥ずかしかった。そのときあたまの中で、わたし歯が丈夫なはず、って意識がもたげた。それで千尋先生に質問しちゃった。
「せんせい」
「んっ？　なぁに、早織ちゃん」
　千尋先生は、わたしの治療の準備の手を止めてわたしの方に向き直った。
「わたし、歯が丈夫とばかり思ってたんですけど‥‥‥」
「そうね。早織ちゃんの歯は、歯並びもよくて色もきれいよ」
　やっぱり‥‥‥。丈夫な歯なん‥‥‥
「でもね、早織ちゃんの歯の質、歯質っていうんだけど、それはいま診たところでは、残念だけどあまり丈夫じゃないわね。いままで虫歯がなかったのは、虫歯ができるのは、本人の歯質、歯垢の細菌、飲食物の糖質、それにこの３つが重なり合う時間の長さの４つの

条件があるの。他に唾液の質も関係するわね。早織ちゃんの場合、そのどれかひとつが欠けている状態がつづいてきたから虫歯がなかったんだと思うの。いま虫歯になっちゃたのはそのすべての条件がそろっちゃったのね」

‥‥‥そうなんだ。わたしの歯って、ママといっしょで弱いんだ。いままで虫歯がなかったのは運がよかっただけなんだ‥‥‥。

「でもその虫歯になる条件のひとつでも欠ければ、虫歯にはならないから、みづきちゃんのブラッシング指導、ちゃんと受けてね」

「はい」

「それから、早織ちゃんの虫歯は、エナメル質が溶けちゃってる状態の白濁したもの、脱灰っていうんだけど、がほとんどなので、そんなに重症の虫歯はないわ。ただＣ２になってるのは茶色や褐色なんだけど、ごく色が薄いのね。だからひょっとすると急性齲蝕っていって結構進行してるかもしれないわ。こういうタイプの虫歯は中で大きく拡がって深く進行して、あっという間に歯髄、一般的には神経っていってるわ、に到達するの。下掘れ齲蝕っていうんだけどね。だからいま治療しないと、神経が炎症を起こす歯髄炎っていうのに罹って、すぐ痛みが出て神経を取らなくちゃ行けないようなことになって、もっと治療が大変になるよ。だからちゃんと治療しようね」

えっ！？　神経取るって‥‥‥、裕香の奥歯みたいになっちゃうってこと！？　そんなぁ‥‥‥コワイよ〜。

「先生、レントゲンの準備できました」

レントゲン室にいってたみづき先生が戻ってきた。

「じゃあ、レントゲン撮りましょう。みづきちゃん、案内してあげて」

「はい。早織ちゃん、こっちに来てくれるかな」

わたしはエプロンをつけたままという格好で、隅にあるレントゲン室に連れて行かれた。さっきなんだろうと思った小部屋がレントゲン室だったのね。

カチャッ。

みづき先生がドアを開けて、

「さっ、このいすに座ってくれる？」

って部屋の真ん中にあるいすを指した。

わたしが座ると、

「ここに顎をのせて、この棒を両手で握って楽にしていてね」

ってみづき先生がいった。わたしがいわれたとおりにすると、すぐにドアが閉められて、部屋の中に千尋先生の声が聞こえてきた。

「早織ちゃん、じっとしててね」

わたしの目の前をゆっくりと器械が動いた。

「はい、いいわよ。治療台に戻って待っててくれる？」

ドアを開けながら、みずき先生がいった。わたしはエプロンをつけたまま治療台に戻っ

た。

　治療台に座ってしばらくまってると、千尋先生が戻ってきて歯医者さんのいすに座った。
　そのあと、今度はみづき先生がレントゲン写真をもって戻ってきて、そのレントゲンを千尋先生に渡した。千尋先生はレントゲン写真をテーブルの奥にある板みたいなところに挟むと、電気を点けた。蛍光灯の光がレントゲン写真を照らした。わたしのお口の中が全部映っていた。
「う〜ん。右下６番は、ギリギリ神経まで進行していないかなぁ〜。‥‥‥大丈夫だと思うけど。念のため麻酔をして削っていくわね。あとは‥‥‥、そんなにひどい虫歯はないわね。あっ、右下７番が結構進んでるかも‥‥‥。でもこれも神経まではいってないわ」
　そうなんだ。これで神経はとらなくてもいいよね？　裕香の奥歯みたいにならなくていいよね？　先生に聞いてみよっかなぁ〜。
「先生」
「なぁに？　早織ちゃん」
「右下の６歳臼歯、神経とらなくてもいいですか？」
「う〜ん。そうね、大丈夫だとは思うけど‥‥‥。削ってみないとわからないわ。ちょっと微妙なのよね。でもできるだけ神経はとらないで治療するから」
　そんなぁ〜。削らないとわかんないの〜。
「早織ちゃん、大丈夫よ。千尋先生を信じて治療を受ければいいんだから。千尋先生は神経を残せそうなときは、必ず神経を残す治療してくれるんだから。だから安心して」
　みづき先生が励ましてくれた。
「はぃ」
「じゃあ、いす倒すねー」

「早織ちゃんは、歯の治療初めてっていうし、きょうは痛みの出かかってる右下の６歳臼歯だけを治療して、治療に慣れてもらって、次から２本ずつくらい治療するようにしましょう」
「じゃあ、まず麻酔していくわね」
　千尋先生は脱脂綿の球みたいなのをピンセットでつまんで、薬の瓶につけた。それとミラーをもってわたしのお口に近づけて、
「早織ちゃん、あーん」
っていって、わたしがお口を開けるように促した。
　わたしが怖々お口を開けると、右下の歯ぐきにトントンとピンセットでつまんだ綿の球に染みこんだ薬を塗った。ひんやりしてなんだか歯ぐきが痺れるような‥‥‥。
「みづきちゃん、シンマ」
「はい、先生」

えっ！？　注射！？　内科とかで打つ注射でも嫌いなのに‥‥‥。歯ぐきに打つ注射ってどんな感じなんだろう。やだなぁ〜。苦手だなぁ〜。
みづき先生の手から千尋先生の手に注射器が渡った。これが麻酔注射なのね。
「はい、ア〜ン」
千尋先生はミラーでわたしの唇を押し広げて、麻酔注射をわたしのお口の中に入れてきた。ああっ、針が‥‥‥。
「ちょっと、チクッとするよー」
ううっ！　なんか歯ぐきが圧迫されるみたい。
「はい、もう少しがまんしてねー。もうすぐお薬全部入るよー‥‥‥。はぁーい、おしまい！　いったん、お口ゆすごうね」
いすが起こされ、わたしはクチュクチュとお口をゆすいだ。なんだか歯ぐきだけじゃなく右頬全体がじんわりと痺れてきちゃった。感覚がなくなるって感じになってくるぅ。ヤダ‥‥‥、お口から水が漏れちゃう。恥ずかしぃ‥‥‥。お口ゆすいだ水がなんかとんでもない所に吐き出しちゃいそう。
「もう一度、いす倒すねー」
わたしの顔が千尋先生の手元に近づいていく。

〝いよいよ、キュイ〜ン・バージンの早織ちゃんの歯を削ることになるんだわ‥‥‥。処置歯が１本もない歯だと、なんだかドキドキしちゃう。まずはコントラハンドピースをエアータービンに装着して‥‥‥。それから、このダイアモンドポイントをハンドピースにつけて、と。早織ちゃん、どんな風に治療を受け入れてくれるのかしら。なんだか楽しみ‥‥‥〟

あっ！　千尋先生、ドリルみたいなのに針つけてるぅ〜。あれで虫歯を削るのかな？　なんだかあの針、先が尖ってて怖いなぁ〜。痛いのかな？　なんかドキドキする。
千尋先生、ドリルに針つけ終わったら、わたしの方に向き直った。手にミラーとドリル持ってる！
みづき先生は、Ｌ字型のホースみたいなのと竹みたいにはすかいに切り口のあるゴムみたいなのがついたホースを構えて、わたしがお口開けるのを待ってるわ。
「じゃあ、治療していくわね。麻酔したから大丈夫だと思うけど、削るのが痛かったら左手挙げて教えてね」
大丈夫かなぁ〜。痛くないのかなぁ〜。なんだか怖い‥‥‥。
「はぁーい、早織ちゃん、お口ア〜ン」
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」
千尋先生とみずき先生がわたしを促した。
わたしが怖々お口を開けると、いっぱい器械を口の中に入れられた。みづき先生はＬ字

型のホースみたいなのと竹みたいにはすかいに切り口のあるゴムみたいなのがついたホースを、千尋先生はミラーとドリルをわたしの口の中に入れたんだ。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　コォー、コォォォー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポーー。
　ああっ！！　ついにキュイ〜ン・デビューしちゃった‥‥‥。生まれて初めて、わたしの歯が、虫歯が削られていく‥‥‥。わたし、キュイ〜ン・バージンだったのにぃ‥‥‥。なんかロスト・バージンみたい‥‥‥。歯の処女喪失‥‥‥、歯のロスト・バージン‥‥‥。そう思うと涙が浮かんだ。
　でも、それはほんの感傷に過ぎなかったの。そのあと強い痛みが襲ってきて、ほんとに泣いちゃった。裕香や晴佳、伊緒たちみんながいってたのは、この痛さのことなのね。ほんとに歯の治療って痛いのね。痛っ！！
「あ痛っ！！　痛いっ痛いっ痛いいたたたたっ！！」
「痛くない〜痛くない！」
「はい、もう少しがまんしてねー」
「もうすぐ済むよー。がんばろうねー」
「あががががー。ひはいっ！！　ひはいっ！！」
「大丈夫だよー。痛くない〜痛くない」
　歯医者さんや衛生士さんが「痛くない〜痛くない！」って言ってる時は必ず痛いのね。そりゃそうよね。麻酔で針を刺したり、痛い虫歯をキューンって削る訳だから痛くない訳がないわ。歯医者さんって嘘つきね。
「んんっ、ふんふん。痛ぁーぃ！！」

〝まぁ、早織ちゃんたら、痛がっちゃって‥‥‥、可愛い‥‥‥。あぁ〜、わたしはいま、この子のキュイ〜ン・バージンをロスト・バージンさせちゃったのね。‥‥‥あぁ、なんだか‥‥‥〟

　キュウーン、キューン、キュイーン、キュイーン。
　キュイ、キュイ、キュイイイーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュッ、ジュポポポポーーー。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　うぅ、うぐぐぐぐぅ。痛っ！　いたたたたーっ！！　もうやめてぇー！！
　わたしは眉間に皺を作ってかなり我慢したんだけど、がまんしきれなくなった。
　そうだ！！　最初に先生いってたわ。左手挙げればいいんだ！！
　それで、わたしは左手を挙げたんだけど、千尋先生とみづき先生は、
「もう少し、がまんしようねー」
「あとちょっとがんばろうねー」

って削るの止めてくれない。ほんとに歯医者さんって嘘つき！！
　あ痛っ！！　あ痛っ！！　痛いっ痛いっ痛いーっ！！
「ひはい！！　ひはい！！　ひはい！！」
　キュウウウウウーーン。
　大きな音をたてて、器械が止まった。
　千尋先生は、わたしの口の中から削る器械を出してくれた。
「早織ちゃん、大丈夫？　我慢出来ない？」
　わたしは涙目でコックリと頷いた。
「じゃあ、もう１度麻酔を打ちましょう」
　えっ！？　また麻酔打つの！？　さっき痛かったからヤダなぁ〜。千尋先生にいって麻酔止めてもらおう‥‥‥。わたしは首を横に振った。
「先生、大丈夫です‥‥‥」
「ほんとに大丈夫？」
　わたしが「はぃ」と小さく答えると、
「わかったわ。じゃあ、もう少しがまんしてね」
と千尋先生はいって、ふたたびわたしの口の中にドリルが入り、またキュィーンとされた。でもやっぱりとっても痛くてと今度は足がピクンとなっちゃった。
　それで、わたしが動いたからかなぁ〜、また千尋先生が、
「どう？痛い？」
と聞いてくれた。
　わたしは今度は首をコクンと縦に振り「痛いです」と小さい声で言うと、
「みづきちゃん、シンマお願い」
「はい、先生」
って、今度は麻酔注射を２回打たれた。
　痛ぁーぃっ！！　麻酔ってなんでこんなに痛いの？
　麻酔注射のあと、またキュィーンとされた。
　それからいったんお口ゆすがせてもらったあと、またまたキュィーンとされちゃった。麻酔注射の痛いのがまんしたのに、キュィーンって削るのもずーっと痛くて、涙ポロポロでちゃった。
　左手挙げようとしたら、みづき先生に手おさえられて、千尋先生は「早織ちゃん、麻酔効かないわねぇ〜。もう１本打ちましょう」って麻酔されて、またチュイーン！
　痛くて足動かしてたので、スカート捲れちゃってた。
　恥ずかしいし痛いし！！歯医者さんやだっ。って思った。
　かなり長い時間キュィーンと削られて、やっと削るのが終わった。
「はい、いいわよー。お口ゆすいでね」
　ふぅ〜。やっと終わったぁ。裕香たちのいってたように、ホントに虫歯治療って痛いの

ね・・・・・・。わたしみんなの気持ちも知らないで、無責任なこと聞いてたんだ。あー、まだズキズキするぅ～。
　またいすが倒れた。
「早織ちゃん、右下の６歳臼歯の虫歯は思ったよりも深かったわ。神経近くまで削ったから、少し痛くなっちゃったね」
　千尋先生、少しじゃないよ、すっごく痛かったよ～。
「でも、神経までは進んでなかったので、神経は取らずに済んだわ」
　よかったぁ～。神経取らなくていいんだ。
「このあと、歯の詰めもの、インレーっていうんだけど、インレーを作るための型取りをします。最後に神経を保護するお薬を入れて、仮封、仮に蓋をすることなんだけど、をして詰めます。あと少しだからがんばろうね」
「そうだよー。もう少しのがまんだから、早織ちゃん、ファイト！」
　千尋先生の説明のあと、みづき先生が励ましてくれる。
「じゃあ、もう一度ア～ン」
　わたしがお口を開けると、ピンク色のゴムみたいなの噛まされた。
「しばらくそのままでいてね」
　ライトが消され、千尋先生はわたしのカルテかな？ を書き出した。
「もういいわよ」
　ライトが点き、お口の中からピンク色のゴムみたいなのが取り出された。
「はい、あーん」
　今度は、お薬で消毒？された。ちょっと染みるぅ～。そのあと千尋先生は、みずき先生から渡された白いものを、削ったわたしの虫歯の穴に詰めている。
「はーい、よくがんばったねー。きょうはこれで終わりよ！　お口ゆすいでね」
　いすが起こされ、わたしはクチュクチュとお口をゆすいだ。その背中に、
「早織ちゃん、次回はきょう削ったところにインレーを詰めるね。で、右下の６歳臼歯の治療は終わりね。その次は隣の右下の７番を治療しましょう。きょう治療した６歳臼歯より虫歯は進行していないけど、Ｃ２なので痛み出すかもしれないから、早い目に治療した方がいいわ。それからきょう治療したところが痛み出すといけないので、痛み止めを処方するわ。帰りに薬局によって痛み止めのお薬をもらってね」
「・・・・・・はぃ」
　きょうの治療思い出して、返事が小さくなっちゃた。
「次回は１週間後の水曜日、きょうと同じ午後３時３０分でいい？」
「はい」
「じゃあ、決まりね。早織ちゃん、１週間後待ってるわ」
　いすが起こされ、
「前、ごめんねー。エプロン取りますね～」

ってみづき先生がエプロン取ってくれた。スリッパも揃えてくれた。立ち上がってスリッパを履く。まだ削ったところがズキンズキンして、思わずハンドタオルで右頬を押えちゃった。
「お大事にね」
「はい、ありがとうございました」
　わたしは、千尋先生やみづき先生に頭を下げてお礼をいうと、右頬をハンドタオルでおさえたまま、待合室のドアに近づいていった。

〝早織ちゃんのようにキュイ〜ン・バージンの子〜初めて虫歯治療を受ける子〜をロスト・バージンさせちゃうのって、虫歯だらけ〜例えば裕香ちゃんのように〜の子を治療するより、何倍も興奮するわ‥‥‥。あぁ、わたしっていけない歯医者さんね‥‥‥〟

　カチャッ。
「早織！　大丈夫？」
　裕香が心配そうに近づいてきてくれた。わたしの目、まだ真っ赤だし、右頬をハンドタオルでおさえたままだし‥‥‥。
「うん、なんとか‥‥‥」
『大丈夫』の言葉が続かなかった。だって、ほんとに痛いんだもん！
「裕香、裕香のいってるように歯の治療って痛いものなのね。わたし、はじめてわかった」
「でしょう。痛いのよ、歯の治療は」
「ゴメンね、いままでこの痛みわかってあげられなくて」
「早織は、いままで歯の治療受けたことなかったから、わからなくたってしようがないよ。気にしないで」
「うん、ありがと」
　裕香とソファーでおしゃべりしてると、受付のお姉さんがわたしを呼んだ。
「小阪さーん、小阪早織ちゃぁーん」
「はい」
　わたしは返事をして受付へ行くと、受付のお姉さんは千尋先生が書いた処方箋を渡してくれた。治療後痛むといけないからといって、千尋先生が痛み止めを処方してくれたんだ。
　会計を済ませ、裕香といっしょに『久住歯科医院』をあとにした‥‥‥。
　初めて歯科治療を受けた感想は、とにかくキュイ〜ンが痛いってことかな。

　次の日。２時間目と３時間目の休み時間。
　晴佳と伊緒たちが、
「早織〜」ってわたしの机のそばによってくる。

「聞いたよ〜。早織、歯医者さん行ったんだって」
「うん、キュイ〜ン・デビューしちゃった」
「で、どうだった。痛かった？」
「うん、晴佳たちのいってるように凄く痛かった。わたし、いままで無責任なこと聞いててゴメンね」
「ううん、いいのよ、そんなこと。で、詰めてもらったの？」
「ううん、型取りして仮に蓋してある。次、インレーっていうの入れるの」
「そっか。わたしと同じだぁ」
って、晴佳、わたしにインレーの入った奥歯を見せてくれた。
「わたしも！」
　伊緒も大きくお口を開けて銀歯を見せてくれる。すごーい！！　伊緒、奥歯全部治療してある‥‥‥。それも裕香が見せてくれたクラウンが３本もある！！
　わたしもお口を開けて仮封の歯を見せながら、
「そっ。銀歯デビューももうすぐなの」
っていった。
　教室は、歯医者さんの話題で持ちきりになった。
　キーン、コーン、カーン、コーン。
　あっ！　３時間目のチャイムが鳴り出した。晴佳たち、自分の机に戻りだした。英語の教科書とノート出さなきゃ。授業始まっちゃう。

歯科診療バス「ハルちゃん号」

恐怖の歯科治療がやって来る

シュッ、シュッ。

シャカ、シャカ、シャカ。

小池黎（れい）は、鏡に向かって歯ブラシを使い、一生懸命歯を磨いていた。

黎は、白早花小学校尾花平分校の６年生。ショートヘアの活発な女の子である。黎には３歳上の姉がいる。姉は美月（みつき）といい、白早花中学校尾花平分校の３年生だ。ふたりとも可愛いと評判の姉妹だ。

今日は６月７日。すでに時間は午後９時３０分になろうかとしている。

「黎ったら‥‥‥、いまごろ一生懸命磨いたって無駄だって」

「うるさいなぁ～。お姉ちゃんもちゃんと磨かないと、虫歯になっちゃうよ」

「あたしはいいの。毎日ちゃんと朝と夜に磨いてるもん」

黎は歯を磨きながら思った。

〝わたし、知ってるもん。お姉ちゃんだって虫歯いっぱいあるじゃない。前に虫歯が痛くて泣いてたことも、それに虫歯の治療が痛くて治療台で泣いてたことも知ってるもん〟

美月はお姉さん顔で黎に注意しているが、実は夜歯を磨いたあとでもちょくちょくお菓子をつまんでそのまま寝てしまう。だから結構虫歯が多く、朝夜磨いているといっても歯をきれいに清潔に保っているとはいえない。

黎も、美月がいったように、普段あまり熱心に歯磨きをしない。朝は一応毎日磨いているが、夜はついつい怠りがちだ。それなのに美月と同じように甘い物が好きで、夜美月といっしょにお菓子やジュースをダラダラと食べたり飲んだりしている。だから黎も虫歯が多い。そんな黎が今日に限って一生懸命歯を磨いているのは、明日が歯科検診だからだ。

黎の住んでいる白早花村尾花平は、山がちの白早花村の中でももっとも山奥の地区で、歯科はむろん病院や診療所はひとつもない。

もっとも白早花村自体が県内でも最山間部に位置しているため、村全体を見ても、医院や診療所は村の中心部の白早花地区に村営病院と村営歯科診療所があるだけだ。そんな貴重な病院にしても、診察日と診療時間はごく少なく、短い。

たとえば村営歯科診療所は歯科医師１名、歯科衛生士１名、事務員１名で運営されているが、歯科医師は常駐ではなく、Ｕ市の県立病院歯科口腔外科から当番医が通って来ている。診察日と診察時間は、火曜日と金曜日の午前１０時から午後０時までと午後１時から午後４時まで、水曜日の午前１０時から午後０時までの週３回に限られていて、歯科医師がいないときの応急処置は、村の職員である歯科衛生士が行っているという状態だ。

その白早花村は県庁のあるＵ市からはバスで２時間かかり、最も近い隣町であるＳ町まででもバスで１時間かかってしまう。尾花平地区は村の中心部である白早花地区からバスでさらに２時間かかり、白早花－尾花平間のバスは、１日朝夕の２往復しかない。

そのためこの地区では、巡回診療バスがたよりだ。
歯科診療については、毎年１月の第２週目を始期として、２週毎の水曜日と木曜日に歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』がやって来る。診療時間は、水曜日が午後１時から午後４時まで、木曜日が午前１０時から午後０時までとなっている。

歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』の６月の診察日は８日と９日、それに２９日、３０日だが、歯科衛生週間にあたる６月最初の診療日のときは、黎が通う白早花小学校尾花平分校と、美月が通う白早花中学校尾花平分校の歯科検診が行われるということもあり、水曜日の午前中にやって来る。
分校の講堂で行われる歯科検診で虫歯が見つかった子は、分校に横付けされた歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』で午後に治療をされることになっている。
昨年６月９日に行われた歯科検診では､黎は虫歯が２本､美月は虫歯が３本も見つかり、ふたりは『ハルちゃん号』の中にある歯科治療ユニットで痛い虫歯治療を受けた。
黎にとっても美月にとっても『ハルちゃん号』は恐怖の的であり、迷惑なバスだった。
黎も美月もできれば歯科治療は受けたくない。ふたりにとって歯科治療は、痛い虫歯を削られ痛い思いをするという、つらい思い出しかないからだ。ありがたくないことに『ハルちゃん号』は、ふたりにとって来てほしくない『恐怖の歯科治療』がわざわざやって来るということなのだ。

「ふあ～ぁ。わたしもう寝るから。黎、お休み」
「お休み、お姉ちゃん」
シャカ、シャカ。
なおも熱心に歯を磨きながら、黎は祈った。
「お願い、虫歯ありませんように･･････」

そして翌日の朝。
ブゥゥゥーーン。
「先生、もうすぐつきます」
歯科診療バスを運転している佐山が、由里香先生にいった。彼は最近採用されたばかりのＴ県歯科医師会事務局の職員だった｡歯科診療バスを運転するのは今日が初めてだった。
「やっぱり、遠いわね。ここまで２時間かかったもの」
腕時計をみると、時間は９時３０分になろうかとしている。
「今回は診察が午前１０時からなんですか？」
「診察じゃなくて、１０時から尾花平分校の子どもたちの歯科検診があるの。遅れるといけないから、少し急いでくれない？」

「そうでしたね。わかりました」
佐山は歯科医師会の事務局に採用されて間もないので、まだ歯科巡回診療をよく飲み込んでいない。
「午前中の歯科検診のあと、午後は子どもたちの治療なの。今回は、地区のおとなのひとたちの治療は翌日になるかもしれないわね」
歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』は、左側真ん中に折り戸式自動ドアがあり、そこから患者が中に入るようになっている。左側前部の折り戸式自動ドアは、歯科医、歯科衛生士の出入り口で、左側面は窓が２枚あるが、右側面には窓はない。
中には、患者の気持ちを和ませようとしてこの色合いにしているのか、明るいブルーの歯科治療ユニットが２台あり、それぞれに歯科レントゲン装置もついている。だがスペースの関係からパノラマレントゲン装置まではついてない。壁側の面には、歯科用治療器具と歯科用薬品が整理された棚があり、歯科治療に必要なものがコンパクトにまとまっている。
『ハルちゃん号』に乗っているのは、藤澤由里香先生だ。Ｕ市で『藤澤歯科医院』を夫とともに開業している。『藤澤歯科医院』は、歯科医師は由里香先生、先生のご主人のほかにもう１人おり、歯科衛生士は医院に５人いる。歯科治療ユニットは６台あり、そこそこ中規模の歯科医院である。
今回の巡回歯科診療は、Ｔ県歯科医師会からの依頼で当番医として由里香先生が務めることになった。由里香先生の他に『藤澤歯科医院』からは蛯原瑠美と小林愛里の２名の歯科衛生士が同行している。
「先生、どのくらい患者さん来るんでしょうか？」
瑠美がいった。
「さぁ……。わたしも巡回歯科診療ははじめてだから。ちょっと見当つかないわね」
「でも先生、尾花平って小さな集落なんですよね？」
愛里も由里香に尋ねてくる。
「小さな集落っていっても、分校の子どもたちだけでも、小学生が１４人に、中学生が７人もいるんだし……。ユニットの使い勝手は違うかもしれないけど、普段医院でやってるとおりやればいいのよ」
「わかりました」
『ハルちゃん号』の車内では、由里香先生たちがそんな会話を交わしながら、尾花平分校に向かっていた。

白早花小学校尾花平分校の４・５・６年生の複式学級では、算数の授業が行われていた。
ブウウウン。
大きな音に気づいて、黎が分校の教室の窓から外を見ると、校舎の前にひろがる校庭に

バスが止まった。
〝来た！〟
　ついに、恐怖の歯科治療がやって来た。
　黎はこれからはじまる歯科検診のことを考えると、ドキドキしてきた。
　黎と美月の通う尾花平分校は小学校も中学校も同じ校舎内にある。山間部の分校だから、規模も小さいのだ。
「はぁーい、みなさん。歯科診療バスが着いたので、講堂にいってください。歯科検診を行います」
「・・・・・・はぁ〜ぃ」
　みんな元気のない返事をする。
　尾花平分校の小学生たちは、みんな名前入りの体操服とブルーのハーフパンツで授業を受けている。小学校では体操着が制服の代わりなのだ。黎はブルーのジャージの上着を羽織り、下はみんなと同じブルーのハーフパンツをはき、さらに淡いラベンダー色に薄オレンジのアクセントの入った短いソックスを履いている。
「あ〜、やだなぁ」「虫歯あるのかなぁ」「はやく終わってほしい！！」
　黎たちは口々に不安をうったえながら、ゾロゾロと講堂に向かっている。中学校の教室からも詰め襟の学生服、紺のセーラー服と白いリボンタイ、それに紺のプリーツスカートを身に纏った生徒たちが講堂に向かってくる。その中に姉の美月を見つけると、黎は小さく手を振り、
「お姉ちゃん！」
と声をかけた。
　美月は目で黎に合図をすると、クラスメイトと講堂に入っていった。

　列の前から、歯式を呼び上げる由里香先生の声が聞こえる。虫歯を表すＣとか○とかの記号が聞こえる。
〝はぁ〜、もうすぐ順番来ちゃう〟
　黎はドキドキしながら、歯科検診の列に並んでいる。１年生からはじまるので６年生の黎は順番でいうと最後の方だが、尾花平分校は全校で生徒が１４人しかいないから、すぐに順番が来てしまう。
「はい、次、小池黎ちゃんね」
「ここに座って大きくお口開けてね」
「はい、あ〜ん」
「右上からいきます。７番ＣＯ、６番○、５番○、４番から２番斜線。黎ちゃん、前歯の裏側に虫歯があるよ。ちょっと虫歯が拡がちゃってるわね。１番Ｃ２、左も１番Ｃ２」
〝えーっ！！　そんなぁ〜〟
　黎の右と左の１番の裏側は隣接面から、左右に茶色い変色が拡がっていた。

「２番から５番斜線。６番○、７番ＣＯ。下いって、７番Ｃ１、６ばぁ・・・・・・」
　黎の左下６番はインレーが詰めてあったが、詰めものと歯質の間が茶色に変色し、歯も全体に黒ずんだように透き通っている。
　カッ、カッ。
　由里香先生が、探針でその部分をつっく。
〝痛っ！！〟
「うっ！！　ふうん、ふんふん」
　黎は歯の根の方へ続く痛みを感じ、思わず声を上げた。
　由里香先生は、探針でつっくのをやめると、
「うーん、詰めものの下から虫歯になっているようね。それにちょっと虫歯が進行してるみたいだし・・・・・・。６番はＣ２ね。続いて５番から右の４番まで斜線。５番○、６番○、７番ＣＯ。以上です」
といって、黎の歯科検診の結果を、児童・生徒歯科検診票に書き取らせた。
「Ｃ２が２本に、二次虫歯のＣ２が１本、Ｃ１が１本で、未処置歯が４本に要観察歯が３本かぁ・・・・・・、それに処置歯も５本もあるし。最近の小学校６年生にしては、虫歯が多いわねぇ～。黎ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？」
といいながら、由里香先生は探針で黎の歯垢を掻き取り、
「ほら、こんなに磨き残しがあるよ」
と黎に見せる。探針の先には白いもやもやとしたものがついている。
「右下の６歳臼歯は、治してあるインレーの下から虫歯になってるよ。もっと歯を大事にしなきゃね」
　黎は、歯垢を見せられて恥ずかしさのあまり赤くなった。クラスメイトがくすくす笑っている。
〝せんせい、こんなとこで見せないで！！　みんなも見てるのにぃ・・・・・・〟
「うーん、去年も２本治療しているのね・・・・・・。プラークコントロールができてないなぁ」
　由里香先生が、昨年の黎の歯科検診の結果を見ながらいう。最後の方はひとりごとになった。歯科検診の結果から顔を上げふたたび黎の方へ向き直ると、由里香先生は、
「このあと歯磨きの仕方を、ここにいる歯科衛生士のお姉さんに教えてもらって、しっかり覚えて帰ってね。いい？」
といった。
「はぃ・・・・・・」
「それから、わかってると思うけど、午後は治療だからね」
　念を押された。
「・・・・・・はぃ」
　憂鬱な気持ちで返事をする。
〝いわれなくったって、わかってるわよ。毎年のことだもん〟

「じゃあ、歯磨き指導の方へいって。はい、次の人」
黎は歯科検診のパイプいすから立ち上がり、歯科検診の終わったクラスメイトの集まっているブラッシング指導のコーナーに歩いていった。

由里香先生たち３人は歯科検診のあと打ち合わせをして、午後からの診療の順番などを決めた。その内容はこうである。
歯科診療バスの２台の歯科治療ユニットを使って治療を行い、瑠美と愛里がそれぞれの歯科治療ユニットにつく。嫌がったり、暴れたりする子がいた場合は、瑠美と愛里、ふたりともその子の診療補助につく。それでも嫌がって泣くような場合は、歯科治療ユニットに横たわったとき、足と胸の部分にくる拘束ベルトを使う。
治療の順番は、まず１～３年の低学年の子どもたちを２台の歯科治療ユニットを使って治療し、続いて、４～６年の高学年の子たちと中学生の子たちを１台ずつの歯科治療ユニットに分けて治療をしていく。
「じゃあ、午後からもよろしくね」
こうして午後からの診療の順番を決め、３人は歯科検診の後片づけを済ませると、『ハルちゃん号』に戻っていった。

午後からの治療の打ち合わせを終えた由里香先生と瑠美、愛里は、『ハルちゃん号』に戻り、午後からの診療に使う治療器具の準備と点検をしていた。
「先生。それにしても、分校の子どもたち、特に女の子たちに虫歯が多くないですか？」
瑠美が由里香先生に話しかける。
「そうねぇ。確かに少し多いわね。でも相対的に女の子の多い学校だし・・・・・・」
「でも先生。虫歯があった子たちは、低学年で男の子２人、女の子４人、高学年で男の子１人、女の子４人、中学校で男の子０人、女の子５人ですよ。女の子で虫歯のなかった子は小学校３年生に１人だけ。でもその子も虫歯の治療痕はありましたから、処置歯のない子はひとりもいないってことですよ」
愛里が熱心に由里香先生にいう。
「うーん。これから呼んでくださる食事の席で、食事の前に校長先生に話さないとダメかしら」
「そうですよ。ブラッシング指導とプラークコントロールを徹底的にやって、フッ素の塗布も考えてもらうよういってください、先生」
瑠美と愛里のことばに押されて、由里香先生は、
「そうね。確かに瑠美ちゃんと愛里ちゃんのいうとおりだわ。このごろにしては虫歯の多い子どもたちだし､学校にも積極的に虫歯予防に取り組んでもらうよう申し入れましょう」といった。

「先生、ありがとうございます。なんなら私たちが指導に通ってもいいですよ。先生、そのときはもちろん藤澤歯科医院からの出張扱いですよね」
「まあ、ちゃっかりしてるわね。いいわよ。出張扱いにするわ」
　３人はなごやかに笑いながら、学校が用意してくれている昼食の場所へと向かっていった。

　歯科検診のあとの４時間目が終わり、給食の時間になっている。
　黎は、友だちの川元久美子と机をあわせて給食をとっているが、ふたりとも午後からの虫歯治療のことがあたまに浮かび、元気がなく食が進まない。
「黎、虫歯何本あったの？」
「４本」
「そんなにぃ！？」
「そういう久美子こそ何本あったのよ」
「わたし・・・・・・、わたしは２本」
「ねぇ、久美子。治療痛くないかなぁ～。・・・・・・やっぱり痛いのかなぁ」
「うん、治療痛いよね。麻酔しててもいたいよね」
「ぅん・・・・・・」
　黎の好物の豚肉の竜田揚げが献立にあるというのに、憂鬱な気持ちが黎を支配し、味が分からないほどだった。クラスメイトを見ても、治療を受けなければならない子はみんな一様に憂鬱そうな表情をしている。反対に歯科検診で虫歯のなかった子は、晴れ晴れとしておいしそうに給食をパクついている。
「うーん、おいしい！」
「いいなあ、虫歯がない子は・・・・・・」
　虫歯のなかった子を見て、久美子がマカロニサラダをのろのろと口に入れながらいう。
「ぅん」
「はぁ～」「はぁ～」
　期せずして、黎と久美子からため息が漏れる。

　給食が終わり、歯磨きの時間になった。黎が洗面所の方へ歩いていくと、正面から美月がやって来た。洗面所の鏡を見ながら、黎と美月は歯ブラシを使って歯を磨き始めた。
　黎は歯を磨きながら、美月の方を向いて、
「ねぇ、ねぇ、お姉ちゃぁーん。虫歯あった？」
「うん」
　美月は憂鬱そうな表情で頷いている。
「やっぱり・・・・・・」

″思ったとおりだ。だってお姉ちゃんたら、毎日甘い物ばかりダラダラと食べてるんだもん″
　黎は自分のことは棚に上げて、姉の美月に虫歯があるのは当然だと思った。
「そういう黎はどうなのよ」
　美月が大きな目で黎を見つめている。
″お姉ちゃん、そんなに見ないでよ。正直にいうから・・・・・・″
「うん、今年もあった。また治療されちゃうよ・・・・・・」
″はぁ〜。治療痛いんだろうなぁ〜″
　黎も昨年受けた虫歯治療の痛さを思い出す。美月を見ると、″ほらね。夕べだけ一生懸命磨いたって、やっぱりダメだったじゃない″という顔をしている。
″お姉ちゃんだって、ひとのこといえないじゃない″
「そう・・・・・・。私も治療だょ・・・・・・」
　美月が答えると同時に、いっそう憂鬱そうな顔になった。黎と美月はお互いに顔を見合わせてため息をつくばかり・・・・・・。

　午後１時になった。白早花小学校と白早花中学校の分校に通う子どもたちの歯科治療が始まる時間になった。
　黎のいる小学校の低学年の教室の戸を、女子事務員の吉木美歩が開けていた。
「上原美和ちゃんと佐々木理彩ちゃん。私といっしょにこっちに来てくれるかな」
　女子事務員が最初に治療を受ける１年生の女の子２人を呼び出している。
　１時１０分からの５時間目に備えて教室に戻ろうとしていた黎は、その光景を見てしまい、いっそうの不安に襲われた。
″もう始まるんだ・・・・・・″

　６時間目の授業はもう終わろうとしている。時計の針は２時５０分過ぎを指している。
　女子事務員の吉木美歩が小学校高学年の教室に向かっていた。
″久美子、さっき呼ばれていったけど、ずいぶん長いなぁ。治療大変なのかな？″
　そんなことを思っていた黎の目に女子事務員の姿が入った。
″来ちゃった・・・・・・″
　ガラガラ。
　戸が開き、
「小池さん、小池黎ちゃん。順番が来たから、私についてきて」
″はぁ、とうとう呼ばれちゃった″
「黎ちゃん、治療の時間が来たわ。ちゃんと治療受けに行ってね」
　担任の奥山さやか先生が笑顔でいう。
″いいなぁ。先生は治療受けなくて済んで・・・・・・。ずるいよ。先生、虫歯ないのかな？″

「はぃ」
　黎は小さな声で返事をして立ち上がり、重い足取りで女子事務員のあとをついて行く。
「がんばって！」
　奥山先生の励ます声を背中で聞きながら、教室から廊下へ出た。

　黎は、待合室になっている分校の正面玄関のところにある宿直室に入った。小学校の児童では、黎が今日治療を受ける最後の児童だ。
「このいすで待っててね」
と女子事務員はいって、今度は中学校の教室の方に向かっていった。あと残り最後の一人である中学生の順番を呼びに行くためだ。校務員の大川が立ち上がって、『ハルちゃん号』の中で治療を行っている由里香先生や歯科衛生士に黎が来たことを告げに行く。
　すぐに、
「小池さん、小池黎ちゃぁーん。中に入ってくださぁーい」
と歯科衛生士の小林愛里が『ハルちゃん号』のドアから顔を出して、順番のきた黎に呼びかける。
〝どうしよう。もう順番きちゃった〟
「はぃ」
　黎は宿直室に用意されている待合用のパイプいすから立って、ハンドタオルを手にのろのろと『ハルちゃん号』の方へ向かっていく。校舎と『ハルちゃん号』のあいだは、黎たち児童が普段履いている上履きで歩けるようにシートが敷いてある。
　『ハルちゃん号』のドアから久美子が出てくるのが見えた。久美子は痛そうに顔をしかめて、頬をハンドタオルで押さえている。久美子がこちらへやって来る。すれちがいざまに久美子は、
「黎、わたしとっても痛かったけど、なんとかがまんできたよ。黎もがんばって！」
と励ましてくれた。
「ありがと、久美子。わたしもがんばる」
　黎は答えて、『ハルちゃん号』のステップを上がっていった。

　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュイ、キュイ、キュィーン。
「いがっ！！　いはぁ‥‥‥、ぃいはぁぁ‥‥‥、ぃいはぁぁ‥‥‥」
「ううっ！！　ひはい！！　ひはい！！　ふぅん、ふんふん、あっあっ、くすん、ぐすん。ひはぁーーい！！」
「はいはい、動いちゃダメ」
「がんばってぇー、がまんして。もうすぐ終わるよ」

黎が『ハルちゃん号』に入ったとたん、生々しい治療の音が聞こえた。
キュ、キュ、キュィーン。
「ふぅん、ふん。ひはい！！　ひはい！！　ひゅひゅひへぇー！！」
「痛くない〜痛くない！」
由里香先生と歯科衛生士の蛯原瑠美が、痛がって泣いている中学生を励ましている。
″！？　お姉ちゃん！″
見ると、黎の姉の美月の治療の真っ最中だった。
「ふぇぇぇん、えっえっ」
治療はかなり痛いらしく、美月は泣きながら治療を受けている。さらに美月はベルトで歯科治療ユニットに縛られて、瑠美に抑えられている。
黎はその光景を見て青くなった。
「どうしたの？大丈夫だよ。はい、ここに座ってね」
にこやかに愛里がいって、黎を歯科治療ユニットに座らせた。探針やデンタルミラー、それに黎の嫌いなハンドピースなどの治療器具は、すでに準備が整えられていた。すぐに水色の歯科エプロンが黎の胸元につけられる。
「はぁーい、エプロンつけるね〜」
愛里は黎にエプロンをつけると、
「治療始まるまで、ちょっと待っててね〜」
といって、美月の治療されている歯科治療ユニットに向かう。美月の治療をサポートするためだ。
黎は、怖いながらも美月の歯科治療ユニットから目が離せない。
見ていると、美月は歯科衛生士ふたりががりで抑え込まれて、抑制治療されている。目から涙をポロポロ流し、大泣きしている。
「うわぁぁぁーーん。ひはい！！　ひはい！！」
「動いちゃダメ！　がまんして！」
″……お姉ちゃん、また泣いてる……″
黎は思い出す。美月は昨年の虫歯治療の時も泣いていた。というか、美月は虫歯治療で毎回泣いているといっても過言ではない。すでにタービン音は止んでいて、美月の治療は歯内療法に移っていたが、黎は治療の凄まじさに声も出ない。
″やだ……。わたしまで怖くなっちゃう……″
″コワイよぉ〜。わたしもお姉ちゃんみたいに、あんなに痛くされるのかな。ヤダよ。コワイよぉ〜″
黎は涙が滲んできて、半べそをかいている。

それから１０分ほどが経ち、ようやく美月の治療が終わった。すぐに黎の歯科治療ユニットに愛里がやって来る。

美月が水色の歯科エプロンを外され、のろのろと歯科治療ユニットから立ち上がって、由里香先生と瑠美にお礼をいっている。
「ありがとうございました」
「いいのよ。お大事にね。あした待ってるから」
「美月ちゃん、お大事に」
由里香先生と瑠美が笑顔で美月に答えている。
「はぃ・・・・・・」
美月は小さな声で返事をしているが、抑制治療という過酷な治療を受けたため、元気がない。黎にも気づかず、トボトボと『ハルちゃん号』のドアに向かって歩いていく。
〝お姉ちゃん・・・・・・、よっぽど治療が痛かったんだ・・・・・・。どうしよう、わたしも痛くされる・・・・・・。くすん、コワイよぉ〜〟
黎は、これから受ける治療のことを思って憂鬱な気持ちでいたところに、姉の美月の治療を目撃していっそう不安な気持ちになっていた。

由里香先生が黎の歯科治療ユニットの方へやって来る。不織布の薄いブルーのディスポーザブルのプリーツマスクをつけ、手には新しい黄色のラテラックスグローブをはめて、黎の治療に準備万端の様子だ。
白いナースキャップ、淡いピンクのナース服と淡いピンクと白のストライプのエプロンを着て、ピンクのカーディガンを羽織った歯科衛生士の愛里も不織布の淡いピンクのディスポーザブルのプリーツマスクと黄色のラテラックスグローブをつけて、すでに黎の座る歯科治療ユニットの左側にある歯科衛生士のいすのポジションに立ち、黎の虫歯治療が始まるのを、いまかいまかと待ちかまえている。
「黎ちゃん、いす倒すね〜」
由里香先生はそういうと、ペダルを踏んで歯科治療ユニットを水平にするため倒していく。見る見る、黎の口が由里香先生の手元に近づく。
「もう一度、お口全体を診るわね。はい、アーン」
由里香先生は、デンタルミラーと探針を持って黎に開口を促した。
黎は目を閉じ、怖々と口を開いた。
「うーん、そうだなぁ。やっぱり左下の６番から治療しないとダメかなぁ」
黎の口腔内を丹念に診ながら、由里香先生はいった。
「はい、いいわよ。お口ゆすいで」
歯科治療ユニットが起き上がり、黎はコップの水を口に含んでクチュクチュとゆすぎ、スッピトンに吐き出した。歯に染みたりしないようぬるい水だ。黎がうがいをし終わって正面に向き直ると、由里香先生は、
「黎ちゃん、きょうは左下６番と隣接面から虫歯が拡がっている左上の１番と右上の１番、前歯ね、この３本を治療しましょう」

といった。
″えーっ！　いっぺんに３本も治療するの！？″
　黎は目を見開いた。涙が滲んでくる。
　それを見た由里香先生は、
「そんな、泣かないの！　３本っていっても、前歯の２本は歯の間から虫歯になってるので、実際の治療は奥歯と前歯の２本を治療するみたいなものよ。心配しないで！」
と黎を励ました。さらに続けて由里香先生は、
「残りの１本の左下７番は、明日朝の診療時間に治療しましょう。いいわね。わかった？」
と念を押した。
　黎は治療が心底いやだったが、この状況では逃れられない。しかたなくコクンと頷いた。
「じゃあ、早速治療始めましょう」
　ふたたび歯科治療ユニットが倒されていく。黎の口元は、見る見る由里香先生の手元に近づいていった。無影灯が点灯され、ハロゲンライトの強い光が黎の口を照らす。
「愛里ちゃん、シンマ」
「はい、先生」
　愛里の手から由里香先生に麻酔カートリッジの装着された歯科用注射器が手渡される。
　由里香先生は、麻酔注射とデンタルミラーを手に持ち、
「黎ちゃん、お口開けてね。麻酔注射するよ。少しがまんしてね～」
といった。
″コワイよぉ～。どうか痛くありませんように！！″
　祈るような気持ちで、黎は目を閉じ、怖々と口を開けた。すると由里香先生の持つデンタルミラーで唇の左側を引っぱられる。
″ヤダ、恥ずかしい‥‥‥″
　黎は唇を引っぱられた自分の顔が、変な顔になっているかもしれないと思った。
　だがそんな感慨もつかの間、由里香先生が麻酔注射を黎の口腔内に入れる。注射針が黎の歯茎に刺さる。
　ズブリ。グサッ。
　麻酔注射の針が黎の歯茎に差し込まれる痛さに、それまで行儀よく歯科治療ユニットに揃えられていた黎のかわいい膝小僧が一気に折れ曲がり、脚をくの字型にたてる。注射針と麻酔薬の浸透する痛みを耐える黎‥‥‥。痛い治療に素直に反応する黎‥‥‥。
「ふん、ふうん」
　黎は注射の痛さに半べそをかいている。
「もう一度がまんしようね」
　もう１本の麻酔注射が用意される。
″！？″
「はい、大丈夫だよー。お口アーン」

由里香先生が麻酔注射を右手に、デンタルミラーを左手に、黎に再度の開口を促す。
「大きくお口開けようね〜。はぁーい、ア〜ン」
愛里がにこやかにほほえみ、黎に口を開けるように促しながら励ます。
黎は半べそをかきながら、もう一度口を開けた。ふたたび黎の左の歯茎に刺さる注射針……。
〝うっ！　ぅうーーん〟
「ふぅーん、ふんふん、ふんっ！」
黎は歯茎に注入される麻酔の薬液の圧迫感と不快感に、声を上げ、また膝を立てた。
「はい、がまんして。もうすぐお薬全部入るからねぇ〜」
由里香先生は、ゆっくりと黎の歯茎に麻酔液を注入しながら、黎に声をかける。
「うぅん、ふんふん」
やがて麻酔薬がすべて歯茎に注入された。
「はい、いいわよ。お口ゆすいで」
歯科治療ユニットがいったん起きあがる。
黎は、銀色のコップを手に持って水を口に含み、クチュクチュと口をゆすぎ、スッピトンにはき出す。口をゆすぐ途中に麻酔が徐々に効き出してきた。左の唇から頬にかけて痺れてきた。麻酔が効き出すにつれ、口に含んだ水をはき出すとき、スッピトンから外れ、とんでもないところに水をはき出しそうになる。
口をゆすぎ終わると、ふたたび歯科治療ユニットが倒された。ライトが消され、麻酔が十分効くまでそのまま５分ほど待つ。
「効いたかなー」
黎の麻酔が効くまでカルテを書いていた由里香先生が、歯科治療ユニットの方に向き直る。
「お口開けて。アーン」
愛里が無影灯を点け、黎の口腔に焦点をあわせる。由里香先生が黎の口にデンタルミラーを逆さまに入れ、デンタルミラーの柄で黎の患歯をコンコンと叩いた。
「痛かったり、響いたりする？　感じる？」
由里香先生が黎に聞くが、黎はプルプルとあたまを横に振った。
「そう。麻酔、効いたようね」
そういうと由里香先生は、バスの壁側に付いているブランケットテーブルの上にのっているバーチャージャーから、装着するバーを選び出した。
最初にインレーを外すため、タングステンカーバイドバーを電気エンジンタービンにつける。
「はい、お口開けてね」
バーをつけ終わると、由里香先生はデンタルミラーとピンセットでつまんだロールワッテを黎の口腔の左の頬側と歯茎のあいだ、さらに歯茎と舌側のあいだに入れた。治療のス

ペースをつくり、患歯が唾液で濡れるのを防ぐためである。
　ヘッドレストのところから、電気エンジンタービンが取り出された。
「大丈夫だよ、黎ちゃん。詰めもの外すだけだから」
〝くすん、コワイよぉ〜〟
　イヤイヤ口を開ける。すると、すぐに電気エンジンタービンが黎の口腔内に挿入され、回転を始めた。
　ウィーン、ウィ、ウィ、ウィィィィーーン。
　しばらくすると、カチャッ！という感覚がして、電気エンジンタービンが黎の口から出され、ヘッドレストの近くにしまわれた。
　由里香先生は、
「外れたわ」
というと、ピンセットを黎の口に入れ、インレーをつまむと黎の口腔内から取り出した。
「ちょっと削ったら、すぐに取れたわ。もう詰めものの役割を果たしていなかったわ」
　ブランケットテーブルの上のトレイにおかれたインレーの裏側は干からびた合着剤や虫歯に侵された歯質がついていた。インレーを外された黎の左下６番の歯は大きな齲窩が生じており、象牙質は淡黄色に変色していて、大量の軟化象牙質が見え、急性齲蝕であることが見て取れる。
「だいぶ虫歯が進行しているわね」
　由里香先生は、今度はコントラハンドピースに装着するバーを選び出した。タングステンカーバイドバーを手に取っている。黎の座っている歯科治療ユニットのヘッドレストの近くから、コントラハンドピースが装着されているタービンを引き出し、選んだタングステンカーバイドバーをつけようとした。だが、由里香先生は首を少しかしげると、黎の左下６番に残っている遊離エナメル質を真っ先に削るためか、タングステンカーバイドバーを元に戻し、あらためてダイアモンドポイントジスクを選び、しっかりとタービンに装着した。
　由里香先生は、黎を見つめると、プリーツマスクをつけた顔をにこやかに向け、
「はい、黎ちゃん。アーンして」
と右手にエアータービン､左手にデンタルミラーを持って､黎に口を開けるようにいった。
　愛里もバキュームを持ち、
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」
とほほえみながら、黎に優しい言葉をかける。
〝あんなに尖ってるぅ‥‥‥。ぐすん、痛そぅ‥‥‥〟
　黎は見るからに尖っていたそうなタービンを目の当たりにし、さらには愛里の優しい言葉に、涙が溢れそうになる。
〝お願い！！　削るの痛くありませんように！！〟
　黎は目をきつく閉じ、手に持ったハンドタオルを握りしめ、ふと口を開けた。

「痛かったら左手挙げてくださ〜い」
お決まりのことばを愛里が黎にいう。
黎の左の唇を由里香先生のデンタルミラーが抑えながら拡げる。愛里のバキュームが黎の舌を抑えながら患歯の近くにあてがわれる。愛里が無影灯を操作して、黎の患歯に焦点をあてた。
由里香先生の持つタービンが齲蝕した黎の左下６番にあてられた。愛里がスリーウエイシリンジを黎の口腔内に入れたのを合図に、由里香先生がエアーコンプレッサーのペダルを踏む。タービンに圧搾空気が送り込まれ、高速で回転を始め、黎の左下６番の虫歯を削り始める。
キュイーン、キュイ、キュイ、キュ、キュ、キュイイイイーーン。
キュイ、キュイ、キュィーーン。
コォー、コォォォーー。ジュ、ジュ、ジュポポポポーー。
キュ、キュ、キュイィーン。
キュウィウィウィィィーーン。
キーンっと音が鳴ったとたん、黎の手は握りこぶしをつくり、握りしめたハンドタオルがしわくちゃになる。
黎の虫歯を削る治療が進んでいく。コントラハンドピースに装着されたダイアモンドポイントが、黎の齲蝕に侵された左下６番の歯を削っていく。ダイアモンドポイントは徐々に患歯の深い部分を抉っていく。
そのとたん、黎のかわいいツマ先に力が入り、足の指がキュッと曲がり、歯科治療ユニットに強く押し当てられる。
〝痛っ！！　痛いっ痛いっ痛いーっ！！　痛たたたーっ！！〟
キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。
黎は身を捩る。
「はぁーい、動いちゃダメよー。もう少しだからがまんしてー」
〝せ、せんせい！！　痛いよ！！　お願い！　痛くしないでっ！！〟
黎は涙の溜まった目をうっすらと開け、タービンで黎の虫歯を削り続ける由里香先生を見て、涙目でうったえる。だが、黎の願いも空しく、由里香先生はタービンを止める気配すらみせない。切削治療の痛みはますます激しくなる。
「黎ちゃん、もうちょっとがんばろうねー」
バキュームを使いながら、愛里がにこやかに黎を励ます。
コォォォーー、コォー。ジュッ、ジュッ、ジュポッ。
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
「ふぅん、ふんふん」
「はい、がまんがまん」
由里香先生はタービンの手を止めずにいった。

キュイ、キュイ、キィィーン。キューン、キィーン。
キュ、キュ、キュィーン。キュイィーン。
「あん、はんはん、あひっ！！　ひはいっ！！　ひはいっ！！」
「はぁい、痛くないですよぉ」
「もうすぐ終わるよ〜。もう少しだからがんばって〜」
愛里もバキュームを黎の口腔に入れたまま、励ます。黎は虫歯を削る痛みに半べそをかいていたが、由里香先生や愛里が終わる終わるといいながら、少しも終わりそうもない切削治療の続く痛みにとうとう涙をポロポロ流し始めた。

「エッ、エッ、ひはいっ！！　ひはいよほぉ！！　エッ、エッ。くすん」
黎は、由里香先生のタービンが虫歯を切削する痛みに泣きべそをかいていた。
キュウウウウーーン。
ひときわ大きな音をたててタービンが止まった。
「はい、黎ちゃん。よくばんばったねー。いったんお口ゆすごうか」
と由里香先生は、ペダルを踏む。ゆっくりと歯科治療ユニットの背もたれが起き上がる。
〝ぐすん、くすん、痛かった‥‥‥。まだジンジンするよぉ〜。ぐすん〟
よほど削る痛みが強かったようで、黎はハンドタオルで左の頬を抑え、しばらくじっとしたままだった。左頬全体がまだジンジンと痺れるように痛く、頬がはれぼったい。ほっぺには涙に濡れたあとがある。
ヒック、ヒック。
しゃくり上げながら、黎は銀色のコップを持ち、クチュクチュと口をゆすいだ。口に含んだ水をスッピトンにはき出すが、唇と頬が麻酔による痺れと切削治療の痛みで、うまくはき出せず、スッピトン以外のところに水を出しそうになる。
〝あん、あん。ジンジンするぅ〜。それなのになんで削るの痛いの？　くすん〟
麻酔が効いて唇や頬は痺れているのに、そのくせ歯を削る痛みに対しては、いっこうに麻酔が効いてこない。
黎が口をゆすぎ終わるのを待って歯科治療ユニットが倒される。
〝えっ！　なに！？　まだ終わらないの？〟
歯科治療ユニットが倒れると、黎の口元はふたたび由里香先生の手元に近づいた。
由里香先生は、今度はタングステンカーバイドバーをつけたタービンとデンタルミラーを持ち、にこやかに、
「黎ちゃん、もう一回お口開けようねー。はい、アーン」
と黎に開口するようにいった。
〝やだ‥‥‥。コワイ‥‥‥。あんなに先尖ってる‥‥‥。また痛くされる‥‥‥。〟
由里香先生の持つタービンの先端に装着されているタングステンカーバイドバーは、先ほどのダイアモンドポイントジスクに優さず劣らず先が尖っており、いかにも痛そうだっ

た。
　黎の目に涙が滲んでくる。
「黎ちゃん、大丈夫だよ。今度はすぐ終わるよ。ねっ、だからおっきくアーンしよ」
　愛里がバキュームを構えていう。
　黎は、半べそでイヤイヤながらも口を開ける。
　黎が怖々開けた口に、またタービンが挿入される。由里香先生がペダルを踏み、黎の患歯にあてられたタービンが回転をはじめ、ふたたび黎の虫歯を情け容赦なく削る切削治療がはじまった。
　キュイーン、キュイ、キュイィーン。
　キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイィーーン。
　コォォォーー、コォーー。ジュ、ジュッ。
　キィーン、キィーーーン、キィーン、キィーン、キィーン。
　コォー、コォォォー。ジュポポポーー。
　タングステンカーバイドバーは黎の虫歯を削り、徐々に歯髄に近づいていく。軟化象牙質は少しずつ少なくなってきたが、このまま削っていくとやがて露髄してしまいそうであった。
〝うーん、思ったより進行してるわね。でも歯髄までは虫歯が進んでないようね。‥‥‥でも、これ以上削ると露髄するわ。でも、ここまで削るとそんなに虫歯菌に侵されてないわね‥‥‥。黎ちゃんはまだ小学生だし、デンチンブリッジが形成される期待を込めて、‥‥‥暫間的間接覆罩‥‥‥で、仮封しよう〟
　黎の患歯は歯髄腔に近接した部分まで削ってもまだ軟化象牙質がある。だが黎が小学生ということもあり、デンチンブリッジの形成を期待して一部の軟化象牙質を残し間接覆罩を行うことに決めた。
「愛里ちゃん、間接覆罩するわ」
　キュイィーン、キュ、キュ、キュイーン。
　由里香先生がタービンを止めずに、愛里に指示する。
「はい、先生」
　キュウィィィーーン。
　エアタービンの回転が止まった。由里香先生は、黎の口腔内からタービンを出し、歯科治療ユニットのヘッドレスト付近のタービンがしまわれる位置に戻した。愛里が操作していたバキュームも元の位置に戻される。愛里は、すぐに由里香先生の指示どおり間接覆罩の術式の治療器具、薬剤を用意する。
　黎は、
〝やっと、終わったぁ〜〟
と、いすを起こして、口をゆすがせてくれると思っていた。だが愛里の操作するバキュームがすぐに口腔内に戻され、ふたたび口の中でバキュームのコォーと音がなり始める。

歯科治療ユニットが起きあがる気配もないので、黎が薄目を開けて由里香先生を見ると、ブランケットテーブルの上のトレイのスプーンエキスカーベーダーを数本手に取り選んでいる。黎の虫歯の次の段階の治療の用意をしていた。
″はぁ〜、まだ終わりじゃないんだ‥‥‥。くすん″
目に大粒の涙が溜まるが、バキュームを口腔に挿入されたままの黎は口を閉じることもできず、治療から逃れるすべはない。

由里香先生は、数本の中から選んだスプーンエキスカーベーダーを手に取り、黎に、
「はい、アーンして、じっとしててね」
といった。
「痛くないからね〜。ちょっとがまんしようねー」
愛里も声をかけ、励ます。
った。黎の左下６番の患歯の虫歯菌に侵された軟化象牙質を露髄しないように慎重に除去する。歯質を掻き取られる不快感を感じ、黎は顔をしかめる。
「ふぅん、ふん、ふん。あっ、あっ」
「はいはい、だいじょうぶだよー。痛くない〜痛くない！」
「もうすぐ済むよー。がんばろうねー」
黎の虫歯を治療することに集中している由里香先生に代わって、愛里が励ます。
暫間的間接覆罩をするため、一部軟化象牙質を残した。次に齲窩を削り形成した窩洞を消毒する。
「愛里ちゃん、キャナルシリンジにネオクリーナーを入れたものとオキシドールを入れたものを用意して」
由里香先生が愛里に指示する。
３〜１０％次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと３％過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用いて交互洗浄を行うのは、黎の患歯の齲窩にある虫歯菌に侵された汚染物質を溶解させ除去し、科学的に清掃するためだ。
「はい、先生」
愛里はルートキャナルシリンジを由里香先生に手渡した。
受け取った由里香先生は、黎の患歯の齲窩にネオクリーナーの入ったルートキャナルシリンジを挿入し、ゆっくりと注入する。洗浄したあとは脱脂綿でネオクリーナーを拭き取る。次に中和剤としてオキシドールの入ったルートキャナルシリンジを齲窩に挿入し、慎重に注入して洗浄する。脱脂綿で拭き取る。これを数度繰り返す。
「ううっ、ふぅん。はぁん、はん」
「はぁーい、がんばってー。もう少しで終わりだからねー」
黎の患歯の齲窩がきれいに清掃されていく。由里香先生はさらに齲窩の消毒を続け、続いて歯髄の鎮痛、消炎に取りかかる。

「動いちゃダメよー。じっとしててねー」
　齲窩の清掃液を小綿球で拭き取り、スリーウェイシリンジで軽くエアーをふきかける。齲窩を乾燥させるためだ。
　シューッ。シュ、シューッ。
「ひぃぃ。ひひふー。はぁん、はん」
「はい、はい、大丈夫よー。もう少しだから、がまんがまん」
「愛里ちゃん、齲蝕検知液」
「はい」
　由里香先生は齲蝕検知液と希ヨードチンキで軟化象牙質の確認を行う。虫歯の消毒作用と鎮痛消炎作用を合わせ持つ歯髄鎮痛薬フェノールカンフルを小綿球に少量付して、ピンセットで齲窩の底に置いた。
〝はぁん、はんはん。ううっ、染みるーっ！！〟
　薬剤が削った虫歯に強烈に染み、黎は涙目で声をあげる。
「ううっ、ふぅん、ふん。ひはい！　ひひふーっ」
「はい、もう少しよー、もう少しで終わるから。がんばってー。がまんしょうねー」
　愛里が黎の手を握り、励ました。
「愛里ちゃん、カルビタール」
「はい、先生」
　愛里はカルビタールを由里香先生に手渡した。由里香先生はピンセットで小綿球をカルビタールに浸し、黎の患歯の齲窩に塗薬する。鎮静作用を持つヨードホルムを配合した水酸化カルシウム製剤であるカルビタールによって、薄くなって歯髄がすぐそばに近接してしまっている象牙質に、第二象牙質を形成させて歯髄を保護するためだ。
「愛里ちゃん、ネオダイン」
「はい、先生」
「ううぅーん、ふんふん。んんぁ。はぁん、はぁ」
〝く、くるしぃょぅ……〟
　長い時間、口を開けたままの黎は、鼻呼吸をしているとはいえ、息苦しさを感じていた。
「黎ちゃん、がんばってー。あともうほんの少しだから」
　ネオダインが由里香先生の手にわたる。由里香先生は愛里からネオダインを受け取ると、ストッパーで黎の患歯の齲窩に塗薬する。酸化亜鉛ユージノールセメントを主成分とするネオダインは、フェノールカンフルやカルビタールと同じく歯髄を保護してくれる。
〝これで、よし！　あとは痛みや炎症が出なければ、デンチンブリッジも形成される……。でもデンチンブリッジがうまく形成できない場合は、抜髄になっちゃうわね、残念だけど……。いずれにしても数ヶ月の経過観察と治療が必要になるわ。保護できるものなら、できるだけ歯髄は保護してあげないとね。なんていっても黎ちゃんはまだ小学６年生なんだし……〟

由里香先生は黎の虫歯治療を続けながら思っていた。
グラスアイオノマーセメントで仮封をして、ようやく黎の左下６番の治療が終わった。

「はぁーい、一度お口ゆすごうねー」
歯科治療ユニットが起こされる。黎は銀色のコップを持ち、患歯に染みないようにぬるくした水を口に含み、クチュクチュとゆすぐが、麻酔により左側の頬と唇が痺れているため、スッピトンにうまくはき出せない。とんでもないところにはき出しそうになる。
黎がスッピトンから歯科治療ユニットの正面に向き直った。目に飛び込んできたのは、無影灯のハロゲンライト。ひとつ目でギョロリと黎を睨んでいる。
〝コワぃ‥‥‥〟
「じゃあ、今度は前歯の治療ね」
由里香先生がやさしい目で、ディスポーザブルマスクの中からいった。
〝はぁ‥‥‥。まだ治療されるんだ‥‥‥〟
黎はまた虫歯を削られるのかと思うと、目に涙の粒が浮かんでくる。黎が憂鬱な気持ちで半べそをかいていると、愛里が、
「黎ちゃん、大丈夫だよ！！　ちょっと削るだけだから。ホント痛くないよ」
と黎を励ました。
由里香先生もにっこりと微笑んで、
「そうよ、黎ちゃん。前歯の治療は必ず麻酔をするから、痛みがあっても軽くて済むのよ。だから心配しないで」
と黎を諭すようにいう。
そういって由里香先生はペダルを踏んだ。歯科治療ユニットが倒れていく。
「愛里ちゃん、シンマ」
「はい、先生」
愛里は用意してあった麻酔カートリッジを装着した歯科用注射器を由里香先生に手渡した。
「はい、黎ちゃん。お口アーン」
「黎ちゃん、痛くないから、大きくアーンしよ」
由里香先生と愛里が、黎に口を開けるよう促した。由里香先生は麻酔注射器とデンタルミラーを手に構えて、黎が口を開けるのを待っている。
〝はぁ〜、また、きっと痛いんだろうなぁ〜‥‥‥。はぁ〜、やだなぁ‥‥‥。もう逃げ出したぃょ〜〟
と黎は先ほどの麻酔注射の痛み、切削治療の痛みを思い出し、いっそう憂鬱な気持ちになる。だが麻酔注射を構える由里香先生とバキュームを手にしている愛里が、左右に黎を挟むような位置にいるため、治療から逃れようがない。愛里が無影灯を操作して、黎の前歯に焦点をあてる。無影灯のハロゲンライトが黎の口腔を照らし出す。

由里香先生は、黎の上唇をデンタルミラーで捲り上げると、麻酔注射の注射針を黎の上顎の前歯の歯茎にゆっくりと刺した。チクッとした痛みが黎を襲い、やがて麻酔の薬液が歯茎に浸透していく痛みと圧迫感が拡がっていった。そのうちジーンとした痺れる感覚が、黎の歯茎から上唇、鼻のあたりに徐々に浸透していく。
「ふうんんっ。ふんふん」
「はいはい、もう少しでお薬全部はいるからねー。がんばってがまんしてー」
と由里香先生は注射器の麻酔液を注入する手を休めずに黎にいった。
ようやく麻酔液が黎の歯茎にすべて注入された。
″……やっと終わった″
注射針の痛みと歯茎が痺れるような痛みを感じながら、黎がひといきをついた。だが由里香先生は容赦なく、
「もう１本打つね～。今度は歯茎の裏側だよ。がんばろうね」
とにこやかにいう。
″えっ、やだっ！　また２本も打つの！？″
黎は思ったが、愛里は麻酔カートリッジを装着した２本目の歯科用注射器を由里香先生に手渡す。由里香先生は涼しい顔で、黎の上前歯の歯茎の裏側に再び注射針を刺した。
「ううっ！　はぁん、はんはん」
「大丈夫よー。がまんしてー」
「あと半分、３分の１で麻酔のお薬全部はいるよー。黎ちゃん、がまんがまん」
由里香先生と愛里の励ましと声かけで、黎は涙目になりながらも、なんとかがまんする。２本目の薬液も全部黎の歯茎に注入された。
「麻酔効くまで、少し待とうねー」
愛里が無影灯のハロゲンライトをひとまず消す。黎は上前歯の歯茎、上唇、さらには鼻の方まで感覚がなくなっていくのを感じながら、これからの治療のことを思い、不安な気持ちでいっぱいだった。
しばらくすると、愛里によって無影灯がふたたび点灯され、
「もういいかなー。黎ちゃん、お口アーン」
と由里香先生が黎に開口を促す。黎が怖々口を開けると、由里香先生は黎の前歯をデンタルミラーの柄でたたき、
「ひびく？」
と聞いた。
黎がぷるぷるとあたまを小さく横に振ると、
「麻酔効いたみたいね。治療始めるわね。ちょっとあたま下げるねー」
と由里香先生は、上顎の治療のためヘッドレストを少し下げ咬合面を床と直角にして、黎の前歯を治療しやすい姿勢にする。
″前歯の治療って、こんなにあたま下がるの！？″

「大きく開けてねー。アーン」
　黎が怖々と口を開けると、愛里が黎の上唇を捲り上げるように、バキュームを唇と歯茎のあいだに挿入する。
　由里香先生は、歯科治療ユニットのヘッドレストからエアタービンを引き出し、テーブルの上にあるバーチェンジャーからダイアモンドポイントジスクを選んだ。ダイアモンドポイントジスクがコントラハンドピースにセットされ、由里香先生はタービンを黎の右上１番と左上１番の歯の隣接面の裏側にあてた。挿入されたデンタルミラーが黎の前歯の虫歯を写し出す。黎の前歯は隣接面から左右に薄茶色く変色し、齲蝕が拡がっているのがよくわかる。愛里が無影灯を操作して、ライトをデンタルミラーに合わせる。最後に愛里がスリーウェイシリンジをデンタルミラーのやや上部にセットする。デンタルミラーが曇ったときに、ミラーの根元に断続的にスプレーして、ミラーの曇りを取るためだ。
「はい、削っていくねー。痛かったら、左手を挙げてくださぁーい」
「痛くないからねぇ～大きくアーンしようね～」
　由里香先生と愛里が交互に励ます。
　黎は泣きたいような気持ちだったが、この状態では治療から逃れようもない。はやく治療が終わってくれることを祈るだけだ。
〝お願い！！　どうか痛くありませんように！！　はやく終わりますように！！〟
　コントラハンドピースに装着されたダイアモンドポイントジスクが黎の右上１番と左上１番の齲蝕した前歯の隣接面で回転をはじめ、黎の虫歯を切削する治療が開始された。
　キュイーン、キュイーン、キューン。
　コォー、コォォォォー。
　キュイーン、キュィーン、キィーン、チュイーン。
　黎の虫歯をドリルが削り取っていく。麻酔をしたのに、振動があたままで響くように感じる。
「そうよ、その調子。もうすぐ済むからねー」
「黎ちゃん、あともう少しだからねー。がんばろうねー」
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
　コォォォォー、コォー。ジュポポポポー。
　けれど、黎は削る振動が徐々に痛みに変わってきているのを感じていた。キーンとした痛みが前歯から根の方に走る。黎は眉間に皺を作って身を捩り、膝を立てた。痛みのあまり目に涙が浮かぶ。
「ふぅん、ふん、ふん。んんっ」
「はいはい、動いちゃダメ。危ないよ。もう少しがんばってー」
「黎ちゃん、ほんともうあとほんの少しだから。もうちょっとがまんしよ。ねっ」
「ふうん、ふん、ふぅん、んん。あっ、あっ」
「痛くない～痛くない！」

キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーン。
コォー、コォォォォー。ジュ、ジュ、ジュ、ジュポポポポー。
黎はいっこうに終わらない切削に不安が募る。
″もうすぐ終わる終わる、痛くない痛くないって、ちっとも終わらないし、すっごく痛いじゃない！！　歯医者さんは嘘つき！！″
そっと薄目を開けてみると、目の前に、由里香先生が黎の前歯を削っているドリルが見る。涙目になり半べそをかいた。黎は削る痛みに耐えられなくなった。がまんの限界がきており、ハンドタオルを握りしめていた左手を挙げる。
「はい、はい。大丈夫大丈夫。　もうすぐ終わるよー」
「痛くない、痛くないよー。がんばってー」
左手を挙げたのに、由里香先生は削るのをやめてくれない。
″あんあん、嘘つき！！″
キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。
キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイィーン。
コォォォォー、コォー。ジュッ、ジュッ、ジュポポポー。
「ひはい！！　ひはい！！　ほふひゃへへーっ！！」
「もうちょっとがまんしてー」
「黎ちゃん、がんばろー。ホントあと少しだから」
タービンがひときわ大きな音を立てて、回転をやめた。
キュイイイイイーーン。
ジュポポポポー。
「はい、これで削るのは終わりね。よくがまんしたねー。えらいよ、黎ちゃん」
黎の前歯の虫歯は裏側から拡がっていたが、右上１番と左上１番の隣接面を削っていくとかなり大きく進行していて、左右の中切歯は間が大きく抉られ、結構大きな窩洞が左右の歯に形成されていた。ただ虫歯は齲窩をつくるまでに至ってなくて歯髄までは進行しておらず、神経は抜かなくてもよかった。
「黎ちゃん、お口ゆすいで」
やっと切削治療が終わったので、黎はホッとしていた。
歯科治療ユニットが起こされる。銀色のコップを手に取ると、クチュクチュと口をゆすいだ。スッピトンに水をはき出すが、麻酔で口から鼻全体に痺れているため、うまくはき出せない。舌が前歯にあたった。
″！？　えっ！　前歯の真ん中がない！　なんで！？　どうしようどうしよう″
黎は泣きべそをかきそうになる。その様子に気づいた由里香先生は、
「黎ちゃん、大丈夫よ。視診したときはそんなに虫歯が拡がっているようには見えなかったんだけど、かなり中で拡がっていたの。で、少し大きく削ったんだけど、心配しなくていいよ。ほら、この白いのを詰めるから、治したってわからないくらいキレイに治るわ」

と黎の不安を除くように、笑顔でいった。
「由里香先生のいうとおりだよ。ホントなおしたってわからないくらいキレイになるよ」
「愛里ちゃん、コンポジットレジン。光重合します」
「はい、先生」
　由里香先生は、スリーウェイシリンジでエアーを黎の前歯に形成された窩洞に吹きかける。
　シュッ、シューッ。
「ふふん、ふんふん」
「だいじょうぶよー。がまんっしてー」
　愛里はセルフエッチングプライマーを等量練和皿に滴下し混和したものを、スポンジ小片とともに、由里香先生に差し出す。由里香先生は、ピンセットでつまんだスポンジ小片でセルフエッチングプライマーを黎の前歯の窩洞の壁面全体に塗布する。それぞれ右上１番、左上１番と別々のピンセットとスポンジ小片を使う。次に由里香先生は、黎の前歯の窩洞をスリーウェイシリンジのエアーを弱い圧でかけ乾燥させ、完全に溶剤を蒸散させた。
「せんせい」
「はい、ありがと」
　愛里は練和皿にポンディング材を採取し、新しいスポンジ小片とともに由里香先生に渡した。由里香先生は、ピンセットでスポンジ小片をつまみ、ポンディング材を黎の前歯の窩洞の壁面全体に塗布した。さらに由里香先生は、弱圧でエアーを軽く吹きつけ、ポンディング材を均一な厚さの層に整えた。
「光あてるよ。大丈夫だからねー」
　黎の右上１番と左上１番にハロゲンランプの可視光線が２０秒ほど照射される。その間に、愛里はシェードテイキングにより選択されたシェードのコンポジットレジンを紙練板の上に採集した。
「先生、レジンです」
「はい」
　由里香先生は、愛里からレジン充填器を受け取り、愛里が差し出す紙練板上のコンポジットレジンを充填器で取ると、黎の前歯の窩洞に填塞する。
「もう一度、光あてるよー」
　由里香先生は可視光線照射器で、黎の前歯、右上１番と左上１番のコンポジットレジンを詰めたところに、４０秒ほど光を照射する。窩洞が深いので積層分割照射を行った。コンポジットレジンが硬化し、黎の前歯がキレイに形成され、黎のこの日の治療が終わった。歯科治療ユニットが起こされる。
「黎ちゃん、お疲れさま。今日の治療はこれで終わり」
「黎ちゃん、前歯キレイになってるわよ。見る？」
　由里香先生は明るくいう。愛里が黎に手鏡を渡してくれる。黎は沈んだ顔で鏡を持ち、

こわごわ鏡を覗き込んだ。黎の顔がみるみるほころんでいく。
「せんせい！！　私、うれしい！！」
　黎の前歯はきれいに治療されており、とても虫歯で治したようには見えない。
「そうよ。黎ちゃんががんばって治療をがまんしたから、キレイに治ったのよ」
「黎ちゃん、よかったね」
「黎ちゃん、この調子であとの治療がんばろうね」
「はぃ」
　黎は前歯がきれいに治ったことはうれしかった。だがまだ治療が全部終わっていないことに気づくと、気持ちが萎え憂鬱になる。
「おかしいぞ。今までニコニコしてたのに」
　愛里が笑顔でからかう。黎は少し恥ずかしく、照れくさかった。
「黎ちゃん、ちょっと聞いて」
　由里香先生が黎にいった。
「今日治療した左下の６歳臼歯は神経は取ってないんだけど、ちょっと虫歯が深くて、当分経過観察を続けないといけないの。だから明日の治療が終わったあとは、村営歯科診療所の山西先生に引き継ぐことになるの。治療内容を詳しくメモにとって、診断書を書いて山西先生に渡すわ。いい、ちゃんと治療に通ってね」
「はぃ・・・・・・」
　黎は由里香先生の話を聞いて、
〝いつまで治療に通うことになるんだろ〟
とますます気持ちがふさぎ込む。
「明日は左下の７番、１２歳臼歯ね、この歯を治療するから。学校休んじゃダメだよ。必ず診療バスに来てね。治療は午前１０時から始まるから。学校には、黎ちゃんがあしたも歯の治療を受けなきゃならないことを話しておくわね。あしたの治療のあとは、さっきいったように、村営歯科診療所の山西先生に引き継ぎます。わかった？」
「はぃ」
　黎は、小さな声になりながらも由里香先生に返事した。
「じゃあ、次もがんばろうね。治療した左側の奥歯ではあまり堅いものは噛まないでね。まだ仮詰めだから。はいっ、今日はこれで終わり。お大事にね」
と由里香先生はいい、黎はようやく治療から解放された。
「はぁーい、黎ちゃん、エプロン外すそうねー」
と愛里は黎から歯科エプロンを外してくれる。
「黎ちゃん、明日も待ってるからね。いっしょにがんばろうね。じゃあ、お大事にね」
と愛里が歯科治療ユニットから見送ってくれる。

黎はまだジンジン痛む左頬をハンドタオルで押えながら、
〝ふぅ〜、やっと終わったあ〜。痛かったぁ‥‥‥。もう歯医者はこりごり。‥‥‥でもまだまだ治療が続くんだよね。やだなぁ‥‥‥。いつまで歯医者行かなきゃなんないんだろ〟
と思って憂鬱な気持ちになった。
『ハルちゃん号』のドアを降りて分校の校舎の方へ向かう。
黎は校舎に入りかけて、ふと歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』に振り返った。バスの中から、黎や美月をはじめ尾花平分校の児童・生徒たちが虫歯治療を受け、「怖い！痛い！やだっ！やだっ！」「痛いっ痛いっ痛いーっ！！毎日歯磨きするからっー！！もう許してえー！！痛ぁーぃ！！」「やだー！歯医者さんやだっ！やだっ！治療台のりたくないっ！やだっ！エプロンしないでーっ！こわいっ！こわいっ！お母さん助けてっ！やだっ！やだっ！お口開けないっ！キューンするからお口開けないっ！やだっ！やだっ！」というような泣き声を上げているのが聞こえてくるかのようだった。
痛い治療を思い出し、黎の目にじわーっと涙が浮ぶ。黎はあらためて思った。
〝ほんとに歯医者はこりごり‥‥‥〟

迷惑なバス

複式授業を行っている白早花中学校尾花平分校の教室で、小池美月（みつき）はふと窓の外を見る。美月は卵形のふっくらとした顔をもち、目のぱっちりしたなかなか可愛らしい女のコだ。髪はつやつやと光っていて、ツインテールに纏めている。そしてなによりも白のセーラー服と黒のプリーツスカート、それに白いハイソックスがよく似合っている。

白早花中学の制服は本校、分校とも同じものだ。上は襟元に３本の白線の入った紺のセーラー服に白いリボンタイで、下は紺のプリーツスカートといったオーソドックスな制服である。いまはもう衣替えも終わり、上のセーラー服は、紺の襟に白い半袖の夏服に替わっている。

初夏の山の午前の日差しは眩しい。尾花平高原がひろがる山間部にあるこの分校は、晴れた日はさんさんと光が輝き、とても気持ちがいい。

だが、そんな光景とは裏腹に、美月のこころは憂鬱だった。

今日は６月６日の月曜日。今年もまもなく歯科検診の日がやって来る。

「あーぁ、やだなぁ～。もうすぐ歯科検診‥‥‥。今年も虫歯見つかっちゃうのかなぁ」

分校のある白早花村尾花平には、歯科医院はむろん医院や診療所はひとつもない。尾花平の医療は、巡回診療で支えられている。歯科診療も同じで、Ｕ市から歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』が毎年１月の第２週目を始期として、２週毎の水曜日の午後と木曜日の午前にやって来て、診療をしてくれる。

６月は８日と９日、それに２９日と３０日に来ることになっている。

６月の診療が他の場合と違うのは、歯科衛生週間にちなみ、第１日目、今年であれば８日の午前中に白早花中学校と白早花小学校の尾花平分校の歯科検診が行われるということだ。午前中の歯科検診で虫歯の見つかった子は、午後に『ハルちゃん号』で虫歯治療を受けることになる。

美月は昨年の歯科検診で、虫歯が３本も見つかり、痛い治療を受けた。特に左下の６歳臼歯は生えてすぐ虫歯にしてしまい、幼稚園の年長さんの頃に削ってインレーを詰めてもらっていたのだが、一昨年の１１月頃とれてしまい、そのまま放置していたため、昨年の歯科検診で神経の要治療という診断をされ、抜髄して根管治療をされた。いまはその歯はクラウンに覆われている。

「なにが『ハルちゃん号』よ！！　痛い治療するためにわざわざ分校に来るなんて‥‥‥、頼んでもいないのにぃ‥‥‥。　ほんと迷惑なバス！！」

美月にとっても美月の３歳下の妹の黎（れい）にとっても『ハルちゃん号』は恐怖の的であり、また迷惑なバスだった。

美月も黎も痛い歯科治療は受けたくない。

ありがたくないことに、ふたりにとって来てほしくない『恐怖の歯科治療』が、わざわざ『ハルちゃん号』に乗ってやって来るということなのだ。

「藤澤先生」
　歯科医師会館で巡回診療の打ち合わせを終え、部屋を出ようとしていた藤澤由里香先生は、歯科医師会の事務局長に呼び止められた。
「はい？」
　振り返って返事をすると、事務局長はこう切り出した。
「ひとついい忘れましたが、尾花平の６月の巡回診療は、白早花小学校と中学校の尾花平分校の歯科検診と歯科疾患の見つかった子どもたちの治療があるのですが・・・・・・」
「はい・・・・・・」
〝・・・・・・そのことなら聞いていますけど・・・・・・〟
　由里香先生は、訝しげな顔をして事務局長を見た。
　すると、事務局長は続けて、
「歯科検診で、歯髄炎など重篤な齲蝕の見つかった子どもたちの治療は当然行っていただきたいのですが・・・・・・、尾花平は何しろ山間部ですし、巡回診療は２週間に１回だけですので、日を置かずに何度も歯内療法をしなければならないような症例は、村営歯科診療所で引き継いでもらうことになっています。このことは、歯科医師会、県立病院、白早花村で合意していますし、子どもたちが引き続いて治療を受ける場合、治療の日は特別休暇ということで、授業を休んでもよいということになっています。分校の先生方も了解していますので、よろしく」
といった。
「・・・・・・はい」
「じゃ、よろしくお願いしますね」
〝そういうことなのね。そりゃそうよね、山間部からはなかなか通えるものじゃないわね〟
　事務局長の話を聞いて、納得しながら歯科医師会館をあとにする由里香先生だった。

　６月８日。その日がやって来た。歯科検診の日だ。午前中の歯科検診で虫歯が見つかれば、午後から歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』で治療される。
　美月は朝から憂鬱だった。
〝はぁ、虫歯あるのかなぁ〜。また去年みたいに痛い治療されるのかなぁ。学校行きたくないなぁ〜〟
「お姉ちゃん、どうしたの？　学校行こっ」
「う、うん」
　夕べ、一生懸命歯を磨いている黎に『いまごろ一生懸命磨いたって無駄だって』としたり顔でいったが、ホントは美月も虫歯がないように〝神様お願い！　虫歯ありませんよう

に！！″と祈っていたのだ。
　最近また染みている歯がある。
″染みるのって・・・・・・、やっぱり虫歯かなぁ～″
　ママが、玄関でぐずぐずしている美月と黎をみていった。
「どうしたの？　美月。はやく行かないと遅刻するわよ。今日は歯科検診でしょ。いいわねぇ～この分校は。歯科検診で虫歯が見つかったら、午後にすぐ治療してもらえるんだもの。ひどくならないうちに治療してもらえるのは、とってもいいことだわ。ママが中学生の頃そんな制度になってたらなぁって思うわ。それにこの村には歯医者さんが１ヶ所しかないから、大助かりだわね。美月、去年みたいなことは、もうないでしょうね？」
　ママは気楽にいう。
「ちゃ、ちゃんと歯磨きしてるょ」
　夜の歯磨きのあとにちょくちょく甘いお菓子やジュースをつまんでいる美月は、ドギマギしながら小さな嘘をついた。
″うんっ、もう。他人事だと思って！　治療されるこっちの身にもなってよ！″
　美月は思ったが、ママがそう思うのも無理はない。
　パパとママが美月と黎を連れて都会からこの尾花平地区に引っ越し、『あかがね色』というペンションをはじめてもう５年になる。名前の由来は尾花平高原の夕日に輝くススキの色だ。ペンションは客室が３室の小さなものだが、固定客もついており結構はやっている。美月と黎もお手伝いはしているが、パパとママのふたりで切り盛りしているペンションは、どちらかひとりがかけるとてんてこまいの忙しさになる。美しい景色のほかに、このペンションの売りのひとつにおいしい料理がある。ママがその料理の担当なので、ママが仕事を抜けるのはほんとうに困る。
　この白早花村で歯科治療を受けるには、白早花地区の村営歯科診療所に通うか、２週毎に２日間ある『ハルちゃん号』の診療を待つしか手段がない。
　だから歯科検診のあとしばらくたってから歯科治療を受けようとすると、車で２時間かけて村営歯科診療所に行くか、次の『ハルちゃん号』の巡回を２週待つ、ということになる。
　美月や黎が歯科治療に村営歯科診療所に通うということになるとパパかママが車で連れて行くことになるが、忙しいペンションの仕事のほかに、さらに両親に負担を掛けることになるのだ。
　昨年、美月の３本の虫歯うち１本が二次齲蝕でかなりひどく、何度も歯内療法をしなければならない虫歯だったので、最初『ハルちゃん号』で治療を受けたあと、村営歯科診療所に治療を引き継がれ、学校から休みをもらって、ママに治療に連れて行ってもらった。美月は忙しいママに負担をかけてしまったのだ。その虫歯の治療はとても痛く、結局その歯はクラウンを被せる治療となってしまった。
　それを思うと、美月は″あんな痛い思いするのはもうこりごりだし・・・・・・。歯科検診、

やだけど受けないといけないかなぁ″という気持ちになる。美月はこころが曇ったまま、黎と手をつないで分校への道を登校していった。

ブウウウン、ブルン。
尾花平分校の校庭に歯科巡回診療バスが止まった。
″とうとう来ちゃった……″
美月は校舎に入った歯科診療バスを見て思った。分校の子供たちにとって、美月にとって、迷惑なバスがやって来た。
英語の授業の最中だった中学校の教室では、林原先生が、
「はぁーい、みなさん。歯科巡回診療バスが到着したので、これから講堂に行って、歯医者さんに歯科検診をしてもらいます。はい、はやくして！」
「はぁ〜ぃ」
みんなはいやそうな顔で立ち上がり、しかたなく講堂の方へ向かう。
講堂へ向かう途中、小学生たちが正面からやって来た。黎が美月を見つけて小さく手を振り、「お姉ちゃん！」と声をかけてくる。美月は目で黎に合図をして、クラスメイトといっしょに講堂に入っていった。
″黎、夕べ一生懸命歯磨きしてたから、虫歯ないって自信があるのかな？　なんか余裕だなぁ″
美月は黎を見て、そんなことを思っていた。

尾花平分校の講堂に、分校の小学生と中学生がゾロゾロと入ってくる。まずは小学生の歯科検診が行われ、続いて中学生の歯科検診が行われる。
小学生の歯科検診の間は、中学生は歯科衛生士から歯磨きの指導を受ける。その後、中学生の歯科検診のときに小学生が歯磨き指導を受ける、という日程が組まれていた。
由里香先生は、歯科検診の準備をしている歯科衛生士の蛯原瑠美と小林愛里に、
「瑠美ちゃん、中学生の歯磨き指導と歯科検診の補助をお願いするわ。愛里ちゃんは小学生の方をお願いね」
といった。
「わかりました、先生」
瑠美と愛里は声をそろえて返事をし、再びトレーにデンタルミラーと探針を用意したり、ライトの準備をしたりしていた。

小学生たちの歯科検診を横目で見ながら、美月はクラスメイトと瑠美のブラッシング指導を受けていた。瑠美は大きな歯の模型と、大きな歯ブラシを持って、熱心に生徒たちを指導している。

だが美月にとっては、次に受けさせられる歯科検診のことであたまがいっぱいで、上の空だった。まもなく黎たち小学生の歯科検診が終わりそうだ。もうすぐ口を開けさせられ、口腔内をライトで照らされ、虫歯がないか隅から隅までくまなく調べられる。
〝はぁ〜、やだなぁ〜〞
そんなとき、
「はぁーい、じゃあ次、中学校の歯科検診はじめます。みんな一列に並んで！」
と集合がかかった。
美月は憂鬱な気持ちで列に並んだ。
１年生から歯科検診がはじまった。さっき美月たちがブラッシング指導を受けていた場所で、今度は小学生たちが指導を受けている。
列の前からは、虫歯を表すＣとかの記号の呼び上げが聞こえてくる。そうこうするうちに美月の順番が来てしまった。
歯科衛生士の瑠美が名簿を見て、
「小池美月ちゃんね。ここにかけてね」
とパイプいすを指す。
美月はしかたなくいすに座る。美月の口に向けてライトが当てられる。強い光が口を照らす。
「はい、大きくお口開けてね。あ〜ん」
由里香先生がデンタルミラーと探針を持って、美月に口を開けるように促す。
美月はイヤイヤながらも口を開ける。瑠美が、美月の口腔内がよく見えるようにライトを調整する。
「はい、右上からいきます。７番Ｃ１、６番〇、５番斜線、４番Ｃ２、３番２番斜線、１番〇、左いって１番〇、２番も〇、４番５番斜線、６番〇、７番ＣＯ。下いって７番Ｃ２。レジンの詰めものと歯の間から虫歯になってるわね」
左下の１２歳臼歯は一昨年に治療を受けた。虫歯を削ったあと、レジンを詰めてもらった。だが詰めもののレジンのまわり全部、歯質とのあいだが茶色く変色し、齲蝕が進行しているのが見て取れる。
「つぎ、６番〇。クラウン被せてるのね。最近の中学生では珍しいわね。‥‥‥美月ちゃん、虫歯多いわよ。ホントに歯を大事にしないとダメよ」
この左下の６歳臼歯は昨年抜髄して根管治療をし、クラウンを被せられた。
「はい。続いて、５番〇、４番から右の５番まで斜線。６ば‥‥‥」
カッ、カッ。
由里香先生が探針でインレーと歯質の間を探る。
〝い、痛っ！〞
「っつぅ！！　ふぅん、ふん」
思わず声が漏れた。この６歳臼歯は美月が幼稚園の年長さんの頃、すぐに虫歯にしてし

まい、削ってアマルガムを詰めて治療してもらったが、小学校４年生のときに再び虫歯にしてしまい、もう一度削ってインレーを詰めてもらった。
「うーん、二次虫歯ね。６番は限りなくＣ３に近いＣ２かな。レントゲンを撮るか、削って開けてみるか、しないとはっきりとはいえないけれど‥‥‥。続いていきます。７番‥‥‥、うーん、これも結構ひどい虫歯になってるわね。小窩裂溝の変色だけど、淡黄色だし急性齲蝕かもしれないなぁ」
　いま由里香先生が指摘したこの右下の７番が染みている歯だ。ときどきチクチクと痛むときもある。
　デンタルミラーで丹念に診ながら、由里香先生がいった。
「７番Ｃ２、いやこの歯もＣ３かもしれないわね。以上です。うーん、未処置歯が５本に、処置歯が７本、それに要観察歯が１本かぁ。虫歯多いねぇ〜」
　美月は〝やっと終わった〟と思うと同時に、
〝また虫歯あった‥‥‥。また虫歯削られる。痛い治療される。‥‥‥はぁ〜〟
と泣きたい気持ちだった。
「美月ちゃん、ちゃんと歯磨きしてる？　虫歯たくさんあるよ。神経まで進んじゃってる虫歯もあるし‥‥‥。治療済みの歯も多いし‥‥‥。えーっと」と由里香先生は昨年の歯科検診の結果を見ながら、
「‥‥‥去年も３本あったのね。うーん、去年も結構大がかりな治療受けてるわね〜。美月ちゃん、ほんと歯を大切にしないとダメだよ。でないと、２０代で入れ歯、ってことになっちゃうかもしれないよ」
と美月に注意する。由里香先生の指摘どおり、美月の口腔内は未処置の虫歯や虫歯の治療痕でいっぱいだった。
　由里香先生にきつく注意されて、美月は赤くなっている。
「午後からの診療では、みっちりと治療するからね」
　釘を刺されてしまった。
〝こんなみんなのいるとこで、そこまでいわなくてもいいじゃない‥‥‥。だから歯医者さんっていやなのよ。治療も痛くて怖いし‥‥‥。はぁ〜、午後から憂鬱だなぁ〜〟

　白早花中学校と小学校の尾花平分校の歯科検診が終わった。時間は午前１１時３０分を少し過ぎている。結局２時間目の途中から３時間目いっぱいを使って歯科検診とブラッシング指導が行われた。
　由里香先生と瑠美、愛里は、歯科検診に使ったデンタルミラーや探針などを消毒して、検診器具を片付けている。これから『ハルちゃん号』に戻って、午後からの診療に備えなければならない。昼食は学校の方で用意してくれるそうだ。
「午後からの治療なんだけど‥‥‥」

由里香先生は歯科検診の結果を見ながら、瑠美、愛里のふたりの歯科衛生士にいった。午後からの子どもたちの治療の打ち合わせである。
「‥‥‥処置の必要な虫歯のある子が、小学校低学年で６人、高学年で５人、中学生で５人か‥‥‥。ちょっと虫歯のある子が多いわね」
「先生、やっぱり低学年、高学年、中学生の順番ですか？」
瑠美が由里香先生に聞いた。
「そうねぇ〜、ユニットが２台あるから、瑠美ちゃんと愛里ちゃんにそれぞれのユニットに分かれてついてもらって、治療を進めたいと思うんだけど‥‥‥」
「はい」
瑠美と愛里は返事をする。
「順番だけど、ちょうど小学校高学年と中学生で治療の必要な子が５人ずついるから、まず６人いる低学年の子を３人ずつ同時進行的に２台のユニットで治療して、そのあと瑠美ちゃんについてもらうユニットで中学生の子を、愛里ちゃんについてもらうユニットで高学年の子を、これも同時進行的に治療していきましょう。学校に連絡しといてね」
「はい、わかりました先生」
ふたりの歯科衛生士が声をそろえて返事をしたあと、思いついたように愛里が確認した。
「先生、もし治療を嫌がって泣いたり、暴れたりする子がいた場合は、いつも歯科医院でやってる補助のやり方でいいですか？」
「そうね、その場合はふたりともその子の診療補助についてちょうだい」
「それでも治療に抵抗した場合は‥‥‥」
瑠美が〝いつもどおりですか〟というような目をして由里香先生に聞いた。
「うん。あんまり使いたくはないんだけど、そのときはユニットの拘束ベルトを使うわ。この歯科診療バスのユニットにもついてることだし‥‥‥。足と胸の部分の２ヶ所にベルトがついてるし、それで治療を進められると思うわ」
「はい」
「じゃあ、午後からもよろしくね」
こうして午後からの診療の順番が決まり、３人は歯科検診の後片づけを終わると、『ハルちゃん号』に戻っていった。

キーン、コーン、カーン、コーン。
４時間目が終わった。
「給食だー！！」「おなかすいたー！」「今日はなにかな？」「なぁに、献立みてないの？」
給食当番が給食を運ぶために、調理室に急ぐ。
いつもと変わらぬにぎやかな昼食の光景だ。だが美月は、少しいつもと様子が違う。元気がない。

「どうしたの？美月。給食だよ。いっしょに食べよう」
　里奈がけげんそうにいう。
「ん？う、うん」
　仲のよい森園仁美、平田里奈、といっても美月と３人で３年生は全員ということになるのだが、と机をくっつけて配られた給食に向かう。
「はい、みんな」
　担任の江口先生が大きな声で、
「はい、いただきます」
といった。
　みんなも「いただきまぁす」と返事をして、給食を食べ始める。今日のメインは、豚肉の竜田揚げ。スパゲッティのケチャップ炒めとキャベツの千切りが付け合わせでついている。それに野菜とマカロニのカレー風味サラダ、ネギと豆腐のお味噌汁、ごはん、牛乳とデザートのババロアである。どれもこれもおいしそうでいい匂いがしている。
　いつもだとみんなと楽しく給食をパクつく美月だが、午後からの歯科治療のことを思うと、憂鬱な気持ちになり、食が進まない。
「ほんとに変だよ、美月。いつもみたいにパァーと明るく食べようよ。おいしくなくなっちゃうよ」
「う、うん」
「あーっ。わかった。午後からの虫歯の治療が怖いんでしょ。美月ったら、去年も治療のとき泣いてたもんね」
　図星をさされてしまった。
「ひ、仁美は午後からの虫歯治療、怖くないの？」
「私も虫歯あったし、午後から美月と同じで治療受けるんだよ。虫歯の治療って痛くっていやだけど、虫歯あったら治療しないといけないから、しょうがないじゃない。虫歯ほおっておくと痛み出すし‥‥‥。虫歯の痛さって耐えられないよね。それなら治療の痛さの方がマシじゃない？　それに痛くないようにきっと麻酔もしてくれるよ」
「ぅん‥‥‥」
「いまからくよくよしても消化に悪いだけだよ。さー食べよ、食べよ。うーん、おいしいーっ」
といって、仁美は竜田揚げをはしでつまんでパクついた。
「そうだよ。くよくよしても仕方ないよ」
　里奈もおいしそうに給食を頬張る。
〝はぁー、強いなぁ、２人とも。なんで怖くないんだろ〟
　のろのろと給食を口に運びながら、美月はそう思っていた。

　給食後の歯磨きの時間である。美月が洗面所にいくと、小学校の教室の方から黎がやっ

て来る。ふたりで並んで歯を磨き始めると、黎が聞く。
「お姉ちゃん、虫歯あった？」
「うん」
　美月は力なく頷いた。
「やっぱり・・・・・・」
「そういう黎はどうなのよ」
「うん、今年もあった。また治療されちゃうよ・・・・・・」
「そう・・・・・・。私も治療だょ・・・・・・」
　気持ちが沈み、お互いに顔を見合わせてため息をつく。
　はぁ〜。
　ふたりとも、虫歯が見つかったことで午後から治療を受けなければならないからだ。

　午後１時になった。いよいよ歯科診療バスの中で、子どもたちの歯科治療が始まる。
　低学年の子たちから治療が始まったが、治療が痛くて泣いてる子もいた。胸につけられた、微笑むアニメキャラクターの描かれた歯科エプロンがかえって痛々しい。
　キュ、キュ、キュィーン。
「ふんふん、はぁん、はん、ひはい、ひはいよぉ。あーん、わあーん、ひゃひゅへへー」
「はぁーい、痛くない！痛くない！」
「もうすぐ済むよ〜。もうちょっとがまんしようね〜」
　由里香先生や歯科衛生士の瑠美と愛里が励ますが、子どもたちにとって虫歯治療は怖くて痛いものでしかなかった。
「はあん、はん、いがーーー。えっ、えっ」
　キュイ、キュイ、キュィィィーーン。
　子どもたちの虫歯を削る音と子どもたちの泣き声が『ハルちゃん号』の中で響く・・・・・・。

　６時間目の授業も終わりが近づき始めた。時計は２時４５分を指そうかとしている。さっき２０分ほど前に３年生の最初の患児である仁美が呼ばれて治療に行った。
〝つぎ、わたしだなぁ〜。あー、ドキドキするぅ。今日は仁美で終わりで、私の治療、明日にならないかなぁ〜〟
　美月はそんなことを考えている。だが美月の願いもむなしく、
　ガラッ。
と中学校の教室が開いて、分校の女子事務員の吉木美歩が顔を出してこういった。
「次、小池美月さんね。いま治療受けてる仁美さんは、もうすぐ終わるから」
　担任の江口秋香先生が頷くと、

「美月ちゃん、治療よ。いってらっしゃい」
といった。
「はぃ・・・・・・」
　美月は憂鬱な気持ちで立ち上がると小さな声で返事をした。スクールーバッグの中のポーチからハンドタオルを取り出す。そして女子事務員のあとについて、待合室になっている分校の正面玄関のところにある宿直室に入っていった。歯科診療バスから呼び出されるまで、しばらく宿直室で待つことになる。
「このいすで待っててね」
と女子事務員はいって、今度は小学校の教室の方に向かっていった。高学年の次の順番の子を呼びに行くのだろう。
　美月は宿直室に用意されている順番待ち用のパイプいすに腰掛けた。美月が座ったのを見て、校務員の大川が『ハルちゃん号』へいって、バスのドアから中にいる歯科衛生士の方へ美月が来たことを告げたようだ。
　すると待つまでもなく、
「小池さぁーん、小池美月ちゃぁーん」
と歯科衛生士の蛯原瑠美が『ハルちゃん号』のステップに立ち、順番がきた美月に声をかける。
「はぁーぃ」
　小さな声で返事をして、待合室になっている宿直室のパイプいすから立ち上がり、美月は『ハルちゃん号』の方に歩いていく。校舎と『ハルちゃん号』のあいだは、生徒たちが校舎で履いている上履きで歩けるようにシートが敷いてあった。
　そのとき『ハルちゃん号』から、先に治療を受けに行っていた美月のクラスメートの仁美がバスのステップを降りて出てきた。ハンドタオルで頬を痛そうに押さえている。頬には涙の跡があり、目は真っ赤だった。治療の過酷さを物語るように握りしめたハンドタオルはしわくちゃになっている。給食のときの元気が嘘のようだ。
「仁美・・・・・・」
　すれ違いざま、美月は仁美に声をかけたが、「ぐすん」と鼻を啜り上げる声だけで返事はなかった。
　それを見た美月は、これから受ける治療を想像してさらに憂鬱になる。

　美月が歯科診療バスに入った。黎のクラスメイトが治療の真っ最中。かなり痛そうである。
「はい、ここに座って」
　瑠美が明るいブルーの診察台を指す。美月は嫌な気分で、歯科治療ユニットを見る。
〝はぁ〜〟
　美月は昨年も治療を受けているので、おなじみの歯科治療ユニットだ。何分バスの車内

に設置された歯科治療ユニットなので、ブランケットテーブルは歯科治療ユニットについておらず、右手横の側面にある。歯科治療ユニットの左側にはスッピトンとうがいコップ、歯科衛生士の使うバキューム、スリーウェイシリンジ、排唾管が並んでいる。ライトは左側面からアームでのびてきており、患者の口腔内を照らすようになっている。

美月のもっとも嫌いなタービンは、歯科医師用のスリーウェイシリンジなどといっしょに、歯科治療ユニットのいすのあたまの部分にコンパクトに収められており、虫歯を削るときにいすから引き出され、患者の口腔内に入ってくる。

またレントゲン装置は、これもライトと同じように左側面からアームでのびてきて、患者は歯科治療ユニットに座ったままで撮影できる。レントゲンを使うときは、被爆防止のために患者、術者とも鉛入りのエプロンをつける。ただし、パノラマレントゲン装置は設置されていない。だが、バスの車内とはいえ、このように歯科治療に必要な器械はすべてそろっており、術者は狭い車内ということを除けば、快適に治療を行うことができる。

もっとも、痛い治療を受ける美月にとっては、少しも快適でないのだが……。

美月が歯科治療ユニットに座ると、

「はぁーい、エプロンつけますね～」

と明るく瑠美がいって、美月の胸元に水色の歯科エプロンをつけた。瑠美は白いナースキャップをかぶり、淡いピンクのナース服とパステルピンクと白のストライプのエプロンの上からピンクのカーディガンを羽織り、淡いピンクのディスポーザブルのプリーツマスク、黄色のラテラックスグローブをつけ、今すぐにも美月の治療に取りかかるよう。

「美月ちゃん、もうちょっと待っててね」

美月が見ていると、瑠美はテキパキと美月の治療の準備を進める。トレイにデンタルミラーと探針、エクスプローラー、エキスカーベーダー、ストッパーの歯科５点セットを並べ、ブランケットテーブルに用意している。さらに歯科麻酔用の注射器と麻酔カートリッジ、コントラハンドピースもブランケットテーブルの上に用意された。

その間も、ひっきりなしに隣の歯科治療ユニットから虫歯を削る音がしている。

キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。

キュ、キュ、キュィーン。

「ふぅん、ふんふん」

「はい、大丈夫、大丈夫！もうすぐ済むよ」

「痛くない、痛くない！もうちょっとがまんして」

「ぃは、いが！　あーん、あん」

美月は歯科エプロンをつけられ歯科治療ユニットに座っていたが、切削治療の音が気になり隣の歯科治療ユニットを見た。すると黎の友だちの６年生の川元久美子が治療を受けている。由里香先生がタービンを久美子の口腔内に入れ、久美子の虫歯治療の真っ最中である。愛里が瑠美と同じピンクのカーディガンを羽織り、バキュームを使っている。

久美子は虫歯を削られるのがかなり痛いようで、脚や膝をピクンピクンと絶えず動かしている。
「はいはい、動いちゃダメよ〜、久美子ちゃん。もう少しがまんしようね〜」
美月はその光景をみて余計怖くなってきた。
〝はぁ〜、やっぱり治療痛いんだろうなぁ〜。どうしょぅ……。怖いようぉ〜〟
昨年の痛かった治療を思い出し、涙が出そうになる。

美月はそんなことを考えていたが、歯科治療ユニットの横を見ると、美月の治療の準備を整えた瑠美が、すでに左側の歯科衛生士のポジションで待機している。
やがて久美子の虫歯を治療し仮封を終えて、真新しい黄色のラテラックスグローブをはめ、薄いブルーのディスポーザブルのプリーツマスクをつけた由里香先生が、美月が座る歯科治療ユニットの方へやって来た。
久美子の方を見ると、今日の治療の最後の仕上げに愛里に歯石を取られているが、これも痛いらしく、膝をピクンピクンと動かし、ふんふんと声を上げている。
「お待たせ〜。さぁ、美月ちゃん、治療よ」
明るい声で、由里香先生は美月に声をかけながら、歯科医師用のいすに座った。
「いす倒すね〜。リラックスしてね〜」
歯科治療ユニットが倒れていく。美月の口元がどんどん由里香先生の手元に近づいていく。
「お口開けてくれるかな〜。はい、あ〜ん」
由里香先生がデンタルミラーと探針を持って、美月に開口を促す。瑠美が無影灯を操作して、美月の口腔に焦点があたるようにしている。ハロゲンライトの光が美月の口元を照らす。
〝もう、逃げられない……〟
〝お願い！！　痛くありませんように！！　はやく終わりますように！！〟
美月はそう胸の中で思って、目を強く閉じ、口を開けた。カチャカチャと器具が歯にあたる音がした。由里香先生の持つデンタルミラーと探針が美月の口腔内に入った。右下６番のインレーと歯質の間をふたたび探針が探る。とたんにチクッとした痛みが走る。
「痛っ！！　ふぅん、ふん」
「はいはい、ちょっと痛かったかな」
美月はコクンと涙目で頷く。
続いてその隣の７番の変色した小窩裂溝を探針で探る。
「うっ、ふんふん」
探針で刺激されたためか、こちらも痛みが走った。
「うーん。ここもだいぶ虫歯が進行してるかも……。きょうは右下の２本を治療しましょう。ちょっと虫歯が深そうだから、まずは７番からね。はい、お口ゆすいで」

″えっ！　２本も治療するの？　ヤダよぉ～″
　美月は半べそをかいてしまった。
　だがそんな美月の気持ちにお構いなく、口をゆすぐ美月のそばで、着々と治療の準備が進められていく。
「はい、美月ちゃん、大きくお口開けてね」
　ブランケットテーブルの方に向いていた由里香先生が、手にデンタルミラーとスプーンエキスカーベーダーを持って、美月に向き直った。
「痛くないからねぇ～大きくアーンしようね～」
　瑠美がにこやかに開口を促す。
″ふぅんっ″
　美月は半べそをかいたまま、目を閉じてそっと口を開けた。そんな美月の口腔内がよく見えるように、瑠美がライトを操作して焦点を合わせた。
　由里香先生の持つスプーンエキスカーベーダーが美月の右下７番の患歯の小窩裂溝にあてられ、カッカッと裂溝着色部を開拡する。遊離エナメル質が容易に砕け散った。
「ふぅん、んんっ。痛っ！！」
「はいはい、大丈夫よ。もうちょっとがまんしてね」
　由里香先生がスプーンエキスカーベーダーを持つ手を休めず、美月にいう。
″そんなぁ～。痛い、痛いよ、先生″
「ふんふん」
「大丈夫だから、がんばろうね～。すぐ済むからね～」
　不安を与えないように、瑠美が美月を励ます。
「瑠美ちゃん、バキューム」
「はい、先生」
　若い美月の口腔内は唾液が溢れてきていた。
　コォー、コォォォー。ジュポポポー。
　瑠美が美月の口腔内にバキュームを入れ、唾液を吸引する。
　その間も由里香先生は、美月の右下７番の裂溝着色部を掻き出していた。すると美月の歯の内部は、視診によるエナメル質の裂溝着色部からは想像もできないほど、齲蝕の進んだ状態になっていた。
″やっぱり、だいぶ進行してるわね……。神経までいってないといいんだけど……″
　美月の右下７番は、由里香先生がスプーンエキスカーベーダーで開拡すると、淡黄色をした齲蝕象牙質が大量にあらわれ、大きな齲窩が形成されていた。急性齲蝕である。象牙質の大半は齲蝕に侵され、スプーンエキスカーベーダーで容易に掻き出せるほどの軟化した象牙質となっていた。
「はぁん、はん。ううっ！」
　美月は痛みと不快感でまたもや声を上げてしまう。

「もう少しよ〜。がんばって」
　瑠美がバキュームを使いながら、美月にいった。
　スプーンエキスカーベーダーで掻き出せる軟化象牙質は、由里香先生によって掻き出された。次はタービンで虫歯に侵された部分を削り、窩洞を形成しなければならない。
「はい、じゃあ次は削っていくわね。瑠美ちゃん、シンマ」
「はい、先生」
　瑠美は用意してあった麻酔カートリッジを装着した歯科用注射器を由里香先生に渡す。
「お口開けて。はい、アーン」
「美月ちゃん、お口アーン」
　由里香先生と瑠美が開口を促す。
　由里香先生が手に持つ麻酔注射の針がキラリと光った。それを目にした美月は、いままで受けた虫歯治療の麻酔注射の痛さを思い出し、目が潤んで半べそになる。
「あらあら、そんな顔しちゃって。大丈夫よ、すぐ済むから。それに麻酔したら、あとの治療がずっと楽よ」
　瑠美がマスクをした顔をにこやかに微笑ませて、美月にいった。
〝くすん、はやく終わりますように！！〟
　美月は目をきつく閉じ、口を開けた。
「少しお口閉じ気味にしてね〜」
　由里香先生がそう指示を出すと、美月は少し口を閉じ気味にする。由里香先生はデンタルミラーで美月の右側の唇をひっぱりスペースを作る。そこへ麻酔注射が入ってくる。
「んっ！　うぅっ！！　ふん、ふぅん」
　麻酔注射の注射針が美月の歯茎に刺さった瞬間、美月の目尻に涙の粒があらわれ、声をあげる。
「だいじょうぶよ〜。がんばって〜」
　瑠美が声を掛けて励ます。
「うぅーん、ふんふん」
　歯茎に麻酔液が注入される圧迫感を感じ、美月はまた声をあげる。
「もうすぐお薬入るからねぇ〜」
　ようやくすべての薬液が美月の歯茎に注入された。
〝ほっ。なんとかがまんできたぁ〟
　そう思って美月がうすく目を開けると、また麻酔カートリッジを装着した注射器が瑠美から由里香先生に手渡されている。
〝そんなぁ〜〟
「治療が痛くないようにもう１本打つわね」
　情け容赦なく、美月の歯茎に刺さる注射針。痛みと圧迫感が美月の歯茎を襲う。
「うぅん、うんふん」

「はい、がまんしてー」
　涙目でがまんする美月。
「はい、全部お薬入ったよ。麻酔が効くまでちょっと休憩ね。お口ゆすいで」
　無影灯が消されると同時に、歯科治療ユニットが起き上がる。美月は右側の唇から右頬全体が痺れてくるのを感じながら、銀色のコップを持ち、クチュクチュと口をゆすぎ、スッピトンに吐き出す。口ゆすぎ用の水は患歯に染みないようにぬるくしてある。由里香先生は口をゆすぐ美月に背を向け、美月のカルテを書いている。
　徐々に麻酔が効き出したのか、水が唇から漏れそうになり、スッピトン以外の場所に溢しそうになる。
〝やだぁ～、‥‥‥恥ずかしぃ〟
　口をゆすぎ終え、美月が歯科治療ユニットの正面に向き直ると、さっきまで美月のカルテを書いていた由里香先生は、今度はブランケットテーブルの上にあるバーチャージャーからダイアモンドポイントか、タングステンカーバイドバーか、のどちらかを選ぼうとしている。
　美月がヘッドレストにあたまをのせると、由里香先生は、
「いす倒すね～」
といって、ペダルを踏み歯科治療ユニットを倒す。瑠美がふたたび無影灯を点け、美月の口腔を照らすように操作する。
「もう少し待つわね」
　そういいながら、由里香先生はヘッドレストの側からエアータービンを引き出す。すでにコントラハンドピースは装着されている。そのハンドピースの先端にさっき選んでいたダイアモンドポイントをつけた。

　５分ほどが経過した。
「もう、効いたかな～。はい、お口開けてね～」
といいながら、デンタルミラーを反対に持った由里香先生は、また美月に開口を促した。
　美月が怖々口を開けると、デンタルミラーの柄で美月の右下７番の患歯をコンコンと叩いた。
「感じる？」
　美月がプルプルとあたまを横に振ると、
「効いたようね」
といって、由里香先生はデンタルミラーで美月の右唇を捲りあげた。美月の口腔の右の頬側と歯茎のあいだ、さらに歯茎と舌側のあいだにピンセットでつまんだロールワッテを入れる。治療のスペースをつくり、患歯が唾液で濡れるのを防ぐためだ。
「ちょっとあたまの位置、調整するねー」
　下顎の奥歯の治療なので、咬合面が床から３０度の位置になるように、歯科治療ユニッ

トのヘッドレストの位置が調整される。
〝あぁん、治療始まる……。コワイよぉ〜〟
　由里香先生は右手でヘッドレストのところからエアータービンを引き出し、左手にデンタルミラーを持った。
「はい、お口大きく開けようね。アーン」
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」
　由里香先生と瑠美が、美月に口を開けるように優しくいった。
「痛かったら左手挙げてくださ〜い」
　美月は、本当は治療なんか受けず、歯科治療ユニットから逃げ出したかった。しかし由里香先生と瑠美に両側を固められている状況では、逃げるすべがなかった。
〝お願い！！　痛くありませんように！！〟
　半べそで、目を閉じて口を開く。治療を前にして、緊張から手にしたハンドタオルをギュッと握りしめた。
　由里香先生のデンタルミラーが美月の右頬を抑えるように挿入される。コントラハンドピースにダイアモンドポイントを装着したエアタービンが右下７番の歯に当てられる。続いて瑠美の持つバキュームが美月の舌を抑えるように挿入された。瑠美は無影灯を操作し、これから治療される美月の齲蝕した患歯に無影灯のハロゲンライトがあたるように調整する。最後に瑠美はスリーウェイシリンジを美月の口腔内に挿入した。美月の口腔内は治療器具でいっぱいになった。
　由里香先生がペダルを踏む。エアータービンが高速に回転し始め、美月の齲蝕した患歯を削り始めた。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュイ、キュイ、キュィーン。
　キュ、キュ、キュィーン、キュ、キュ、キュィーン、キュイン。
　コォー、コォォォォーーー。
「その調子よ、美月ちゃん。大きくお口開けててね」
　由里香先生が美月の虫歯を削る手を休めずにいった。
　だが美月は、虫歯の切削治療が始まり、キーンっと音が鳴った瞬間、ハンドタオルを握りしめた手はいっそうの握りこぶしをつくり、さらに白いハイソックスを履いたかわいいツマ先に力が入り、ピーンとのびた。
「ううっ、ふん」
　美月は鼻をならしながらも、虫歯を削る痛みを必死でがまんしている。
「はい、がんばってぇ〜。すぐ済むからねぇ〜」
　瑠美がバキュームを操作しながら励ます。
　キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。
　キュウーーン、キュイ、キュイ、キュウーン。

コオオオオーー、コォー。ジュ、ジュ、ジュッ、ジュッ、ジュポポポー。
″いっ、痛っ！！　痛いよ！！　せんせい！！″
タービンが徐々に美月の虫歯の深い部分を抉り出し始め、神経に近い象牙質を削り出すと、痛みが美月を襲い始めた。美月の脚が膝を軸にX型になり、膝がピクン！ピクン！！と動き出した。
「ううん、うんうん、ひぃぃ」
キュイイイイーーン。
タービンが止まった。
「痛い？」
由里香先生が聞くと、美月は涙目で頷き小さな声で、
「・・・・・・痛ぃ・・・・・・」
といった。
「うーん、美月ちゃん麻酔が効きづらい体質なのかなー。もう一度麻酔するわね。瑠美ちゃん、お願い」
再度、麻酔注射を打つと聞いた美月はさきほどの痛みを思い出して凄く動揺し、
「大丈夫・・・・・・いぃです・・・・・・」
といった。だが、由里香先生は、
「ダメよ。痛いんでしょ。麻酔しないとこれからの治療もっとつらいわよ」
と美月の口を開けさせ、強引に歯茎に麻酔を打った。
「ふぅーん、うふん、うふん、えっ、えっ」
美月はふたたび麻酔注射を打たれ、痛さのあまりうめきながら泣いていた。
５分ほどの休憩ののち、
「じゃあ、もう一度削っていくわね」
と切削治療が再開される。今度は軟化象牙質を歯髄の方に削り込んでいくため、タービンの先端はタングステンカーバイドバーに付け替えている。
キュイーン、キュイ、キュイ、キュイィーーン。
コォー、コオオオオー。ジュ、ジョポポポポーーー。
タングステンカーバイドバーは、美月の虫歯の深いところを削り、徐々に歯髄に近づいていく。
美月はキュィ～ンって削られてる間中、膝がピクン！ピクン！！と動き、さらにはキュィ～ンと治療が進むにつれ、足がピクン！ピクン！制服のスカートが捲れそうになっている。
由里香先生はその様子を見て、美月にもう一度麻酔注射をして、さらに虫歯を削る。切削治療の途中２回も麻酔注射をされたのに､美月は削る痛さがいっこうに収まらないので、そろそろ我慢の限界に達しようとしていた。
キュイ、キュイ、キュィーーン。

キュ、キュ、キュウィーーン。
由里香先生は、美月の虫歯をキューン！と治療し続けている。
″せんせい、痛い！痛いよ！許してぇー！！痛いっ痛いっ痛いーっ！！毎日歯磨きするからー！！お菓子ダラダラ食べないから！！もう許してぇー！！痛ぁーぃ！！″
虫歯を削る痛さに我慢できなくなってきた美月は顔をしかめて眉間に皺を作り、かなり痛がって、
「ひぃぃひぃぃ」
といい、とうとう声を上げ始め、左手を挙げた。ところが美月が左手を挙げても、由里香先生はタービンで虫歯を削るのを止めてくれない。
「はい、がんばってー。もうすぐ終わるよ」
ついに美月は、虫歯を削る痛みをどうにも我慢できなくなってしまい、膝立てた。制服のプリーツスカートがさぁーと滑り落ち、美月の太ももが露わになる。美月は、切削治療の痛みのあまり膝を立ててしまっているので、プリーツスカートが全開となり、かわいい白パンツが丸見えになっている。
瑠美はバキュームを使いながら、
「あらあら、美月ちゃん。パンツ見えちゃってるよ。恥ずかしい格好止めようね〜」
と美月を注意する。
だが、瑠美がいくら美月をやさしく注意しても、美月は虫歯を削られるのが痛くてそれどころではなかった。痛い虫歯をキューンと削られるのがすごく痛かったのだ。

そのときようやく治療の終わった黎のクラスメイトの久美子が、口をゆすぎ終わり、いま治療の真っ最中の美月を見た。
″あんなに痛がっちゃって‥‥‥。美月お姉さん、きっとすごく痛いんだろうな。‥‥‥かわいそうに。わたしも痛かったけど、お姉さんそれ以上に痛いみたい‥‥‥。ホント見てるだけでも痛いのがわかる‥‥‥。可哀想‥‥‥″
″でも、美月お姉さん、あんなにパンツ見えちゃってる‥‥‥。あんな格好、恥ずかしぃ‥‥‥。痛くてそれどころじゃないのかな？″
″それに美月お姉さん、私よりお姉さんなのに、歯医者さんで泣くなんて‥‥‥。恥ずかしぃなぁ〜″
久美子は、自分の治療が終わったのをよいことに、美月が治療されるのを見ながらこんなことを思っていた。

「うーん。どうも美月ちゃんは、麻酔が効きづらい体質みたいね」
由里香先生が美月の虫歯を削るのをいったん止めていった。だがタービンは、美月の口腔内に入ったまま‥‥‥。
「これ以上麻酔をしたら、からだの負担の方が大きいわ‥‥‥」

由里香先生がつぶやくようにいった。そして美月の目を見ながら、
「ちょっとつらいけど頑張ろうね～」
といって、患歯にあてられていたタービンをふたたび回転させ、美月の虫歯の切削治療が再開される。
キューン！
キィーン、キュイーン、キュィーン。
「ふぅん、ひぃぃひぃぃ」
「はいはい、もうちょっとがんばってー」
「痛い！痛い！」
キィーン！
キュィーン、キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイィィィーーン。
キュウーン、キューン、キュイ、キュイ、キュイーン。
コォー、コォォォォーーー。ジュ、ジュ、ジュポッ。
深く抉られていく美月の患歯。削る痛みは容赦なく美月を襲う。
「はん、あっ、はんはん。ひはっ！！　ひはいっ！！　ひはいっ！！」
「はいはい、動いちゃダメ」
「がんばってぇー、がまんして。もうすぐ終わるよ」
由里香先生の治療は、瑠美の励ましの言葉とは裏腹に、いっこうに終わる気配もなく、ついに美月は、立ててX字型にあわせていた膝をピクン！ピクン！と動かしはじめた。
「ほらほら、危ないから動いちゃダメ」
「ひぃぃひぃぃ～。ひはいっ！！　ひはいっ！！　もほ、ひゅひゅひへー！！」
虫歯を削る痛みに、とうとう我慢しきれなくなった美月は、足をピクン！ピクン！とし、さらにはパタパタと動かし出した。
「大丈夫だったら！」
「はんはん、いがぁぁぁーー」
美月は、治療の痛みから逃れようと、あたまを動かし、口を閉じようとする。
「もう！　しょうがないわねー、美月ちゃんたら。怖がりねー。はい、もう一度お口開けて」
キュイーン、キュ、キュ、キュイ、キュイィーーン。

「ダメよ、動いちゃ。ほらほら危ないよ」
由里香先生が美月になおも注意する。
キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
キュイ、キュイ、キュィーン。キューン、キィーン。
「いがっ！！　いはぁ……、ぃいはぁぁ……、ぃいはぁぁ……」
「ううっ！！　ひはい！！　ひはい！！　ふぅん、ふんふん、あっあっ、くすん、ぐすん。

ひはぁーーい！！」
「はい、痛くない、痛くない。がまん、がまん」
　だが虫歯を削られる痛さに、美月は目から涙をポロポロ流し、身を捩りながら、白いハイソックスをはいた脚をパタパタさせて治療の痛みから逃れようとする。制服のスカートは捲れ、またもや美月のかわいい白パンツは丸見えになっている。
　由里香先生が持つタービンが患歯を外れ、美月の内頬を傷つけそうになった。すぐさま由里香先生はペダルから足を離す。
　キュウウウーーーン。
「ホント、しょうがないわねぇ。瑠美ちゃん、ベルト」
「はい、先生」
　瑠美と愛里は、歯科治療ユニットの足と胸の部分についている拘束ベルトを美月の足と胸に装着した。美月は身動きが取れなくなる。さらに由里香先生は、
「瑠美ちゃん、アングルワイダー」
と瑠美に開口器の指示を出す。
「はい」
　瑠美は開口器を由里香先生に渡す。
「ごめんねー。ちょっとの間、がまんしてねー」
　瑠美はそういうと、美月の口を無理矢理開けさせる。美月があたまを動かさないように、愛里が両手であたまを抑えた。瑠美によって開けさせられた美月の口に、由里香先生が開口器を持って迫る。
「ふんふん、やら！！　やら！！　コワイ！！　コワイ！！」
「大丈夫だから」
「怖い！　痛い！　やだっ！　やだっ！」
「コワい！　コワい！」
「ほんと、大丈夫だよ。怖くないよ」
　なだめながら、由里香先生は美月の口に開口器を装着した。美月があたまを動かさないように、ヘッドレストもやや下がり気味にセットされる。美月の抑制治療がはじまった。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュ、キュ、キュィーン。
　キュイ、キュイ、キュイィーン。
「はあん、はんはん。はぅっ。ふぅん、ふんふん。あっあっ。あっ！！　イダァーイッ！！　イタイっ、イタイっ、イタァーイッ！！　イダイッ、イダァイヨォ〜！！　エッ、エッ」
　美月は涙ボロボロで「イダァーイ、イダァーイ！！」と声をあげている。バキュームで吸引しているにもかかわらず、口から唾液が漏れる。口の周りが唾液でべとべとになる。「イダァイヨォ〜イダァイヨォ〜！！」水色のエプロン越しに美月の息遣いが激しくなる。汗と唾液と涙にまみれた美月の泣き顔が無影灯に照らされ、薄暗い歯科診療バスの治療ス

ペースにひときわ印象的に浮きあがる。
「はいはい、もう少しがまんして！」
「大丈夫、痛くない〜痛くないよ〜」
「はん、はん。ひはい！！　ひはい！！」

　黎は、待合室になっている分校の正面玄関のところにある宿直室に入った。小学校の児童では、黎が虫歯治療を受けなければならない最後の児童である。
「このいすで待っててね」
と事務員はいって、今度は中学校の教室の方に向かっていった。虫歯治療が必要な最後の一人である里奈の順番を呼びに行くためだ。校務員の大川が立ち上がって、『ハルちゃん号』の中で治療を行っている由里香先生や歯科衛生士に黎が来たことを告げに行く。

「先生、小池黎さん来ました」
　『ハルちゃん号』のステップのところから大川が中に声をかける。

「愛里ちゃん、次に治療する子を呼んで」
　大川の声を聞くと、由里香先生がリーマで美月の虫歯治療をする手をとめずにいった。
「先生、診療補助の方、大丈夫ですか？」
　美月のあたまを抑えている愛里が聞き返す。
「うん。ベルトも使ってるし、ヘッドレストも少し下げ気味にしているから‥‥‥。でも次の子をユニットに座らせたら、もう一度手伝って」
　愛里は、
「分かりました、先生」
というと、『ハルちゃん号』のドアのステップから顔を出し、宿直室の方へ呼びかけた。

「小池さん、小池黎ちゃぁーん。バスの中にお入りくださぁーい」
と歯科衛生士の小林愛里が『ハルちゃん号』のドアから顔を出して、順番のきた黎に呼びかける。
〝どうしよう。もう順番きちゃった〟
「はぃ」
　黎は宿直室に用意されている待合用のパイプいすから立って、のろのろと『ハルちゃん号』の方へ向かっていく。
　『ハルちゃん号』のドアから久美子が出てくるのが見えた。久美子は痛そうに顔をしかめて、頬をハンドタオルで押さえている。久美子がこちらへやって来る。すれちがいざまに久美子は、

「黎、とっても痛かったけど、なんとかがまんできたよ。黎もがんばって！」
と励ましてくれた。
「ありがと、久美子。がんばる」
　黎は答えて、『ハルちゃん号』のステップを上がっていった。

　美月の抑制治療が始まってしばらくした頃、『ハルちゃん号』で治療を受けるために、妹の黎が入ってきた。
　キュイーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイイイイーン。
　キュイ、キュイ、キュィーン。キュイィーン。
「いがっ！！　いはぁ……、ぃいはぁぁ……、ぃいはぁぁ……」
「ううっ！！　ひはい！！　ひはい！！　ふぅん、ふんふん、あっあっ、くすん、ぐすん。ひはぁーーい！！」
「はいはい、動いちゃダメ」
「がんばってぇー、がまんして。もうすぐ終わるよ」
　黎が『ハルちゃん号』に入ったとたん、生々しい治療の音が聞こえた。
　キュ、キュ、キュィーン。
「ふぅん、ふん。ひはい！！　ひはい！！　ひゅひゅひへぇー！！」
「痛くない〜痛くない！」
　由里香先生と歯科衛生士の蛯原瑠美が、痛がって泣いている中学生を励ましている。
〝！？　お姉ちゃん！〟
　見ると、黎の姉の美月の治療の真っ最中だった。
「ふぇぇぇん、えっえっ」
　治療はかなり痛いらしく、美月は泣きながら治療を受けている。さらに美月はベルトで歯科治療ユニットに縛られて、瑠美に抑えられている。
　黎はその光景を見て怖くなった。
「どうしたの？大丈夫だよ。はい、ここに座ってね」
　愛里がにこやかに黎をブルーの歯科治療ユニットに座らせると、ヘッドレストからすぐに水色の歯科エプロンを取り上げた。
「はぁーい、エプロンつけるね〜」
　黎の胸元にエプロンをつける。
「治療始まるまで、ちょっと待っててね〜」
　愛里は美月の治療をサポートするために、ふたたび美月の歯科治療ユニットに戻っていった。

　キューン、キュン、キュイーン、キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイィーーーン。

キュイーン、キュイ、キュイィーン。
コォー、コォォォーー。ジュポポポポーー。
「はぁーーん、あんあん、わぁーん、わんわん。ひはい！！　ひはいよほー！！」
「もう少し痛くない痛くない！　もうすぐ終わるからね～我慢しようね～」
「そうだよ、美月ちゃん。もうすぐ終わるよ。がんばってぇ～」
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイィーン。
コォォォーー、コォー。ジュ、ジュジュ、ジュポポポポーー。
「うわぁーーん、あんあん。痛いっ痛いっ痛いーっ！！　毎日歯磨きするからっー！！　もう許してえー！！　痛ぁーぃ！！」
美月は汗と涙と唾液でグチャグチャの顔で、由里香先生と瑠美にうったえるが、開口器をはめられた口から漏れる言葉は、由里香先生たちに届かない。
美月の患歯の軟化象牙質を削っていくうちに、露髄した。露髄した歯髄は、虫歯菌に侵され、充血して赤黒く変色しており、歯髄本来のきれいなピンク色ではなかった。
〝これは、やっぱり抜髄しないとダメね〟
キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュイイイイーーン。
さらに削り込みを続け、髄室の天蓋部分を除去する。
キュウウウウーーーン。
タービンがいったん止まった。
〝くすん、えっえっ。‥‥‥ぃ痛かった、‥‥‥長かった‥‥‥。やっと削るの終わりかなぁ？〟
ベルトで縛られ開口器を填められたままの美月は、うっすらと涙に濡れた目を開け、由里香先生の方を見た。すると由里香先生は、あたらしいバーをタービンに装着している。今度は先端がねぎぼうずのような格好をしている。
〝そんなあ～。まだ終わりじゃないの？〟
美月のもう治療が終わってほしいという気持ちとは裏腹に、由里香先生は、
「はい、もう少し削るよー」
といってタービンを構える。
「美月ちゃん、アーン。もうちょっとだからねー。がんばろうねー」
瑠美と愛里がにこやかにいった。
〝もうやだよ‥‥‥。ぐすん〟
またもや美月の目に涙が滲む。
「そんな顔しないで。ほんとにもう少しだから」
と瑠美が微笑みながら、美月を安心させるようにいう。
美月はこれ以上治療を受けるのがいやだったが、ベルトで抑制され開口器を填められ、さらには愛里にあたまを抑えられている状態では治療から逃れるすべはない。開口器で開けられた口腔内に、由里香先生の持つタービンとデンタルミラー、瑠美の持つバキューム

とスリーウェイシリンジが挿入される。愛里が無影灯のハロゲンライトの焦点を美月の口腔にあわす。
　キューン！
　キューン、キュン、キューン。
　キィーン、キュイーン、キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイィーン。
　コォー、コォォォォーーーー。
　切削治療が再開される。
　すでに美月の右下７番の患歯はダイアモンドポイントジスクやタングステンカーバイドバーを装着したタービンの切削により大きく抉られていたが、今度は露髄した歯髄腔の髄角、さらには歯冠部歯髄をラウンドバーが削っていく。
「ふん、ふん、あっ、あっ、ひはい！！　ひはい！！」
「はぁーい、もう少しがまんして」
「痛くない痛くない！　もうすぐ終わるよ」
「はん、はん。ううっ！　ひぃぃひぃぃ。あん、あん、ひはい！　ひはいほぉ！！」
「はいはい、がんばってー」
「痛いイダァーイ！！」
「もう少し痛くない痛くない！もうすぐ終わるからね〜我慢しようね〜」
　由里香先生、瑠美、愛里が代わる代わる美月を励ますが、美月は切削の痛みに絶えず身を捩ろうとする。だがベルトで抑制され、愛里にあたまを抑えられているため、それもままならない。
　キュイーン、キィーン、キュウウーーン。
　キュキュ、キュイ、キュイ、キィーーーーン。
　コォォォォーーー、コォー。ジュポ、ジュジュ、ジュッ、ジュポポポポーー。
〝はぁん、はん、痛いっ！！　痛いよぉ〜。せんせい、もう許してぇー！！　これからはちゃんと歯磨きするからーっ！！　痛いっ痛いっ！！〟
　美月の願いも空しく、まだしばらく切削治療が続いた。

　キュウウウウーーーン。
　タービンが止まった。
「はい！　美月ちゃん、削る治療はこれで終わり！　よくがまんしたわねー」
「美月ちゃん、えらいよー。よくがんばったよー」
　ようやく美月の虫歯を削る治療が終わった。由里香先生、瑠美と愛里が口々にほめてくれる。
〝えーん、痛かったよぉ〜。やっと終わった‥‥‥〟
　だが美月がほっとしたのもつかの間、今度はクレンザーによる歯根部歯髄の抜髄、さら

にリーマとファイルによる根管拡大が行われる。歯髄まで進行した齲蝕のメイン治療である歯内療法が始まるのだ。
「美月ちゃん、次は神経を取るからね。がんばろうね」
「由里香先生は、神経取るの上手だから、すぐ済むよ」
　由里香先生がブランケットテーブルの上のトレイからクレンザーを取り上げ、美月の方を向き、
「はい、痛くないよ。じっとしててね」
とクレンザーを、削って大きく抉られた患歯の窩洞の中に入れた。
　ギリリ。ギリ。
〝！？　痛ぁーい！！　痛い痛いっ！！　あっ、あんあん。　痛たたたーっ！！〟
「ああん、はんはん。ひはーっ！！　いがーっ！！」
　歯根部の歯髄を由里香先生のクレンザーが絡め取ろうとした瞬間、激しい痛みが美月を襲った。ベルトで拘束され、開口器を填められているにもかかわらず、美月は中学生とは思えない強い力で治療から逃れようとする。
　瑠美と愛里があわてて抑えつける。
「ううん、うんうん！！　いはぁ‥‥‥ぃいはぁぁ‥‥‥ぃいはぁぁ‥‥‥。はぁん、ううっ！　いがっ！！」
「痛くない〜痛くない！」
「もう少しよ、がんばってー」
「もうすぐ終わるよ〜」
　美月は泣きべそをかき、脂汗を浮かべ、開口器を填められた口からは唾液を漏らしながら、治療を受けている。
　グリグリ、グリグリ。
「ふぅん、ふんふん、んんぁ。ああん、あんあん」
「はぁい、大丈夫、だいじょぶよー。もう少しがまんしようねー」
「ふん、ふん。ううっ、あぁーーん、えっえっ」
「痛くないよー。すぐ済むからねー」
　コォー、コォォォーー。ジュ、ジュポポポポー。
　瑠美がバキュームで美月の口腔内から唾液を吸引する。
　由里香先生は、クレンザーで美月の患歯である右下７番の歯の根管内の虫歯に侵された歯髄を絡め取ってはガーゼで拭き取り、さらに絡め取る。近心根、遠心根の順に根管治療を進めていく。ガーゼには虫歯菌で充血した歯髄がついていて、痛々しい。
「瑠美ちゃん、キャナルシリンジにネオクリーナーを入れて」
「はい、先生」
　瑠美は次亜塩素酸ナトリウム溶液であるネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジを由里香先生に渡す。由里香先生は瑠美からルートキャナルシリンジを受け取ると、美

月の患歯の根管内に慎重に注入する。根管内は次亜塩素酸ナトリウム溶液で満たされた。それからストッパーをつけた太いH－ファイルを美月の患歯の根管内に挿入し、根管壁の全周にわたりファイリングを行い、虫歯菌による感染歯質を完全に除去する。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。

美月は根管をいじられる不快感と痛みで、また目に大粒の涙が浮かぶ。

「んんっ、ああっ、ひぃぃひぃぃ。あっ、あっ、うんうん、くすん、エッ、エッ」

「はいはい、だいじょうぶ。もう少しだから、がまんがまん」

由里香先生はファイルを使う手を止めずに、美月に注意する。

「んんっ、んぁ、ふぅん、ふん」

「美月ちゃん、がんばってー、もうちょっとだよー」

愛里が美月のからだを抑えたまま、励ます。

由里香先生はファイルとリーマの号数を変えながら引き続いて根管治療を行い、根管を漏斗的に拡大する。

「瑠美ちゃん、ネオクリーナーとオキシドール」

「はい」

瑠美はルートキャナルシリンジにネオクリーナーとオキシドールを入れたものを用意し、由里香先生に手渡す。由里香先生は次亜塩素酸ナトリウム溶液を入れたルートキャナルシリンジと過酸化水素水を入れたルートキャナルシリンジを用いて交互に洗浄を行い、美月の患歯の根管内の汚染物質を科学的清掃で溶解して除去した。次亜塩素酸ナトリウム溶液と過酸化水素水を使うのは、発泡させて根管の汚染物質を溶解させるためであり、またアルカリ性と酸性の溶液を交互に使うのは、根管内を中和させるためである。

「はぁ、はぁ、んんぁ。ひぃひぃ、んんっ」

「はい、はい、大丈夫大丈夫！　もうちょっとがまんしてー」

「瑠美ちゃん、生理食塩水をお願い」

「はい、先生」

続いて由里香先生は、美月の患歯を生理食塩水で洗浄をし、エンドラチューブ（点滴針）で吸引を繰り返して、美月の患歯の根管内の清掃を繰り返した。

「瑠美ちゃん、綿栓を巻いたブローチ」

「はい、先生」

瑠美は滅菌綿栓をブローチに太めに巻きつけたものを由里香先生に手渡した。由里香先生は拡大形成と科学的清掃が終わった美月の患歯の根管に、綿栓が巻かれたブローチを挿入して、ゆっくりと根管内を乾燥させた。

「ふうん、んんっ！　んぁ、うんうん」

「もう少しだよー。もう終わりだよー。もうすぐ済むから、がまんしようねー」

「瑠美ちゃん、ビタペックス」

「はい、先生」

いよいよ今日の美月の治療は最終段階にはいる。
瑠美はビタペックスシリンジ付与のストッパーをさきほどのＨ－ファイルと同じように設定して、由里香先生に渡した。
由里香先生は美月の右下７番の患歯の根管内に水酸化カルシウム・ヨードホルム製剤であるビタペックスの入っているシリンジを挿入し、ゆっくりと根管内にビタペックスを送り込んで根管に充填した。
「ううぅーん、ふぅん、んんっ、んぁ～。あんあん」
〝んんっ、く、くるしぃ‥‥‥〟
「はいはい、だいじょうぶ」
美月は治療されている患歯に異物が入ってくる感じがした。さらに身体をベルトで拘束され、口に開口器を填められて長時間治療されているため、治療による疲れも溜まり、苦しさを感じ始めていた。
「がんばってー、ホントあともう少しだからねー」
瑠美と愛里が美月を励ます。
シリンジタイプのビタペックスがすべて注入された。
由里香先生は、次に滅菌小綿球をピンセットでつまんで根管内に挿入して軽く圧接し、水分を吸収する。それから美月の患歯の根管に新しい小綿球を置き、さらに加熱したストッパーの先でシャーレからテンポラリーストッピングをくっつけ拾い上げると、バーナーで数秒間加熱し、美月の患歯の根管にストッピングを填入して圧接した。
「美月ちゃん、もう最後だよー。だからもう少しがんばろうねー」
最後に由里香先生は、瑠美がスパチュラを使い、練板の上で練和したグラスアイオノマーセメントを受け取ると、ストッパーで美月の右下７番の患歯を仮封した。
「美月ちゃん､右下７番の虫歯はだいぶ深かったわ｡きょうの治療は長くなっちゃったし、美月ちゃんもだいぶ疲れてるようね。右下６番はあした朝一番に治療するわね」
〝ほっ。　助かったぁ！　‥‥‥でも、あした治療なのょね‥‥‥〟
今日の治療が右下７番の１２歳臼歯１本で終わりと聞き、美月はホッとしていたが、明日も朝一番から治療と由里香先生にいわれ、気持ちが沈んでいく。
「はい、今日はこれで終わり！　お口ゆすいでいいわよ」
開口器が美月の口から外される。拘束ベルトも身体から外される。
ウィーーーン。
歯科治療ユニットが起こされる。銀色のコップを手にして患歯に染みないようにぬるくした水を口に含み、クチュクチュと口をゆすぐ。頬と唇がまだ麻酔でしびれていて含んだ水が口から漏れそうになり、スッピトンにうまく水が吐き出せない。美月は、
〝痛かった‥‥‥、痛かったよぉ～。くすん。怖かった‥‥‥、逃げ出したかったよぉ～、くすん。ベルトで縛られて‥‥‥、お口閉じられない器械填められて‥‥‥、恥ずかしい格好で長い時間虫歯削られて‥‥‥、中学生なのに泣いちゃって、恥ずかしぃ‥‥‥〟

とまた目に涙が滲んでくる。
「美月ちゃん、よくがんばったねー」
「えらいよ、美月ちゃん」
「エプロン、外そうねー」
　瑠美と愛里が美月をほめながら、美月の胸元から水色の歯科エプロンを外してくれる。
「美月ちゃん、今日はこれで終わるけど、明日また治療だから、学校休んじゃダメよ。午前１０時に診療バスに来てね。美月ちゃんはまだたくさん虫歯があるんだから。治療、怠けたりしちゃダメよ。学校には、あしたも美月ちゃんが歯の治療をしなければならないことを話しておくから」
　由里香先生に釘を刺される。まだ治療が続くということを聞いて、美月はとっても憂鬱な気持ちになった。
〝こんな痛い治療がまだ続くなんて‥‥‥〟
「それから、今日治療したところはだいぶ深くまで虫歯が進行していて、当分神経の治療を続けないといけないの。だから明日の治療が終わったあとは、村営歯科診療所の山西先生に引き継ぐわね。治療内容を詳しくメモにとって、診断書を書いて山西先生に渡すからね」
　由里香先生は、美月に説明する。
〝はぁ〜。また去年といっしょだ‥‥‥。ママに迷惑かけちゃう‥‥‥。どうしよぅ‥‥‥〟
　歯科治療ユニットから降り、由里香先生と瑠美にお礼をいう。
「ありがとうございました」
〝こんなに痛い思いしたのに‥‥‥、お礼いわなくちゃいけないなんて‥‥‥〟
「いいのよ。お大事にね。あした待ってるから」
「あっ、今日治療した方の右側ではあまり堅いものは噛まないでね」
「美月ちゃん、お大事に」
　由里香先生と瑠美が笑顔でいう。
「はぃ‥‥‥」
　美月は明日の治療のことを考え、憂鬱な気持ちで歯科治療ユニットから『ハルちゃん号』のドアに向かって歩いていった。そのとき、愛里はすでに美月の妹の黎の歯科治療ユニットで、黎の治療の準備をしていた。
　美月は抑制治療という過酷な治療を受けたためまったく元気がなく、黎が隣の歯科治療ユニットに座っていることさえ、気づかなかった。

　美月は『ハルちゃん号』を出て、分校の校舎に入ろうとする。校舎正面の時計を見上げると、時計の針は午後３時３０分を過ぎていた。結局、美月の治療は４０分くらい行われていたことになる。

″わたし‥‥‥、４０分も治療されてたんだ‥‥‥″
　美月は目に涙を溜めて頬を赤く泣き腫らし、まだジンジンする右頬を痛そうにハンドタオルで押さえながら思っていた。

　その日の治療がすべて終了し、由里香先生と瑠美、愛里は治療器具、歯科治療ユニットを清掃、点検し、食べ物や最近見た映画、気に入っている音楽、ファッションなどいろいろな話をしながら後片付けをしていた。そのうち三人の会話は、いつしかこの日治療をした女子小学生や女子中学生の話題に移っていった。美月の治療について瑠美と愛里が由里香先生に聞く。
「せんせい、美月ちゃんの右下７番、思ったより虫歯が進行していましたね」
「そうね。削ってみてわかったんだけど、だいぶ深かったわね。淡黄色に着色していたことから見て、急性齲蝕じゃないかと思ってたんだけど、やっぱりそうだったわ」
「結局、抜髄になっちゃいましたね」
「そうね。美月ちゃんはまだ中学３年生だし、できれば根部歯髄の残せるアペキソゲーネシスで処置をしたかったんだけど、あそこまで虫歯がひどくなってるとアペシフィケーションにしなくちゃならなかったのよ。歯髄炎が歯冠部歯髄を越えちゃってて根部歯髄まで及んでいたからね。残念だったわ」
「美月ちゃんの明日治療予定の右下６番はどうでしょうか？」
「そうねー。インレーをとらないとはっきりいえないけれど、この歯もアペシフィケーションしなきゃいけないようね」
「そうですか」
　歯科診療バスの外は、６月の日差しがまだ明るい。明日の治療の準備を整えると、三人はこの日の宿に向かっていった。

　次の日。午前１０時。
　前日に続いて白早花中学校尾花平分校の校舎に、歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』が横付けされている。『ハルちゃん号』の治療スペースでは、この日の最初の患者として美月が歯科治療ユニットに横たわり、再び虫歯治療を受けている。
　キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。
「うぅっ、あがが」
「痛くない〜痛くない！」
「はい、がんばってもうすぐ終わるよ〜」
「はぁん、あはん。ひはい！！　ひはい！！　ほほひゅひゅひへー！！」
　美月の痛くてつらい虫歯治療は、まだまだ続く。

アイドルの虫歯

「じゃあ、最初はこの位置に立ってゆっくりと道を歩いていくところから始めよう。真実ちゃんよろしく」
「はい。よろしくお願いします」
　カメラマンが真実に指示をして、アシスタントが準備を進めている撮影機材のところへ戻っていく。カメラマンの後ろ姿を見ながら、真実は、
〝いつもみたいに集中しなきゃ〟
と意識をカメラに集中させ、プロの顔になろうとするのだが‥‥‥。
　ズキン！　ズキン、ズキン。
〝痛っ！〟
　顔をしかめそうになる。拍動に合わせるように右頬を痛みが打つ。
〝どうして‥‥‥。痛み止め飲んできたのに〟
　真実は、数週間ほど前から右下の奥歯がチクチクと痛み出し、食後などに持続性の鈍痛を覚えていた。最初は鎮痛剤を服用すると痛みが嘘のように消えていた。だが最近は鈍痛が著しくなり、一昨日くらいからは鎮痛剤も効きにくくなっていた。昨夜は強い拍動性の疼痛を覚え、鎮痛剤もいつもより多めに服用した。今朝、朝食のあとも撮影に備えて飲んだのだが、全く効かなくなっていた。
　真実は虫歯がないわけではない。乳歯の頃も乳臼歯８本を治療していたし、永久歯に生え替わってからも、上下左右の６歳臼歯の虫歯を治療してある。けれど、いままでは学校の歯科検診で虫歯が見つかると、すぐに歯医者に行って真面目に治療を受けていたので、虫歯の治療痕はあっても、痛みが出るほどの重篤な虫歯になったことはなかった。
　タレント事務所に所属して３年、昨年から人気がではじめていたが、最近では学業とタレント活動の忙しさにかまけて、歯磨きをなまけがちになっていた。高校の春の歯科検診では虫歯が見つかっていたが、仕事が忙しくなってきたこともあり、歯科受診をしていなかった。真実はこのごろタレントの命である歯の手入れを怠っていたのだ。
　もう一度鎮痛剤を取り出し、そっと口に含む。唾液で無理矢理飲み込んだ。撮影は昼食を挟んで午後３時まで続く予定である。
〝お願い！　効いて！〟

　尾花平高原は、白早花村尾花平からさらに３０分ほど山を上がったところにあるひろびろとした高原で、春、夏は高原散策、秋は紅葉、冬はスキー場となる白早花村の観光地だ。宿泊施設は、尾花平ヒュッテというホテルのほかに民宿が数軒ある。その尾花平ヒュッテにアイドルの谷村真実はじめスタッフ一同が昨日から泊まっている。秋に発売予定の谷村真実の写真集に使う写真を撮影するためだ。

谷村真実は１６歳。タレントが多く通うことで有名な優愛女学館高校の１年生であり、いま売り出し中、人気急上昇中のアイドルである。
昨年ある進学ゼミのＣＭに出演した。セーラー服の少女が河川敷の土手を歩くＣＭがオンエアーされたとたん、『赤いリボンのセーラー服がよく似合う愛くるしく可愛らしいあの子は誰？』と評判となって、口コミで名前がひろまり、一気に売れっ子となった。以来ドラマ出演などのオファーが増え、今年の秋には主演映画の撮影がはじまることも決まっている。

尾花平高原のひろい草原の１本道で、つばひろの麦わら帽子をかぶり白いワンピースを着た少女がいる。その周りにはレフ板を持った人やサングラスと帽子のカメラマンなど大勢のスタッフがいる。少女は、カメラマンの指示に従って歩いたり、立ち止まったりしてポーズをとっているが‥‥‥。
「はい、笑顔で、笑顔で‥‥‥。どうしたの？　もっと明るい顔して！　今日は変だよ、真実ちゃん！」
「はい！」
「うっ！　痛っ！！」
真実は顔をしかめて、思わず右頬を押さえた。あわてて女性マネージャーの下垣ありさが駆け寄る。

マネージャーのありさがカメラマンの高城の方へやって来る。
「困ったわ〜。真実ちゃん、歯が痛いのよ。痛み止め飲んでも効かないみたいで。どうも今回の撮影に来る前から痛み出してたみたいなのよ‥‥‥」
「そうか‥‥‥。う〜ん、あさってには撮影を終えてしまわないと。次のスケジュールがつまってるんだろ」
「そうなのよ。この村に歯医者さんないかしら。困ったわね」
「おーい！　磯山、ちょっと来い」
アシスタントの磯山が高城のところへ駆け寄ってくる。
「なんすか」
「おまえ、ヒュッテに戻ってこの辺に歯医者があるか聞いてこい」
「誰か、歯が痛いんすか」
「ばか！　見て分からないのか。真実ちゃんだよ！　早く行ってこい！」
「はい！」
磯山が駆け出していった。
「歯医者さん、見つかるといいんだけど‥‥‥」

尾花平高原は携帯電話の圏外である。磯山は尾花平ヒュッテに戻ってフロントのスタッ

フに聞くが、尾花平高原にも麓の尾花平地区にも歯医者はないという。それどころか、白早花村には村の中心の白早花地区に村営歯科診療所がひとつあるのみだという。しかも診察日は火曜日、水曜日、金曜日の週３日で、診察時間は午前１０時から午後０時まで、午後１時から午後４時までという短いものだった。その上水曜日だと、午前中しか診療がないという。まずいことに今日は診察のない木曜日だ。

それでも一縷の望みを託し、ヒュッテの電話を借りて村営歯科診療所に電話をする。

トゥルルル、トゥルルル。

カチャ。

「あっ、村営歯科診療所ですか。‥‥‥あの、東京から仕事でこちらに来ているものなんですけど、急に歯が痛み出したものがいまして、診察してもらえませんか？‥‥‥えっ、‥‥‥今日は先生がいないから診察できない‥‥‥、そこをなんとか‥‥‥、ひどく痛み出してるもんで。えっ、あっ、はいかわってください。

（お電話替わりました。歯科衛生士の小松由夏といいます。そんなにお痛みですか？）

ええ、ほんとにひどく痛み出してるもんで‥‥‥。

（そうですか。こちらでは痛み止めのお薬を出すくらいの応急処置しかできませんが、それでもよろしいでしょうか？）

ええ、それで結構です。是非お願いします。

（わかりました。どちらの地区ですか？）

えっ‥‥‥、どちらの地区っていわれても‥‥‥。

（すみません。いいかえます。いまどこにいらっしゃいます？）

あっ、いまですか。いま尾花平ヒュッテにいます。

（えっ、尾花平高原にいらっしゃるんですか！）

はい‥‥‥。

（そうですか‥‥‥。それはよかった！　今日は歯科巡回診療バスが麓の尾花平地区に巡

回診療にいってるんですよ。今日の診療は、午前１０時から午後０時までなんですが‥‥‥、えーっと、いま午前１１時３５分過ぎですよね‥‥‥。こちらからバスに連絡を取っておきますから、すぐに行ってください）

　えっ、あっ、ちょっと待ってください。なんですか、その巡回診療バスっていうのは‥‥‥。

（山間部などの僻地を、バスで巡回して歯科診療を行うものなんです。バスの中に歯科治療器械などの必要な治療器具や歯科薬品が積んであって、バスの中で治療行うんですよ。『ハルちゃん号』っていいます。今日は尾花平分校の校庭に停車して診療しています。時間ないですから、急いでください！　少し診察時間に遅れてもいいように、歯科巡回診療バスの先生には必ず連絡をしておきますから）

　は、はい！　ありがとうございます。助かります！

（で、患者さんのお名前は？）

　はい！　谷村真実といいます！

（谷村真実さんですね？　わかりました。おいくつの方ですか？）

　ええっと、確か高校１年ですから‥‥‥、あれ？　真実ちゃん誕生日いつだったけ？　まぁいいや。確か１６歳のはずです。

（１６歳ですね。では至急に歯科巡回診療バスに連絡を取りますので、すぐに行ってください）

　はい、すぐ行きます。ありがとうございました」

「下垣さぁーん、見つかりましたぁー。　歯医者さん、見つかりましたぁ！」
　アシスタントの磯山が走ってくる。
「ほんと！　よかった！」
　マネージャーのありさがうれしそうにいう。
「で、どこにあるの？」
「ハァ、ハァ。ふ、麓の尾花平地区に来ているそうです」
「えっ、来る途中、歯医者さんあったかしら」

「い、いえ。そうじゃなくて‥‥‥」
「どういうことなんだ？」
　カメラマンの高城が聞く。
「歯科巡回診療バスっていうのがあって、いま巡回診療でふもとの尾花平地区に来ているそうです。『ハルちゃん号』っていうんだそうです。午後０時までなんで、急いで行かなきゃなんないんですけど、村営歯科診療所から少し待ってもらうよう連絡をしてくれるそうです」
「そうか！　でかした！」
「よかったぁ！　早速、真実ちゃんを連れて行かなきゃ！　真実ちゃん、真実ちゃぁーん！」
　マネージャーが急いでロケバスで休んでいる真実の元へ走っていく。
「おーい！　磯山、車だ！　車用意しろ！」

　尾花平分校の横に歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』が横づけされ、昨日に引き続き治療を行っている。きのうは分校の児童・生徒の治療で終わってしまったが、きょうは最初に早急にきのうの治療の続きをしなければならない児童・生徒の歯科治療を行い、そのあとは普段の巡回診療と同じく尾花平地区の住民の治療が行われている。
　いつもの歯科巡回診療だと、『ハルちゃん号』は尾花平地区の公民館に横づけされるのだが、尾花平分校の歯科検診の組まれている６月の第１週と夏休みの最中の８月の第２週だけは分校に横づけされるのだ。
　そんな『ハルちゃん号』の中では‥‥‥。
「はい、お疲れさま。終わりましたよ」
　藤澤由里香先生が患者に治療の終わりを告げる。
「先生、ありがとうございました」
「では、次の治療は２週間後の巡回診療の時になりますので」
「はい。よろしくお願いします」
「エプロン外しますね」
　最後の患者の治療が済み、バスを降りて帰って行く。時間は午前１１時４０分を過ぎたところである。診察時間は午後０時までだが、もう待っている患者はいない。今回の歯科巡回診療はどうやら終わりのようだ。
「終わりましたね、先生」
　歯科衛生士の蛯原瑠美がのびをしながらいった。
「無事終わってよかったですね、先生」
　同じく歯科衛生士の小林愛里もいう。
「そうね。あとは、帰りに村営歯科診療所に寄って診療所の先生にお願いしなくちゃなら

ない症例を引き継いで、そのほか２週間後の巡回診療で治療すればいい症例は、帰って歯科医師会にカルテを持って行って、次の巡回診療の当番にあたっている先生に引き継ぐだけね」
　そのとき、『ハルちゃん号』のステップに尾花平分校の女子事務員の吉木美歩が顔を出し、
「先生、村営歯科診療所からお電話がかかっています」
「はい。なにかしら？」
　由里香先生は瑠美と愛里と顔を見合わせる。ふたりとも心当たりはない。この尾花平地区も尾花平高原と同じで、携帯電話の圏外だ。由里香先生は首をかしげながらも女子事務員のあとをついて『ハルちゃん号』を降り、分校の玄関をとおり職員室に入っていった。

「こちらの電話です。２番を押してください」
　女子事務員が受話器を指す。
　由里香先生は受話器を取り上げ、電話に出た。
「はい、お電話替わりました。藤澤です。

（あっ、巡回診療に来ていただいている藤澤由里香先生ですね。はじめまして。村営歯科診療所で歯科衛生士をやってます小松由夏といいます）

　はじめまして。で、どんなご用件かしら？

（はい、先生。早速なんですが、実はつい先ほど村営歯科診療所に、東京からこちらにおみえの谷村真実さんという１６歳の高校１年生の女性の方が急に歯が痛み出したので診てほしいといって、電話がかかってきました。それで、あいにく今日は村営歯科診療所が診察日でないもので歯科医師がおりません、とお答えしましたら、痛み止めの薬をもらうだけでもいいから、とおっしゃるので、どちらの地区にいらっしゃるかをお尋ねしますと、尾花平高原にいらっしゃるということでした。そこで尾花平高原から近いということで、麓の尾花平地区に来ている歯科巡回診療バスをご紹介しました。勝手なお願いなんですが、先生診ていただけないでしょうか？）

　そうなの・・・・・・。急患なのね。わかりました。診察します。

（ありがとうございます！　それから、なにぶん尾花平高原から尾花平地区までは車で３０分くらいかかるもので、そちらに到着する頃は診察時間を少し過ぎてるんじゃないかと・・・・・・・）

いいわよ。別に‥‥‥。待ってますから。それでどう？　だいぶ痛そうだった？

（かさねがさね、すみません。ありがとうございます、先生。それから電話をかけてきたのは別の人だったので、ご本人とはお話ししてませんが‥‥‥、だいぶせっぱ詰まってらっしゃったようですので、かなり痛み出してるんじゃないかと‥‥‥。じゃあ、先生、よろしくお願いします）

わかりました。必ず診ますから、任せておいてね」
カチャッ。
受話器を置いた。
「ありがとう」
女子事務員にお礼をいって、『ハルちゃん号』に戻る。
「なんでした？」
瑠美と愛里が由里香先生に聞く。
「急患よ。治療の準備お願いね。あと３０分くらいでお見えになると思うわ。それから痛み出してるっていっていたから、抜髄が必要かもしれないので、歯内療法の術式のための器具もお願いね」
「わかりました、先生。すぐ準備します」
「先生、患者さんのお名前は？」
瑠美と愛里が口々にいった。
「谷村真実さん。１６歳の高校１年生よ」
歯科衛生士ふたりは由里香先生からその名前を聞いたとたん、顔を見合わせた。
「先生、それってもしかして、優愛女学館高校の谷村真実さんじゃないですか？」
「だれなの？」
「えーっ。先生知らないんですかぁー。いま人気上昇中のアイドルですよ！」
ふたりが声をそろえていった。

ようやく尾花平高原から麓の尾花平地区についた。時間は午後０時を少し過ぎている。尾花平高原を出たのが午前１１時４５分頃だったから、かなりのスピードで走ってきたことになる。
車は、さらに尾花平分校に向かって走った。

車がようやく尾花平分校に横づけしている歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』のところについた。時計は午後０時０５分を指している。
カチャ。

車のドアが開き、真実がマネージャーの下垣ありさに抱きかかえられるようにして出てきた。
マネージャーのありさは心配そうに、
「だいじょうぶ？　ひとりで入れる？」
と真実に聞いたが、真実は「だいじょうぶです」と小さく頷いた。
「ほんとに‥‥‥？　はい、じゃあこれ」
ありさは、真実にレースの飾りのついた可愛いハンカチを渡した。
「ぁりがとう‥‥‥」
ハンカチを受け取ると、真実は元気のない足取りで『ハルちゃん号』の方に向かっていった。その後ろ姿をマネージャーのありさが心配そうに見守っていた。校舎と『ハルちゃん号』のあいだに敷いてあったシートは、分校の子どもたちの治療が終わった時点で除かれている。
真実が『ハルちゃん号』に近づいていく。すると淡いピンクのナース服とパステルピンクと白のストライプのエプロンの上からピンクのカーディガンを身に纏って、白いナースキャップをかぶった歯科衛生士と思われる女性がステップを降りてきた。顔には淡いピンクのディスポーザブルのプリーツマスクをつけ、両手には黄色のラテラックスグローブをはめており、すぐにでも真実の治療に取りかかれるように準備万端である。
歯科衛生士はいたわるように真実の肩に手を回すと、『ハルちゃん号』の中に案内していった。

真実が『ハルちゃん号』の中に入る。すでに撮影用の衣装からは着替えていて、クリーム色のブラウスと上品な色合いの花柄を散らした淡い水色のフレアーのミニスカート、淡いミントグリーンの薄手のニットのカーデガンを羽織り、白い色のハーフブーツを履いている。
『ハルちゃん号』には、２台の歯科治療ユニットがあるが、診察時間を１５分ほど過ぎているので、２台とも患者の姿はなかった。
「谷村真実さんですね。村営歯科診療所から連絡がありましたので、お待ちしていました」
歯科衛生士の蛯原瑠美がすました声で名前を確認する。もうひとりの歯科衛生士の小林愛里は淡々と真実の治療の準備をしている。ふたりとも黄色のラテラックスグローブと淡いピンクのディスポーザブルのプリーツマスクをつけていて、他の人の治療の時と変わらないように見える。だが内心は、ふたりともはじめて間近に見るアイドルに興味津々である。
「はぃ」
真実は右頬をハンカチで押さえて元気がない。
「こちらにかけていただけますか。ブーツは脱いで、こちらのスリッパに履き替えてください。あっ、カーディガンはハンガーに掛けておきましょうね」

瑠美は真実が羽織っていたカーディガンを脱がすと、愛里に渡した。愛里はカーディガンをハンガーに掛けた。真実はのろのろとブーツを脱ぐと隅に置き、瑠美が用意してくれたスリッパを履き、歯科治療ユニットに腰を下ろす。

真実が歯科治療ユニットに腰掛けるのを見届けるのと同時に、瑠美は濡れティッシュのボトルとティッシュの箱を差し出し、

「谷村さん、申し訳ありませんが、口紅をとっていただけますか？」

といった。真実はリップクリームに近い、淡いピンクの口紅をつけていた。

真実は濡れティッシュを１枚とると、唇から口紅をぬぐい、その後ティッシュ２枚で唇を拭いた。

「はい、ありがとうございます」

瑠美は、真実が口紅をぬぐったティッシュを受け取った。続いて瑠美は、

「前、失礼しまぁーす。エプロンつけますね～」

といいながら、水色の歯科エプロンを真実につけ、藤沢由里香先生の方を見ていった。

「先生、準備できました」

由里香先生が歯科医師用のいすに座った。黄色のラテラックスグローブと薄いブルーのディスポーザブルのプリーツマスクをつけて、すっかり真実の治療を行うための態勢に入っている。

「谷村真実さんですね。こんにちわ」

「あっ、こ、こんにちわ」

「わたしは、歯科医師の藤澤由里香といいます。‥‥‥さてと、ひどく歯が痛むそうですね」

「は、はぃ」

「どんな風に痛みますか？」

「は、はぃ。心臓の鼓動にあわせるように、ズキン、ズキンと‥‥‥」

「ふん。ではいつから痛みますか？」

「夕べからです」

「強い痛みが出たのは、昨夜からですね？」

「はい」

「じゃあ、歯自体に痛みというか、違和感が出たのはいつくらいからですか？」

「数週間ほど前から、食後などにズーンとした感じの鈍痛がしていました。最初のころは痛み止めを服むと嘘のように痛みが消えていたんですが、一昨日くらいから痛み止めも効かなくなって‥‥‥」

「そうですか‥‥‥。お薬は何を飲まれてました？」

「バファリンです」

由里香先生は、真実から聞き取った内容をカルテに書き取っている。由里香先生はカルテをつけ終わり真実の方に向き直ると、

「じゃあ、取り敢えず診てみましょうか」
といった。
「は、はぃ。お願いします」
「大きくお口開けてくださぁーい。あ〜ん」
　由里香先生は、デンタルミラーと探針を持って真実に口を開けるように促す。瑠美がライトを点け、真実の口に焦点が当たるように操作した。愛里も診療補助につく。
　真実は、痛みが出る虫歯の治療ははじめて経験のため、どんな治療をされるのか不安な気持ちのまま怖々口を開ける。
「あー、この歯ですね」
といいながら、由里香先生は真実の虫歯を探針でそっとつついた。とたん痛みが走る。
「うっ！　ふうん」
「あっ、ごめんなさい。ちょっと痛かったですね」
　真実の痛む虫歯は、右下の７番、１２歳臼歯だった。見た目は小窩裂溝全体が薄い褐色に変色して小さな齲窩があるくらいで、そんなにひどい虫歯には見えない。
　だが由里香先生は、若年者の小窩裂溝齲蝕が深在性の急性齲蝕になりやすく、その場合の着色は薄い茶色や褐色であることが多いことから、
〝うーん。中でかなり拡がってそうね。これは痛みからいっても、閉鎖性歯髄炎、それも急性一部性化膿性歯髄炎か、急性全部性化膿性歯髄炎だわ。レントゲンを撮って確認しなきゃ〟
と思っていた。
「瑠美ちゃん、カルテお願い」
「はい、先生」
「右上からいきます。７番斜線、６番〇、５番から左３番まで斜線。４番Ｃ１、５番斜線、６番〇、７番斜線。左下いって、７番ＣＯ、６番〇、５番から右５番まで斜線。６番〇、７番Ｃ３。以上です」
「真実さん、痛む歯の虫歯がどのくらい進行しているかレントゲン撮ってみますね」
「愛里ちゃん、レントゲンの準備して」
「はい、先生」
　愛里は棚の引き出しから、小さな口腔内用レントゲン写真のフィルムを取り出し、由里香先生に渡した。由里香先生はフィルムを持ち、
「もう一度、お口開けてくださぁーい」
　真実が口を開けると、右下７番にフィルムをあてがって固定した。愛里が歯科治療ユニットについているアームについた小さなカメラのようなレントゲン装置を真実の右頬にあてがう。
「！？」
〝なにこれ！〟

瑠美と愛里が歯科エプロンをつけられている真実の全身にさらにエプロンをつける。なんとなくずっしりとしていて、重量がある。由里香先生、瑠美と愛里も同じようにエプロンをつけた。
「念のために、被爆を防ぐエプロンなんです。心配はないんですけどね。重いのは中に鉛が入ってるためなんですよ」
「じっとしていて下さいね」
そういいながら、由里香先生がレントゲン装置のスイッチを入れた。レントゲン装置が動作し、真実の右下６番、７番のＸ線写真を撮る。
由里香先生は真実の口腔内からフィルムを取り出すと、
「愛里ちゃん、現像お願い」
と愛里にフィルムを渡す。
「わかりました」
瑠美が真実から鉛入りのエプロンを外してくれた。由里香先生、瑠美と愛里もエプロンを外している。
まもなくフィルムの現像を終えた愛里が、由里香先生に真実の右下奥歯の写ったＸ線写真を渡す。由里香先生はバスの蛍光灯にかざして、Ｘ線写真を見た。
「谷村さん・・・・・・」
「真実でいいです。あっ、みなさんも」
真実は、小さな声で由里香先生にいった。
「！？　あっ、はい。じゃあ、真実ちゃんって呼びますね」
「真実ちゃん、ここ見える？　うーん、やっぱり虫歯が神経までいってるわね。ほら、ここ神経を表す黒い線と上からの虫歯の黒い影がつながってるでしょう？　見えますよね」
コクンと真実が頷く。
「これは、残念だけど神経を取らないとダメですね」
真実はいままで神経を取るような重症の虫歯に罹ったことがなく、神経を取るということがいまいちピンと来ない。それよりもこの痛みを何とかしてもらえるのなら、神経でも何でもとってほしいくらいだった。
「わかりました。お願いします」
ハンカチで頬を押さえながらいう。
「じゃあ、まず麻酔していきますね。瑠美ちゃん、シンマ」
「はい、先生」
瑠美はラテラックスグローブをつけた手で、麻酔カートリッジが装着された注射器をトレイから取り上げると、キビキビした動作で、同じくラテラックスグローブをつけた由里香先生の手に渡す。さっきまでアイドルが診察に来たと興味津々だった瑠美も愛里も、いまは真美の治療を前に、プリーツマスクをつけた顔をプロの歯科衛生士の顔に戻し、真剣な目で仕事に取り組んでいる。

「はい、お口開けてくださぁ〜い。あ〜ん」
　由里香先生がデンタルミラーと麻酔注射を持って真実に開口を促す。愛里が無影灯のハロゲンライトを操作し、真実の口腔内に焦点があたるようにする。
　真実はいままでの虫歯治療で麻酔をされたことがない。麻酔をしなければならないような重症の齲蝕になったことがなかったからだ。それにキラリと光る注射針を目のあたりにして歯茎に打つ注射が怖くなってしまい、大きな瞳を潤ませ気味に見開いて由里香先生を見つめ、
「せ、せんせぃ・・・・・・」
といった。
「なに？　真実ちゃん」
「ぁ、ぁのぅ・・・・・・ま、ますいって痛ぃんですか・・・・・・」
「ん？　真実ちゃん、麻酔したことないの？」
「はぃ」
　小さな声で答える。
「そうねぇ、最初チクッと痛いかな・・・・・・。でもそれだけだよ」
　由里香先生が目で笑顔をつくって、真実にやさしくいう。
「そうだよ。ちょっとチクッとするだけだよ。全然大丈夫！　麻酔したら、あとの治療がずっと楽だよ。ねっ！　心配しないで。先生を信じて！」
「そうだよ、真実ちゃん。麻酔なんて全然平気だよ！」
　瑠美と愛里もかわるがわる真実を励ます。
〝そ、そぅょね。きっと、だぃじょぅ・・・・・・ぶょね？〟
　真実は由里香先生、瑠美や愛里のことばを信じて、手に持ったハンカチをギュッと握りしめて、目を閉じそっと口を開けた。
「それじゃ、愛里ちゃん、シンマお願い」
「はい、先生」
　愛里は、麻酔カートリッジの装着された歯科用注射器を由里香先生に渡した。
　真実の唇の右側を由里香先生の持つデンタルミラーが拡げ、口腔内に麻酔カートリッジをつけた注射器が入っていく。注射針が真実の右下の歯茎に刺さる。
　ズブッ。
　そんな感じがした。チクッどころではない。
〝んっ！？　あ痛っ！〟
　真実が眉間に皺を作って顔をしかめる。
「はい、少し我慢してね〜」
　由里香先生が麻酔注射の薬液を真実の歯茎にゆっくり注入しながら励ます。歯茎の中に何かが押し入ってくるような圧迫感がある。真実は初めて経験する歯科麻酔注射の痛みに目が潤んだが、握り拳を作ってかなり我慢していた。

「はい、全部入りましたよ」
　真実はほっとした。だが麻酔はこれで終わりではなかった。
「もう１本打ちますね～」
〝！？　えっ？〟
　由里香先生はにこやかにいうが、真実はあきらかに動揺している。
「大丈夫だよ。さっき我慢できたじゃない」
　容赦なしに、２本目の麻酔注射が真実の歯茎に打たれる。
「うぅっ。ふぅぅぅぅーん」
　やっぱり歯茎に刺さる麻酔針と注入される麻酔薬の圧迫感が痛く、今度は思わず声が漏れる。
「はい、がんばってー。もう少し我慢してー」

「少し休憩しますね」
　無影灯が消され、麻酔が効くまで５分ほどの休憩が入った。
　真実はどうにか麻酔の痛みに耐えた。徐々に右頬が痺れてくる。バスの天井を見ながら、これからの治療を不安に思っていた。
「もういいかな～。お口開けて～、アーン」
　カルテをつけていた由里香先生がデンタルミラーを逆さまに持ちながら、真実の方へ向き直る。愛里が無影灯を点けた。
　真実が怖々口を開けると、由里香先生のデンタルミラーが入ってくる。愛里が操作して、無影灯の強烈なハロゲンライトが真実の口腔を照らすよう、焦点をあわせた。
　由里香先生が真実の右下７番の虫歯を、コンコンとデンタルミラーの柄で叩く。
「痛い？　感じる？」
と聞く由里香先生に、真実はプルプルと首を横に振って答える。
「麻酔、効いたようね。それじゃ、治療していくわね」
　瑠美が真実の口腔にバキュームを入れる。
　コォー、コォォォーー。
　由里香先生は、ブランケットテーブルの上からスプーンエキスカーベーダーを取り上げると、デンタルミラーで真実の右の唇を捲りあげ、スプーンエキスカーベーダーで真実の患歯を易削し始めた。
　象牙質の支えのない遊離エナメル質は、すぐに砕ける。削られ薄茶色に変色した切片となったエナメル質は、瑠美の操作するバキュームに吸引される。小さく見えた虫歯の穴は、スプーンエキスカーベーダーの易削によりすぐに大きくなり、真実の患歯の齲窩から軟化の著しい多量の感染象牙質が現れた。軟化象牙質は淡黄色になっており、急性齲蝕であることがわかる。軟化象牙質をスプーンエキスカーベーダーでさらに易削していくと、容易に露髄し膿汁様出血がみられた。歯髄は虫歯菌に侵されて炎症を起こし、赤黒く変色して

いる。
″露髄しちゃった‥‥‥。やっぱり閉鎖性急性全部性化膿性歯髄炎だわ。今日は痛みを止めるだけにしようと思ってたんだけど‥‥‥。露髄しちゃったから、抜髄しないとダメね‥‥‥″
″ただ露髄したから、炎症を起こしている歯髄が外部と交通して内圧が下がるし、少しは痛みがひくわね″
　由里香先生はスプーンエキスカーベーダーを使う手を少し止め、患歯の状態を確認してそう思った。それからピンセットでブランケットテーブルの上の小綿球をつまむと、露髄による膿汁様出血をそっと拭き取り、小綿球を汚物入れに捨てる。
「ふ、ふぅん」
　手用器具による触診、易削による不快感で、真実が声を上げ、身を捩った。
「はぁーい、動かないでくださぁーい」
　バキュームの手を止めずに、瑠美が真実に注意する。

　スプーンエキスカーベーダーで、あらかたの軟化象牙質を削ると、次に由里香先生は、患歯が唾液で濡れるのを防ぐためと治療のスペースをつくるために、真実の右の頬側と歯茎のあいだ、さらに歯茎と舌側のあいだにピンセットでつまんだロールワッテを入れた。
　それから由里香先生は、右手でヘッドレストのところからエアータービンを引き出し、ブランケットテーブルの上のバーチャージャーからタングステンカーバイドバーを選ぶと、タービンにセットされているコントラハンドピースに装着した。
「はい、削っていきますね。大きくお口開けてくださぁーい」
　デンタルミラーを手にし、タービンを構えて、由里香先生はいった。
「痛くないからねぇ〜大きくアーンしようね〜」
　瑠美がバキュームとスリーウェイシリンジを手にしていう。
″麻酔注射の痛いのを我慢したんだもん‥‥‥。きっと、痛くないわょ‥‥‥″
　真実は気持ちが萎えそうになるのを、必死で奮い立たせながら、ハンカチを握りしめ、目を閉じて怖々と口を開けた。
　真実の口腔に、まずデンタルミラーが入り、右の唇を引っ張り上げるように捲る。それからバキュームが舌を抑えるように右の患歯のところに入れられる。次にタービンが真実の患歯である齲蝕した右下７番にあてられる。愛里が無影灯を操作する。ハロゲンライトの光が真実の患歯を照らす。最後に瑠美のスリーウェイシリンジが真実の口腔内に入れられた。真実の口腔内は治療器具でいっぱいになった。
「痛かったら左手挙げてくださ〜い」
　お決まりのことばを、瑠美が真実にいったと同時に、由里香先生のタービンが回転を始める。
　キュイーーーン。キュイ、キュイ、キュィーーン。キューン、キィーン。

コォォォー、コォー。ジュ、ジュジュッ。

真実の虫歯の切削が始まった。齲蝕に侵された患歯は、すでに露髄しているため、慎重に削っていく。患歯の内部はすでに手用器具によって大量の軟化象牙質を取り去ったことにより、大きな齲窩となっていて、赤黒く変色した歯髄が見えている。

この真実の右下７番を削り窩洞を形成していく。

キュ、キュ、キュィーン。キュイ、キュイ、キュイィーン。

″この分だと、歯茎の近くまで歯質を削らないとダメね″

タービンで真実の虫歯を削る手を止めずに、由里香先生は思った。

バキュームを操作していた瑠美は、同じく真実の治療のサポートをしている愛里と、ふと目があった。

″アイドルでも、こんなひどい虫歯にしちゃうんだ″

ふたりの目はそう語っていた。

キュイーン、キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。

「ふんふん、ふぅん、あんあん」

「はぁーい、がんばってえー」

「すぐ済みますからねー。もう少しがまんしてくださぁーい」

「はぁん、はぁはぁ」

キュ、キュ、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイキュイーーン。

コォー、コォォォーー。ジュッ、ジュ、ジュポポポーーー。

「ああ、んっ、んんぅ。はぁ、はぁ」

「もうすぐ終わるよー」

「はぁい、がまんしてー」

″ぃ痛いっ！！　痛いっ痛いっ痛いっ！！　は、歯の治療ってこんなに痛いの！？″

真実はこれまで重症の齲蝕に罹ったことがなく、もちろん歯髄炎の経験もなかったから、歯科治療がつらいものだと思っていなかった。今日、生まれて初めて痛い歯科治療を受けているのである。

真実は、高校生にもなって歯医者さんの治療が我慢できないなんて恥ずかしいとも思っていた。それで真実は歯科治療ユニットでからだを硬直させて必死で耐えていた。

キュイーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。

だが切削治療は、歯科衛生士の瑠美や愛里が「もうすぐ終わるよー」というのにもかかわらず、いっこうに終わらない。由里香先生は情け容赦なく真実の虫歯を削り込む。

キュイィーン、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイン、キュイン。

コォォォォーー、コォー。ジュポポポーー。

うち続く痛みに、とうとう真実の目から涙がポロポロと零れだした。

″あらあら、真実ちゃん、だいぶつらいようね。涙目になっちゃってるわ。もう少しなんだけどなぁ〜‥‥‥。がまんできないかしら？″

由里香先生は、タービンで真実の虫歯を削り込みながら、そう思っていた。

キュイーン、キュイ、キュイィーン、キュイーン、キュイ、キュイィーン。
コォー、コォォォーー。
「んんっ、んんぁ、はん、はぁん、あっあっ」
「がんばってー、もう少しだよー」
瑠美と愛里が真実を励ます。だがさきほどから真実はモゾモゾと身を捩り始め、由里香先生がキュィ〜ンと真実の虫歯を削るたびに、膝がピクン！ピクン！！と動きだし、さらにキュィ〜ンと治療が進むにつれ、今度は足がピクン！ピクン！と動き、花柄の水色のフレアーのミニスカートが捲れて、膝からずり落ちそうになる。ハンカチを持った手は握りしめられ、ハンカチはしわくちゃになっている。
″真実ちゃん、目が正直に痛みうったえてるわねー。‥‥‥もう一度麻酔ね″
キュウウウウーーーン。
大きな音を立てて、タービンが止まった。
″ほっ。やっと終わった″
真実は涙を流していたが、泣き声を上げることなく切削治療が終わったと思い、心底ホッとした。だが次に由里香先生の口から出た言葉は、真実の安堵感を打ち消すものだった。
「真実ちゃん、麻酔するわ」
″えっ！？″
「愛里ちゃん、シンマ」
「はい、先生」
愛里がテキパキと歯科用注射器に麻酔カートリッジを装着している。見ていると、麻酔のカートリッジをアルコール綿で消毒して、カートリッジ式の注射器のピストン部を十分に引いて、カートリッジを後部からセッしている。それからピストン部を押し当てて、ディスポーザブル注射針の接続部のキャップを外して接続している。
愛里が準備を整えた浸潤麻酔を由里香先生に手渡した。
真実はさっきの麻酔注射の痛みを思い出し、動揺しながら小さな声でいった。
「大丈夫‥‥‥。いぃです。我慢できます‥‥‥」
「ダメよ。さっき涙流してたじゃない。はい、お口アーン」
と真実の口を開けさせ、由里香先生はデンタルミラーで真実の唇を捲り上げ、真実の右下の歯茎の頬側に強引に麻酔をした。
さらに、
「もう１本、打つよー」
と２本目の浸潤麻酔を愛里から受け取ると、真実の歯茎に容赦なく注射針を刺す。
「ううっ、ふぅん、ふんふん、あひっ、あっあっ、はぁん、うぅーん、くっくっ」
真実は痛さのあまり、うめきながら泣いた。

麻酔が効くまで５分ほど待ったあと、切削治療が再開される。
「はい、お口アーン」
「真実ちゃん、痛くないからねぇ～大きくアーンしようね～」
今日何度目だろうか、真実が口を開けると、由里香先生の持つタービンが口腔内に挿入されて、またまた真実の齲蝕した右下７番の患歯の削り込みを始める。
キュイーン、キュイーン、キュイィーーン。
キュイ、キュイ、キュィーーン。
キュ、キュイ、キュイ、キュイーン、キュイキュイーーン。
コォー、コォォォーー。ジュッ、ジュ、ジュポポポーーー。
「ふんふん、ふふん、あっあっ、はひっ、あがっ、いだぁーーー、いがぁーーーー」
「はいはい、大丈夫、大丈夫よー」
「痛くない～痛くない！　がんばろうねー。がまんしようねー」
真実が痛みのあまり脚をＸ字型に寄せ、身を捩り、頭を動かしそうになる。そのため無影灯の操作や治療器具の準備をしていた愛里が真実の頭を抑え、由里香先生が治療しやすい位置に真実の顔を向けさせる。
さらに真実が口を閉じそうになると、今度はバキュームとスリーウェイシリンジを操作していた瑠美が真実の下顎を抑え、真実の口が閉じないようにする。
キュイーン、キュイキュイ、キュイーン。
コォォォォーー、コォー。
「あっ、あっ。あがっ、あひっ、はひっ、いがあーーーーー」
「がんばってー、もうすぐ終わるよー」
「ひぃぃひぃぃ」
真実はかなり痛がって「ひぃぃひぃぃ」といながらも必死で我慢していたが、とうとう我慢しきれなくなり、膝を立てた。
そのとたん、花柄の水色のフレアーミニスカートが膝からずり落ちて、スカートが全開となった。ブラとお揃いで、真実のお気に入りの水色のパンツが丸見えとなった。
″あららー、アイドルのパンツが丸見えになっちゃった！″
瑠美と愛里は顔を見合わせる。
「真実ちゃん、パンツ見えちゃってるよー。恥ずかしい格好止めようねー」
瑠美と愛里が声を揃えて、真実に注意し、愛里が真実のスカートを戻した。真実は虫歯を削られる痛みで、それどころではなかった。
″あん、あん。痛っ！！　痛たぁ～！！　はぁん、あんあん。・・・・・・痛いっ痛いっー！！　すっごく痛いっ！！″

キュイーン、キュイーン、キュイィーーン。

「あひ、あひ、ひぃぃぃぃーー」
″うーん。真実ちゃん、麻酔が効きづらい体質みたいねぇー。‥‥‥でも、もう４本も麻酔してるし‥‥‥。これ以上の麻酔は身体に負担をかけるわ″
　キュイーン、キュイーン、キュイィーーン、キュイ、キュイ、キュィーーン。
　コォー、コォォォーー。ジュ、ジュッ、ジュポポポポーーー。
　由里香先生はタービンの操作を止めず、
「ちょっとつらいけど頑張ろうね〜」
といいながら、さらにキューン！と真実の虫歯を治療する。真実の痛がるさまは、はたで見てるだけでも痛いのがわかって可哀想なくらいだ。

　由里香先生は、今度はラウンドバーをつけた低速タービンを手に取り、さらに真実の虫歯を削り込んでいく。髄腔にある髄角も削り込み、次に行われる根管治療に備えた切削だ続く。
　キイィーン。ウィーン、ウィーン。
　キューン。キューン、キュン、キュウーン。
「はぁ、はひっ、んんっ、んんぁ、ああっ、ひぃぃ〜。痛ぁ〜」
「がまんしてー。痛くない〜痛くないよー」
　由里香先生が切削治療している真実の右下７番の患歯は、タービンで齲窩を削り込まれて大きな窩洞が形成され、歯根へと通じる歯髄が見えている。さきほどスプーンエキスカーベーダーで易削していて露髄したときから赤黒く変色していた歯髄がいっそう露わになる。歯髄炎を起こしている歯冠部歯髄を取り除くため、さらにタービンで削っていく‥‥‥。

　キュウウウウーーン。
　ひときわ大きな音をたててタービンが止まった。
　真実の口腔内からタービンが出され、ようやくタービンによる切削治療が終わった。
「はい、いいですよー。よくがんばりましたね。お口ゆすいでください」
　歯科治療ユニットが起き上がる。
″ぃ痛かった‥‥‥。痛かった‥‥‥″
　真実は握りしめてしわくちゃになったハンカチを右頬にあててしばらく身動きしない。まだ目には涙が溜まり、頬には涙に濡れた跡がある。
　やがてのろのろとした動作で、患歯に染みないようにぬるくした水が入っている銀色のコップを持つと、クチュクチュと口をゆすぎだした。スッピトンに含んだ水を吐き出す。麻酔で唇が痺れているせいか、うまく吐き出せない。

「もう一度、いす倒しますねー」
「はい、真実ちゃん、お口アーンして」

真実が口を開けると、新しいロールワッテが右側の患歯の頬側と舌側にふくませられる。
「瑠美ちゃん、クレンザー」
「はい、先生」
瑠美から由里香先生にクレンザーが渡される。
「これから神経を取っていきますから。少し痛いかもしれませんが、がまんしてくださぁーい」
そういうと、由里香先生はデンタルミラーとクレンザーを持ち、真実の口腔に挿入した。クレンザーは、大きく齲窩の開いた真実の右下７番の患歯に入り、虫歯菌に侵され歯髄炎を起こしている歯髄を抜髄する。
ギリギリ。
そんな音がしてきそうな感じで、真実の歯髄が絡め取られていく。
「うぅん、ふんふん。ひぃぃひぃぃ～。いはぁ・・・・・・ぃいはぁぁ・・・・・・ぃいはぁぁ・・・・・・。いがっ！！」
真実は、歯の中を引きちぎられそうな痛みを感じ、涙目になって声を上げる。
「はぁーい、大丈夫よー。すぐ済むから、がんばってぇー」
瑠美と愛里が声をそろえて励ます。
「はぁん、うぅっ！　ひはいっ！！　ひはいっ！！」
「真実ちゃん、がんばってくださぁーい。もう少しで済みますよ」
と由里香先生は、引き続きクレンザーで感染により炎症を起こした病的な歯髄を取り除いていく。クレンザーが真実の右下７番の患歯の根管内に残っている虫歯に侵された壊死組織、感染歯質を絡め取り、除去していく。
グリグリ、グリグリ。
「あうっ、あっ、ぁ」
「ふぅん、ふんふん、んんぁ。ひぃぃ」
「はぁい、はい、だいじょぶだよー。もう少しがまんしてねー」
「ふん、ふん、あぅ」
「痛くない、痛くないよー。すぐ済みむからねー」
「もうすぐ終わりますよ～」
由里香先生は、クレンザーで真実の歯の根管内の虫歯に侵された歯髄を絡め取ってはガーゼで拭き取り、さらに絡め取る。近心根、遠心根の順に根管治療を進めていく。
コォー、コォォォーー。ジュッ、ジュポポポポーーー。
瑠美がバキュームを操作して、真実の口腔内に溜まる唾液を吸引する。
「愛里ちゃん、ルートキャナルシリンジにネオクリーナー」
「はい、先生」
愛里は、３～１０％次亜塩素酸ナトリウム溶液であるネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジを用意し、由里香先生に手渡した。

由里香先生はルートキャナルシリンジを受け取ると、真実の右下７番の患歯の根管内に慎重に注入し、根管の中を次亜塩素酸ナトリウム溶液で満たした。次にリーマーとＫ型ファイル、Ｈ型ファイルを使い、真実の患歯の根管内に挿入した。

根管壁の全周にわたりリーミングとファイリングを行い、感染歯質を完全に除去する。リーマーやファイルに真実の患歯の根管の切削片が付着する。だいぶ歯質の変色が薄れてきた。

″……白い切削片になってきたわ。もう少しね″

由里香先生はファイルを操作しながら、思った。

グリグリ、グリグリ。

ゴシゴシ、ゴシゴシ。

由里香先生は真実の患歯の根管を容赦なく治療する。真実は歯の根から根尖にかけて不快感を感じ、声をあげる。

「あぁん、んぁ、ふぅん、んんっ」

「いはぁ……ぃいはぁぁ……ぃいはぁぁ……」

「いがっ！！」

「はいはい、だいじょうぶ、だいじょうぶ！　もう少しよー、がんばってー」

「真実ちゃん、がんばってー、もう少しがまん、がまん。もうちょっとだよー」

瑠美が励ます。

「愛里ちゃん、ネオクリーナーとオキシドール用意して」

リーマを操る手を止めずに、愛里に指示する。

「はい、先生」

返事をすると、愛里はルートキャナルシリンジに３％過酸化水素水を入れたものを用意し、由里香先生に手渡す。

「愛里ちゃん、ありがと」

由里香先生は、ネオクリーナーを入れたルートキャナルシリンジとオキシドールを入れたルートキャナルシリンジを早速使い出した。次亜塩素酸ナトリウム溶液のルートキャナルシリンジと過酸化水素水のルートキャナルシリンジを使って交互に洗浄を行う。真実の患歯の根管内の汚染物質を科学的に溶解して清掃するためだ。

「はぁ、んんっ、んんぁ、はぁ、はぁ、ひぃぃ」

「はぁーい、もう少しがまんしてね。がんばろねー」

由里香先生がルートキャナルシリンジを使いながら、真実に声をかける。

「愛里ちゃん、生理食塩水お願い」

「はい、先生」

と愛里は生理食塩水を由里香先生に手渡す。由里香先生は真実の患歯の根管を生理的食塩水で洗浄しては、エンドラチューブ（点滴針）で吸引を繰り返す。丹念に真実の患歯の根

管内を清掃して、感染した根管象牙質を徹底的に除去する。
「愛里ちゃん、ブローチ綿花」
「はい、先生」
　瑠美が真実の治療の準備段階ですでに作成し用意してあった滅菌した綿栓を太めにブローチに巻きつけたブローチ綿花を、愛里は由里香先生に手渡した。由里香先生はブローチ綿花を清掃液に浸したあと、真実の患歯の根管に挿入して根管壁を清拭する。
　由里香先生は、さらに真実の患歯の拡大形成と化学的清掃をていねいに処置していく。次に真実の患歯の歯の根管に、もう一度ブローチ綿花を挿入して根管を清潔に乾燥させる。
「ふん、ふん、ふぅん、んぁ、んんっ」
〝く、くるしぃ……、先生、くるしぃです……。まだ終わらなんですか？〟
　真実は涙目で由里香先生にうったえかけるが、
「がんばってねー、もう少しで終わりますよー」
といわれてしまった。つらい治療が終わる気配はまだない。
「愛里ちゃん、ペーパーポイント。お願いね」
「はい」
　愛里はペーパーポイントの入った容器を瑠美に渡した。由里香先生はトレイからあたらしいブローチを持つと、ペーパーポイントをつけた。フェノールカンフルの薬剤を塗布する。
「はい、じっとしていてねー」
　由里香先生は、真実の右下７番の患歯の根管に、消毒薬であるフェノールカンフルが染みこませてあるペーパーポイントを挿入して貼薬した。徹底的に根管内を消毒し、無菌状態をつくるためだ。
　由里香先生は、真実の患歯の根管の近心根、遠心根の順に、フェノールカンフルが塗布されたペーパーポイントを挿入していく。
「ふん、んんっ。はぁ、あひ、んんっ、あぁ」
「はい、大丈夫だよー。もうちょっとで終わるよー」
　さらに治療は続く。
　由里香先生はピンセットで小綿球をつまんで、ペーパーポイントが入っている真実の患歯の根管の上に置いた。次はいよいよ仮封である。
「ううぅーん、ふぅん、んんっ、んぁ、あっあっ」
〝せ、せんせい、くるしぃです……〟
　真実は治療されている右下７番の患歯の中に何か異物が入ってくるような感じがした。
「真実ちゃぁーん、もう少しで済みますからねー」
　瑠美は、真実の苦しそうな様子に気づき、声をかけて励ました。
「愛里ちゃん、ストッピング」
「はい、先生」

テンポラリーストッピングが用意される。
由里香先生は、加熱したストッパーの先でシャーレのテンポラリーストッピングをくっつけ拾い上げる。バーナーでテンポラリーストッピングを数秒間加熱する。それから真実の患歯の根管にストッピングを填入して圧接する。
「んんっ、んんぁ、ふぅん、ふんふん。ああっ」
「真実ちゃん、もう最後ですからね。がまんしくださぁーい」
ジュポーーーー。
瑠美がバキュームを使い真実の唾液を吸引しながら、ふたたび真実を励ます。
「愛里ちゃん、ネオダイン」
「はい、先生」
愛里は、酸化亜鉛ユージノールセメントであるネオダインを由里香先生に手渡す。
「ありがと」
由里香先生はネオダインを受け取ると、ストッパーで真実の右下７番の患歯に詰める。
「愛里ちゃん、グラスアイオノマーセメントを用意して」
「はい、先生」
愛里は、紙練板の上でスパチュラを使ってグラスアイオノマーセメントを練和する。
「ありがと」
由里香先生は、最後にグラスアイオノマーセメントを真実の患歯に詰めて二重に仮封をする。
「はい、真実ちゃん、お疲れさま。今日の治療は終わりましたよ。お口ゆすいでください」
由里香先生が微笑みながら、歯科治療ユニットのいすを起こしてくれた。
真実は、起き上がった歯科治療ユニットの上でしばらく放心状態だった。
ようやく今日の治療が終わった。真実の顔は汗と唾液と涙にまみれ、ぐちゃぐちゃになっている。可愛らしいアイドルの顔がだいなしだ。真実はハンカチでしばらく口を押さえている。
いままで激しく痛む重症の虫歯を治療された経験のなかった真実は、
〝痛かった‥‥‥。虫歯って痛いけど、治療ってそれ以上に痛いんだ‥‥‥〟
と心から思っていた。
それから、のろのろとスッピトンの方に向き、銀色のうがいコップを口へ持って行く。歯に染みないようにぬるくした水を含み、クチュクチュと口をゆすいだ。まだ麻酔で唇から右頬が痺れており、油断するとスッピトンとは違うところに水を吐き出しそうになる。

「今日の治療は、『診断書』に詳しく書いてお渡ししますので、かかりつけの歯医者さんに渡してください。神経を取った歯は弱くなってますので、そのままにほおっておくと抜くことになっちゃいます。いいですね、必ず続けて治療に行ってくださいね」
「それから、今日治療した右側では、歯医者さんの治療が完全に終わるまでは、堅いもの

などを噛まないようにしてください。一応、念のために痛み止めのお薬を出しておきますね」
「はぃ・・・・・・」
　真実が口をゆすぎ終わると、
「前、失礼しまぁーす。エプロン外しますねー」
と瑠美が真実の胸元の水色の歯科エプロンを外してくれる。その間に由里香先生が真実のカルテから必要事項を書き出し『診断書』をつくってくれた。
　真実が歯科治療ユニットから立ち上がり、
「ありがとうございました」
といった。
「真実ちゃん、お大事にね。はい、これ。『診断書』と痛み止めのお薬よ」
　由里香先生が『診断書』と痛み止めの薬を渡してくれる。
「ありがとうございます」
「真実ちゃん、カーディガン」
　瑠美が真実の淡いミントグリーンの薄手のニットのカーディガンをハンガーから外して、真実に渡した。真実は由里香先生からもらった『診断書』と痛み止めの薬をひとまず歯科治療ユニットにおいて、カーディガンを羽織った。
　それから真実はスリッパを脱いでハーフブーツを履いた。『診断書』と痛み止めの薬を手に持ち『ハルちゃん号』のドアから外へ出る。瑠美と愛里が見送ってくれる。真実は『ハルちゃん号』の方を振り向き、もう一度ぺこりとおじぎをした。
「真実ちゃん、お大事に」
「お大事にねー」
「はぃ」
　真実はマネージャーのありさの待つ車に向かってゆっくりと歩いていった。

「ふぅ、なんとか終わったわね」
　由里香先生が額にうっすらと汗を浮かべながらいった。時計は午後１時を少し過ぎている。アイドルの谷村真実の治療は約１時間ほどかかったことになる。
「結局、抜髄になっちゃいましたね、先生」
　瑠美がいう。
「そうね。今日は痛みをとる応急処置だけするつもりだったんだけど、エキスカーベーダーで手削してたら、予想以上に象牙質が軟化しちゃてて、すぐに露髄しちゃったのね。でっ、歯髄を診たら、炎症が進んでて感染してるし、これはもう抜髄しなきゃ、ってなっちゃったの」
「真実さんは、まだ１６歳だし、それに患歯は１２歳臼歯だからまだ根が完成してないし、できればアペキソゲーネシスで処置できたらな、って思ったんだけどね。残念だけど急性

全部性化膿性歯髄炎で、歯冠部歯髄を超えちゃってて根部歯髄まで炎症が及んでいたから、アペシフィケーションで処置したの。歯髄を取っちゃうと歯が弱くなるから、ほんとは断髄法を使って、根部歯髄の残せるアペキソゲーネシスの方がいいんだけどね」
「でも、先生」
　愛里が聞く。
「なぁに」
「アイドルでも、あんなにひどい虫歯つくっちゃうんですね。わたし『芸能人は歯が命』ってことば聞いて、アイドルはもっと歯を大切にするんだと思ってました」
　瑠美もうんうんと頷いている。
「ふたりとも、そんなこというもんじゃないの。そりゃ、アイドルだって生身の人間だもの、虫歯ができることもあるわよ。愛里ちゃんだって、瑠美ちゃんだって、それにわたしだって、いつ重症の虫歯になるかわからないじゃない」
　由里香先生がたしなめる。
「そうですね。はい、以後気をつけます」
　瑠美と愛里が反省する。
「わかればいいのよ。さっ、早く後片付けして帰らないとね」
「はい、先生」
　由里香先生、瑠美と愛里は、歯科治療ユニットの清拭や治療器具の消毒など後片付けを始めた。はやく片付けて尾花平地区を２時に出発できれば、夕方６時には『ハルちゃん号』の本拠地のＵ市の歯科医師会館に戻れる。

　ブウゥーーン。
　尾花平高原の尾花平ヒュッテに向かって、真実の乗る車が走っている。真実は過酷な歯科治療の疲れのためか、ハンカチで右頬を押さえてぐったりとして車のシートに身をまかせている。
　車のウインドウから、初夏の高原のまぶしい光がさんさんと降り注いでいる。
「‥‥‥それにしてもよかったわ、歯医者さんが見つかって」
　マネージャーのありさがいう。
「真実ちゃん、どう？　痛み取れた？」
「はぃ‥‥‥、なんとか‥‥‥。でも‥‥‥、まだ治療の痛みがあるんです‥‥‥」
　真実は右頬を押さえたまま力なく答える。まだ右頬はジンジンと痺れている。
「それは仕方ないわ‥‥‥。痛み出した虫歯の治療は、そりゃ痛いものよ。わたしも経験あるわ‥‥‥。歯医者さんっていやよね、治療痛いし」
　虫歯治療の痛さを思い出したのか、ありさが顔をしかめていう。
「ありささんも、経験あるの！？」
　真実はありさの方を向き、目を見開いて聞いた。

「そうよ。虫歯っていやね。でも虫歯って痛いけど、治療ってそれ以上痛いわよね……。苦手だなぁ〜歯医者さんって！　わたしも歯医者さん嫌いよ」
　ありさのことばを聞いて、
〝ほんと、ほんとそうよね。わたし、今までこんなにつらい治療受けたことなかったから……。虫歯や虫歯の治療がこんなに痛いものだったなんて知らなかった……。わたし……、これから歯医者さん苦手になりそう……〟
と車の窓の外の流れる景色を見ながら思っていた。
「真実ちゃん、今日はホテルに戻ったらゆっくり休んでね」
「はぃ」
「ホテルには、真実ちゃんの食事、柔らかいものを出してくれるよう、頼んでおくわね」
「ありがとうございます」
「で、あしたとあさっては、写真集の撮影よ。高城さんたちには迷惑かけちゃったし……。日程が詰っちゃうことになっちゃったけど、がんばってね」
「はい」
「それから東京戻って、ちゃんと歯の治療の続きしなきゃね。タレントは歯が命だもの」
「はぃ……」
　真実はさっきまで受けていた痛い虫歯治療を思い出し、返事が小さくなってしまう。
「大丈夫よ。事務所でいつもお願いしている『菊池歯科クリニック』っていう歯医者さんがあるの。うちのタレントはほとんどが菊池先生のお世話になってるわ。事務所の近くだし、これを機会に菊池先生に真実ちゃんの主治医になってもらいましょう」
「はぃ」
「菊池先生は、たしか無痛治療の方もやってたわ。だから心配しなくていいよ。今年の秋には主演映画の撮影も始まるんだし、いまのうちに悪いところは治しておかないとね。そうだ！　ホテル戻ったら、『菊池歯科クリニック』に予約の電話いれておくわ。いいわね、真実ちゃん」
「は、はぃ……」
　東京へ戻ったら、虫歯治療の続きを受けなくてはならない。すぐに予約の電話を入れられることをありさに告げられ、真実は憂鬱な気持ちになる。
「『診断書』見せて」
　真実が『診断書』をありさに渡した。封はされていないので、ありさが中から取り出して『診断書』を見てみた。この日の処置内容がかなり詳しく記入してある。
「この藤沢先生っていう方が診てくださったのね」
「はぃ」
「これだけ詳しく書いてあるから、菊池先生に渡したら、今後の治療もきっとスムーズに行くわね」
　ありさが『診断書』をながめながらいう。封に戻して、

「これは、わたしが預かっておくわね」
とトートバッグにしまう。
〝はぁ〜、もう治療受けたくないなぁ〜。歯医者さんってこりごり・・・・・・〟
　真実は視線を窓の外に戻し、ぼんやりと景色をながめながら思った。
　車は高原の道を尾花平ヒュッテに向かって走っていく・・・・・・。

　歯科巡回診療バス『ハルちゃん号』は、白早花村尾花平地区のような山間部にとっては、なくてはならぬ欠かせない存在だ。
　だが、白早花小学校尾花平分校・白早花中学校尾花平分校の児童・生徒たちしてみれば、恐怖の歯科治療がわざわざバスに乗ってやって来る『ハルちゃん号』は、逆にハタ迷惑な存在である。そんな児童・生徒たちの気持ちとは裏腹に、今日も歯科診療バス『ハルちゃん号』は、巡回歯科診療を続けている。
　児童・生徒たちの「痛いよぉ〜！怖いよぉ〜！やだっ！やだっ！」の声を聞きながら・・・・・・。

歯科診療録（児童・生徒用）

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	くろかわ　えりこ				
	氏名	黒　川　恵梨子				
	生年月日	1977 年　6 月　20 日生　（13歳）			性別	男・女
	住所				電話番号	
	学校名	春野中学校	学年	1 年	保護者名	
	初診日	1990 年　7 月　27 日				
	終了日	年　月　日				
	再診予定					
	［主訴］その他摘要	学校歯科検診で齲蝕が見つかり、母親に連れられて来院。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	C2″	C1	／	／	／	C2	C2	／	／	C1	／	C2″	C1	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	C3″	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C3″	C2	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	Pul	上外	1990/7/27		
1 1	C	上外	1990/7/27	1990/7/27	治癒
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録（児童・生徒用）統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
1990/7/27	6┐	インレー除去後、齲蝕罹患象牙質切削、感染歯髄抜髄。
		ネオクリーナー、オキシドールでケミカルサージ。
		ヨードグリセリン消毒を貼付、仮封。
		次回、根管治療予定。
	1┘ └1	齲蝕罹患エナメル質切削後、アマルガム充填。
		次回、アマルガム研磨予定。

歯科診療録（児童・生徒用）

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	こさか　さおり				
	氏名	小阪　早織				
	生年月日	1988 年　5 月　29 日生　（17歳）			性別	男・女
	住所				電話番号	
	学校名	雙蔭高校	学年	2 年	保護者名	
	初診日	2005 年　11 月　30 日				
	終了日	年　月　日				
	再診予定					
	［主訴］その他摘要	奥歯が染みて、来院。歯科治療は初めて。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C1	C1	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C1	C2	C1	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C2	C3	／	／	C1	／	／	／	／	／	／	／	C2	C1	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	C	上外	2005/11/30		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録（児童・生徒用）統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/11/30	6┐	齲蝕罹患象牙質切削治療。水酸化カルシウム製剤貼付。 印象取得。次回インレー充填により修復予定。

歯科診療録（児童・生徒用）

○○地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	こいけ　れい				
	氏名	小　池　　黎				
	生年月日	1993 年　9 月　3 日生 （11歳）			性別	男・女
	住所				電話番号	
	学校名	白早花小学校尾花平分校	学年	6 年	保護者名	
	初診日	2005 年　6 月　8 日				
	終了日	年　月　日				
	再診予定					
	［主訴］その他摘要	本日午前の歯科検診で、齲蝕が見つかる。午後、齲蝕の治療を開始する。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		CO	○	○	／	／	／	C2	C2	／	／	／	／	○	CO	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		CO	○	○	／	／	／	／	／	／	／	／	／	C2”	C1	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
6	C”	上外	2005/6/8		
1 1	C	上外	2005/6/8	2005/6/8	治癒
		上外			
		上外			
		上外			

○○地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録（児童・生徒用）統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/8	┌6	齲蝕罹患歯質切削。一部齲蝕象牙質を窩底に残す。
		齲窩の窩洞をネオクリーナーとオキシドールで洗浄。
		窩洞、特に残置軟化象牙質をフェノールカンフルにて消毒。
		カルビタールおよびネオダインを貼薬。
		暫間的間接歯髄覆罩法を行った後、仮封。
	1┘ └1	齲蝕罹患歯質切削後、レジン修復。

歯科診療録（児童・生徒用）

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	こいけ　みつき				
	氏名	小　池　美　月				
	生年月日	1990 年　6 月　18 日生 （14歳）			性別	男・女
	住所				電話番号	
	学校名	白早花中学校尾花平分校	学年	3 年	保護者名	
	初診日	2005 年　6 月　8 日				
	終了日	年　月　日				
	再診予定					
	［主訴］その他摘要	本日午前の歯科検診で、齲蝕が見つかる。午後、齲蝕の治療を開始する。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C1	○	／	C2	／	／	○	○	○	／	／	／	○	CO	
	上	右		E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左		上
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			下
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C3	C2”	／	／	／	／	／	／	／	／	／	○	○	C2”	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上	右		E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左		上
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E			下
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	単Pul	上外	2005/6/8		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録（児童・生徒用）統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/8	7┐	齲蝕罹患象牙質切削後、抜髄。根管、拡大形成。 ネオクリーナーとオキシドールで洗浄。 ヨードグリセリンにて根管内消毒。 ビタペックス填入後、仮封。暫間修復。 次回、根管治療予定。しばらく根管内清掃を要する。

歯科診療録（児童・生徒用）

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製

患者・受診者	ふりがな	たにむら　まみ				
	氏名	谷　村　真　実				
	生年月日	1989 年　11 月　8 日生 （15歳）			性別	男・女
	住所				電話番号	
	学校名	優愛女学館高校	学年	1 年	保護者名	
	初診日	2005 年　6 月　9 日				
	終了日	年　月　日				
	再診予定					
	［主訴］その他摘要	急患。数週間前から右下奥歯の齲蝕による鈍痛があり、一昨日から強い痛みが起こる。最近は鎮痛剤も効かない。1時間前くらいから痛みが激しくなった。				

術前歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		／	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	C1	／	〇	／	
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
		C3	〇	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／	〇	CO	
術後歯式	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8
	上 右			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	左 上		
	下			E	D	C	B	A	A	B	C	D	E	下		
	8	7	6	5	4	3	2	1	1	2	3	4	5	6	7	8

部位	傷病名	職務	開始	終了	転帰
7	急化Pul	上外	2005/6/9		
		上外			
		上外			
		上外			
		上外			

〇〇地区歯科医師会学校歯科医部会調製
歯科診療録（児童・生徒用）統一様式

月日	部位	療法・処置および経過
2005/6/9	7┐	齲蝕罹患象牙質切削中、露髄。齲窩開拡後、 天蓋、髄角除去。抜髄。 根管内にネオクリーナーを注入し、洗浄しながら拡大形成。 抜髄窩洞内をネオクリーナーとオキシドールで化学的清掃。 フェノールカンフルをペーパーポイントで根管内に貼薬。 ネオダイン貼付後、仮封。次回引き続き、根管治療予定。